○楢柶（あのけ）といへど法師程世に氣さんじなる物はなし……。（枕草子とも共通）――一段

又日本永代藏に

○人の家にありたきは、梅櫻松楓、それより金銀米錢ぞかし。（卷一、二代目に破る扇の目）――百三十九段

○用心し給へ國に賊家に鼠（同、世は欲の入札に仕合）――九十七段

等と見えてゐるのである。

兎に角、伊勢物語と徒然草、此の兩作品は通俗的にも最も流布した古文學で、分量も手頃であり、詞章も內容も比較的理解され易いので、鶴も此の兩書はかなりよく讀んでゐたらしく推し得られる。

註一　江戸文學史（上卷）第二篇第四章。

二　富士の山を見れば……その山はこゝに例へば、比叡の山をはたちばかり重ねあげたらんほどして……。

（三）其の他の古典文學との接觸（一）

西鶴文が右二書以外の古典文學と接觸してゐる面もかなりに廣い。先づは大抵の古典には一通りの關係を見出し得る。――假令單に詞句上の交渉に止まるものが多いとはいへ。

今煩を厭はず、一應の調査を試みることにする。卽ち

〔古事記〕

○あまの浮橋のもと、まだ本（ほん）の事も、さだまらずして、（一代男卷一、けした所が戀のはじまり）

○……見るも住み好げに歸らん心を忘れて、因循として立ちしに、獨りの御神（みたま）に逢ひ奉る。其形蒼海の海月の如し。（近代艷隱者卷一、樂の岩穴）

これらは又日本紀との關係とも言へる。更に此の紀の方だけからは、

〔日本書紀〕

○神代の昔より、此事戀知鳥の敎へ、男女のいたづら止むこと無し。（五人女卷三、委の關守）

○天照神代のはじめ浮橋の河原にすめる尻引といへる鳥の敎へて、衆道にもとづき……萬の蟲までも若契の形をあらはすがゆゑに、日本を蜻蛉國ともいへり。素盞烏尊老の事缺に稻田姫に戲れ……。（男色大鑑卷一、色は二つの物あらそひ）

いづれも必ずしも直接に原典からのみの影響とは斷ぜられないとしても（この程度なら在來通俗諸書に言ひ古されても來てゐたやうであるから）、少くとも間接には紀記に關係を有する古典知識である。

〔萬葉集〕

○……今君が代の道筋廣く、捨て置いても取り上げざる黃金花咲く海山まで、松に風絕え浪に音せず、

人に邪なかりしに、……陸奥に隠れなき盗賊の名取川……。（新可笑記巻五、腹からの女追剝）

これは巻一八の有名な大伴家持の歌と「道不拾遺」（戰國策）（史記には「途不拾遺」）、及び「太平之世、五日一風、十日一雨、風不鳴枝、雨不破塊」（王充論衡）の漢文の詞句とから來てゐる。（一代男（巻八、都のすがた人形）にも「時津海、浪をならさず」の句がある。）

○岩に腰かけて香に覗けば、地靈にしてさやけく、峯は白雲をかづいて秤ひ淸く、田子の浦浪、金毬をまとはして腸を斷つの思ひ、昔日赤人の詠ぜしも哀れになつかしくて、（艶隠者巻四、作り世の中）

赤人の詠は或は百人一首乃至新古今からかも知れないが、原作が萬葉にあることは無論知つてゐるのであらう。

平安朝文學から近古文學になると、一段容易に且顯著にその接觸が見出される。伊勢物語（平安時代）と徒然草（近古）の影響が最も著しいことでも類推出來るが。

〔土佐日記〕

○女方もすなる土佐日記（男色大鑑巻七の章題）

○……日記にしるして殘る物とて其名ばかり、土佐は硯の海淺き事にはあらず。（同、本文）

〔大和物語〕

○生田川に身捨てし二人も是なるべし。（一代男巻六、全盛歌書羽織）

○身がな二つ二人の男に（武家義理物語巻五の章題）

萬葉集（巻九・巻一九）にも夙く見える葦屋少女（菟原處女）の傳說を素材としてゐる歌物語（百四十九段）から來てゐることと詳說するにも及ぶまい。なほこれは源氏宇治十帖の浮舟にも關係がある。

〔枕草子〕

○うれしき物其日の男はやういぬるの、中戸であふての別れ……。（一代男巻七、諸分の日帳）

○……分けそむる葉末の露より、思ひの空に滿ちぬる悲しさ、云はで忍ぶ心の中など、思ひある間もいとをかし。中々疎からましかばと、遂うて絶えにしも悔ゆまじく、枕結ふなる宿なれど、契は同じ名殘の惜しまれ、須磨の上野の煙をかこつもをかし。夜たけなはにして琴の調高く、そゞろ歌聞くもをかし。行き交ふ友の首尾さゝやくもをかし。朝の別れを送らるゝもをかし。時移り事去りて忍びし頃の夕を追ふもをかし。（註三）云ひ續くれば言を止むる期なしなんど語るに、其興興に入りてをかし。（艶隠者巻一、勇武の四隠）（徒然草とも相類、又古今序も採入れられてゐる。）

○枇杷といへど……。（大鑑）（前出、徒然草と共通）

古今集は先に述べた通り相當に多く、拾ひ上げるのも割合にた易い。

〔古今集〕

○人はいさ心もしらずと、貫之が讀みし梅も、（一代男巻二、はにふの寢道具）

——人はいさ心も知らず故里は花ぞ昔の香に匂ひける（春上、貫之）

○なほ戀しくばと我が宿を語り（同、同巻、髮きりても捨てられぬ世）

――我が庵は三輪の山本戀しくば訪らひ來ませ杉立てる門（雜下）

○親は〳〵と尋ねければ、都のたつみ、朝日山の近き里とやさてこそ御茶のよいといふもむかし〳〵（同卷六、全盛歌書羽織）

――我が庵は都のたつみしかぞ住む世を宇治山と人はいふなり（雜下、喜撰法師）

○君が爲若菜祝ひける日も終りて、（五人女卷四、大季節は思ひの闇）

――君が爲春の野に出でて若菜摘む我が衣手に雪は降りつゝ（春上、光孝天皇）

○春の雨、玉にもぬける柳原のあたりより……。（同、同卷、蟲出しの神鳴も揮かきたる君樣）

――あさみどり絲よりかけて白露を玉にもぬける春の柳か（春上、僧正遍昭）

○大和國吉野の花は本朝の姿の山、妹背の川の中に落つる……。（俗つれ〴〵卷四、是ぞ妹背のすがた山）

――流れては妹背の山の中に落つる吉野の川のよしや世の中（戀五）

○上野の花見駕籠、隅田川の舟あそび、柳櫻をこきまぜて都の心になりて一生の安樂することも……。（織留卷一、品玉とる種の松茸）

――見渡せば柳櫻をこきまぜて都ぞ春の錦なりける（春上、素性法師）

○飛鳥川流れて早き月日の立つ事夢ぞかし。（同卷五、一日暮しの中宿）

――昨日といひ今日と暮してあすか川流れて早き月日なりけり（冬、春道列樹）

○是ぞ戀の山櫻、今は盛り、散るを惜しまぬ人は。（男色大鑑卷六、姿は連理の小櫻）

――春雨の降るは涙か櫻花散るを惜しまぬ人しなければ（春上、大友黑主）

○花橘の袖の香も、さる者は日々に疎し。（置土產）（前出、伊勢物語と共通）

――五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする（夏）

○ふれる白雪とよみし本歌の眺も……。（萬の文反古卷五、櫻よし野山雜義の冬）

――朝ぼらけ有明の月と見るまでに吉野の里に降れる白雪（冬、坂上是則）

ついでに新古今から來たものを擧げてみる。これも少くない。

（新古今集）

○早大晦日には髯も塵もなかりけり。浦の苫屋の紅葉を尋ね伊勢海老無いかといふ聲ばかり。（世間胸算用卷一、伊勢海老は春の椿）

――見渡せば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮（秋上、定家）

○昔藁葺の所は板廂となり、月漏るといへば、不破の關屋も、今は瓦葺に白土の軒も見え（同卷五、つまりての夜市）

――人住まぬ不破の關屋の板廂荒れにし後はたゞ秋の風（雜中、良經）（これに江口の尼と西行との連歌として傳へられる、月は漏り雨はたまれと思ふには賤が伏屋を葺きぞわづらふ（撰集抄卷四・謠曲雨月等。但し詞句に異同がある。）の歌が採入れられてゐる。）

○又灘の鹽燒は……。（同卷、同章）（前出、伊勢物語とも共通）

――蘆の屋の灘の鹽燒いとまなみつげの小櫛もさゝず來にけり（雜中、業平）

○……大霰降りて、板屋の軒端は荒れて、東に不破の關屋見せける（武道傳來記卷一、嚮嗒といふ俄正月）――

――前出良經の歌。

○嵐に脆き梢の一葉散りて、丹波の峰分るゝ横雲の朝（同卷八、野机の煙くらべ）

――春の夜の夢の浮橋とだえして峰に分るゝ横雲の空（春上、定家）（或はこれに同じく新古今冬、藤原雅經の「移りゆく雲に嵐の聲すなり散るかまさきの葛城の山」の詞句を合せたかと思はれる。）

○今日は逢坂の宮も藥屋も昔の人（置土產卷五、知れぬものは子の親）

――世の中はとてもかくても同じこと宮も藁屋もはてしなければ(雜下、蟬丸)(源平盛衰記(卷四五・卷四八)にも出てゐる。(但し詞句少異)いづれからかであらう。)

○昔日赤人の詠ぜしも、(艷隱者)(前出、萬葉と共材)

――田子の浦にうち出でて見れば白妙の富士の高嶺に雪は降りつゝ(冬、赤人)

右の古今と新古今とで八代集を代表させてよいと思ふが、他の勅撰集やその他の歌から來てゐるのも無論ある。(直接でなく、流布してゐる古歌として影響してゐる場合も多いであらうが)四五を例示すれば、

○なほ筑波根(註五)のはたらきの後いよ〳〵戀ぞ積りける。(武道傳來記卷一、心底をひく琵琶の海)

――筑波ねの峰より落つるみなの川戀ぞ積りて淵となりぬる(後撰、戀三、陽成院)

○行くも歸るも是や此關越えて見しに、(五人女卷三、してやられた枕の夢)

――これやこの行くも歸るも別れては知るも知らぬも逢坂の關(後撰、雜、蟬丸)

○行くも歸るもの關越えて知るも知らぬもにつきつけ商ひ(日本永代藏卷二、才覺を笠に着る大黑)――同上

○是やこの相坂山の戻り馬も、(一日玉鉾序)――同上

○思ひあればわが身よりと、讀みし女の事までも思ひ出されて、心も空になりしに、(一代男卷三、一夜の枕物ぐるひ)

――物思へば澤の螢もわが身よりあくがれ出づるたまかとぞ見る(後拾遺、神祇、和泉式部)(俊祕抄に も歌物語として載つてゐる。)

○甲斐なく立ちし名こそはかなけれ。(五人女卷四、大節季は思ひの闇)

――春の夜の夢ばかりなる手枕に甲斐なく立たむ名こそ惜しけれ(千載、雜上、周防内侍)

○……日數ふる時雨も僞のはじめごろ、(五人女卷三、してやられた枕の夢)

――僞のなき世なりけり神無月誰が誠よりしぐれそめけむ(續後拾遺、冬、定家)

○頃は神無月、僞の女心にして、(同卷五、衆道は雨の手に散る花)――同上

○心だにまことの道づれに叶ひなば、日月のあはれみ、おせんさまの情次第に……。(五人女卷二、京の水もらさぬ中忍びてあひ釘)

――心だに誠の道に叶ひなば祈らずとても神や守らむ(古歌、傳菅公詠)

なほ又以上の歌の中には、百人一首中のものが少くない。貫之の「人はいさ」、喜撰の「我が庵は」、光孝天皇の「君が爲」、是則の「朝ぼらけ」、それに赤人の「田子の浦」、それから陽成院の「筑波ね」、蟬丸の「これやこの」、周防内侍の「春の夜の」、これらは皆百人一首で有名な詠であるから、原歌集からよりは寧ろその方で――或は原歌集と相共にの場合もあるであらう。――利用を促された關係にあると觀るべきであらうと思はれる。

それから神樂歌から來たのもある。

○奈良坂や時雨に菅笠もなく、手貝といふ町より夜を籠めての旅出立、鶏も我と鳴き比べして行くは、誰が子ぞ。刀屋德内といふ者の悴、諸藝に器用なりしが……。(本朝二十不孝卷五、古き都を立ち出でて雨)

これは例の

白銀の目貫の太刀をさげはきて、奈良の都をねるは誰が子ぞ、ねるは誰が子ぞ。

が原據であること、一目瞭然である。

註一　この書が若し西鶴の作でないとすれば、この例證の資料中から除外されねばならない。以下本書引用の箇所すべて同斷。但し西鶴作說もなほ行はれてゐる以上、姑く採用の便宜に就いて置く。

二　「時移り事去り、榮しび悲しび行きかふとも」（古今集和序）

三　「云ひ續くれば、皆源氏物語・枕草紙などにことふりにたれど」（徒然草十九段）

四　西鶴作と認定するに異論もあるが、水谷氏は西鶴自筆說である。これも否定說が確實となれば、除外されねばならない。

五　筑波山下の敵討をいふ。

（四）其の他の古典文學との接觸（一）

新古今は便宜前節に含め、又徒然草は既に通觀したから、他の近古文學について檢べると、

〔方丈記〕

○袖ゆく水のしかも又同じ泪にもあらず、鴨の長明が孔子くさき身の取置も……方丈の油火消されて、心は闇になれる事もありしとなむ。（一代男卷一、袖の時雨は懸るがさいはひ）

○行く水の流れほど身のあさましきはなし、うたかたの今にも命の消えるに……（三代男卷六、小指は戀の燒付）

○庵中を見れば……棚には莊老の二書机に口寄せの香爐（懸隆者卷四、生死の海魚）

〔宇治拾遺物語〕

○二代男（卷一、親の顏は見ぬ初夢）の構想と宇治拾遺の序。（註一）

○本朝二十不孝（卷四、本に其人の面影）と宇治拾遺（卷八、獵師佛を射る事）との構想上の關係。（これはなほ後に詳說する。）

〔御伽草子〕

○これは夢かや宇津の山を越えて（置土產卷五、知れぬものは子の親）——（註二）これは夢かやうつゝかや。（既出の通り伊勢物語九段が原據であること言ふまでもない。）

○秋の夜の長物語少人のこなたより、とやかく歎かれしは、寺から里へのお兒（一代男卷一、袖の時雨は懸るがさいはひ）

○一代男（卷八）卷尾の女護の島渡りと御曹司島渡りの女護の島。

軍記物には比較的交渉が薄いのは自然であると言へようが、なほ

○今日は逢坂の宮も藥屋も昔の人（置土產）

が前に言及したやうに、新古今と源平盛衰記との共材であり、更に

○虎の尾鰐の口をのがれ、危かりし所なり。（中略）大塔宮護良（もりよし）親王の般若の箱に身を縮め、按察法印が難をのがれ給ひしも、今の思ひによも過ぎじ。（武道傳來記卷一、內儀の利發は替つた妻）

の前段が後述の如く謠曲安宅から來てゐると共に、その說話內容と、鰐（註三）の口」の詞句がある點とから、一面義經記（卷七）にも關係のあることが推知し得られ、又後段は當然太

平記（巻五、大塔宮熊野落事）から出てゐることが認められねばならない。が、兎に角軍記物からの影響は頗る少いことが目につく。西鶴はやはり軍記物趣味の人ではなかつたのであらう。この點馬琴と正反對である。代りに馬琴は又、源氏への關心は甚だ稀薄である。

近古文學で西鶴文と最も密接不離なのは、何といつても謠曲である。

〔謠曲〕

○鼓もすぐれて興なれども、跡より（註四）戀の責めくれば、そこばかりを明くれうつ程に（一代男巻一、人には見せぬ所）――松風

○若い蜑人はないかと……昔行平何ものにか、足さすらせ、しんきをとらせ給ひ、あまつさへ別れに（註五）香包・衞士籠・しやくし・摺鉢・三とせの世帯道具までとらされけるよと（同巻、煩惱の垣かき）――同上

○されば此宿に、わかさ、若松とて、兄弟の女ありける……彼のはらからの女に馴れて、其夜の枕物語、左の方にわかさ、右の方に若松（註六）と、召されさむらふぞや。今中納言平（ひら）さまと、名に立ちて、都へのぼらば、つれてゆかいではと、（巻二、旅のでき心）――同上

○……往來の駒（註七）とめて、袖うちはらふ、雪かと見れば、などとくうたひ懸けて、（同、同）――鉢木

○……降る雪馬蹄三尺深く、袖（註八）打拂ふ暇なく……。（武道傳來記巻八、播州の浦浪皆かへり討）――同上

○なんぼう、おそろしき、物語にて御座候。（一代男巻四、書の釣狐）――土蜘（註九）蛛・鉢木・七騎落

○げに〳〵花の都四條（註一〇）五條の、人通り、むかし見し山の姿もかはり、長明寺も、こゝへひけ川（註一一）原おもての石垣……。（同巻、目に三月）――熊野

○相生（註一二）の松風、小歌の聲そたのしむ。（同巻八、一盃たらいて戀里）――高砂

○髮は島田の車髪（註一三）（二代男巻二の章題）――事僧

○智惠の海廣く日本の人の働を見て、身過にうとき唐樂天が逃げて歸りし事のをかし。（日本永代藏巻二、天狗は家名の風車）――白樂天

○昔（註一四）千賀の浦を七條に移ざれし鹽釜の大臣あり。……追付朝夕の煙（註一五）絶えにし事を待ちみしに、（同巻三、國に移して風呂釜の大臣）――融

○浦の初島浪あらく、武庫の山風はげしく、夕立雲の立重なり、又知盛の出づべき氣色……。（男色大鑑巻二、傘持てもぬるゝ身）――船辨慶

○虎の尾鰐の口をのがれ、危かりし所也。九郎判官辨慶が爲に强力となり、富樫が關路にあやしめられ（註一六）（武道傳來記巻一、内儀の利發は替つた姿）――安宅

○姿の花（註一七）は根にかへり、あたら朽木となりぬ。（同巻七、我が命の早使）――東北・籔忠度

山口氏の「西鶴好色本研究」には、松風・鉢木と共に、特に謠曲盛久及び花月と一代男との關係を採上げて詳述してある。盛久は如何にもと首肯ける節がある。花月と「はにふの寢道具」の飛子との交渉も、諸國めぐりのあたり、それらしくも推せられる。併しその所論は餘りに興に乘じて聯想を飛ばすかの傾きもあつて、穿ち過ぎの感を抱かしめられる場合もないではない。「月がゆがふたの、花がねおれたの」の一句も、西鶴が自作の構想に於ける隱微の種明し的な戯れといはんよりは、寧ろ山口氏に謠曲花月

を想起させた啓示的な役目を務めた意味が大きいのではないかとさへ思はれるほどである。――或は共に眞なのかも知れぬが。

兎もあれ、西鶴文に謠曲詞章の影響の少くないことだけは、明らかに認められ得るのであるが、謠曲ばかりでなく、狂言も亦影響してゐる。

〔狂言〕

○口びろそつて中高なる貌にて、秀句よくいへる女あり、とらへて、御名ゆかしきと問へば、忠度と申す。（一代男卷一、煩惱の垢かき）――薩摩守

○一夜の枕物ぐるひ（同卷三の章題）――枕物狂

○晝の釣狐（同卷四の章題）――こんくわい（釣狐）

幸若舞曲との交渉も見出される。

〔舞曲〕

○ふせやの森に居て旅人を殺し、渡世にして、今長範といはれしが……雙六の盤を、こしらへ、二六、五三と、乞目を、うつ内に……唐土にも、此慰を、楊貴妃、處子君の、手にふれて……。（一代男卷四、因果の關守）――烏帽子折と和田酒盛

○昔の眞野の長者も、この客には、何としてかは及ぶまじ。（永代藏卷三、國に移して風呂釜の大臣）――烏帽子折

ついでに漢學の知識も西鶴文には應分に採入れられてゐるといふことをも附言して置かう。

櫻陰比事の粉本にした棠陰比事は一讀したこと言ふまでもなからうが、艶隱者の文などは特に全篇に亙つて漢文調が試みられてゐるし（これは西鶴文としては異例の方で、それ故非西鶴說の一理據ともなればなり得るのであるが、二代男にも

入海三里の氣色、蝦夷が千島の松しやれて、岩自然の美形、浪に數寄る花貝、紅雪紫蘭の眼を奪はれ夕日磯に落ちて八色の玉を洗ふ。古木青龍動かず、洲崎の金烏人を見知らず。（卷八、有るまで美人修業）

のやうな艶隱者と類した表現もある。）又一代女と遊仙窟との關係も想定可能であり、更に部分的に漢籍の影響してゐる例を拾つてみると、既出の史記乃至戰國策及び王充論衡の他にも、

○爰を以て孔子も可以人而不如鳥乎と云へり。（新可笑記卷一、梢に驚く猿の執心）――大學

○古代の人の云へり、物には同氣相求むる事善に在り。惡に殊更なり。（同卷五　腹からの女道劍）――易經

○それ窮鳥懷に入れば、獵士も殺さずといへり。（武道傳來記卷一、内儀の利發は替つた姿）――顏氏家訓窮鳥入懷仁人所憫

○三人のなきがら片里の庵に賴みて埋み名をば埋まぬ武士の甲斐々々しく……。（同卷四、無分別は見越の木登）――白氏龍門原上土、埋骨不埋名（太平記などから問接に來てゐるかも知れないが、有名な句であるから、直接と讀ても差支ないであらう。）

これらはいづれもまじめな方であるが、稍碎けては、

○……蜘の絲筋千度の網に、飛ぶ蝶羽を留められ、遽々然として、あれで果つべき夢蟲の命惜しまれ、（二

代男巻六、新龍宮の遊興）

○大鵬は九萬里翔り、周の穆王の乘られし駒を早めて（同巻、帶は紫の麈人手を握る）

のやうに莊子の齊物論や、同じく逍遙遊と列子の周穆王篇に借りたり、男色大鑑（巻四、待兼しは三年目の命）には、

花質紅顏無筆口　　夙緣薫處契同床　　只看夜々多情夢　　二六時中曾不忘

の艶詩（註一九）を引いたりする。又

○天命をしる年になりて、平生の不養生にて頓死をさられける。（永代藏巻一、世は欲の入札に仕合）――論語爲政篇五十而知天命」

○この隨夢の年の程、七十古來稀なる御身にして、世をいやましに恥ぢ給はず。（武道傳來記巻六、女の作れる男文字）――杜詩「七十古來稀」

これらは多少の皮肉な笑を籠めて、西鶴らしさが多分に出てゐる。それから馬琴が芳流閣などで得意に使ふ魯般が雲梯も、

○いつぞの時節を待てども、魯般が雲のよすがもなく（一代男巻五、後は樣つけて呼ぶ）

とあり、同じく馬琴の好きな「君者舟也、庶人者水也。水則載舟、水則覆舟」（荀子、王制篇）も、

○江はよく舟をうかべ、又よく舟を覆すの道理（武道傳來記巻一、心底をひく琵琶の海）

と出てゐて、小文（註二〇）吾の獨占を許してゐないのである。永代藏（巻一、初午は乘つてくる仕合）の卷初の一節には、

○されば天地は萬物の逆旅、光陰は百代の過客、浮世は夢幻といふ。

と、李白が「春夜宴桃李園序」の名句をば、桃青の奥の細道と引張凧なのも面白く、雙方共に篇首の文に用ゐたのも一興を催さしめる。而も先主權は當然貞享五年（元祿元年）正月刊の永代藏にある。蕉翁の旅はその翌くる元祿二年であつた。

更に西鶴の自流を發揮して、典據の原句をもぢつたものには、

○春宵一衣價千枚所也。（一代男巻六、匂ひはかづけ物）

もあれば、もつと奇拔な

○遊山ぎよつとして、阿房も賢きも出る揚屋北に構へて、近うして西に九軒町、二川溶々として鼬堀（いたちほり）、長堀流れ入る。（二代男巻八、大往生は女色の臺）

といふ愉快なのもある。前者は例の東坡の「春宵一刻直千金」、後者も有名な「蜀山兀而阿房出」の杜牧が阿房宮賦と、直ぐにわかるのであるが、後のは殊にその上文に「古文眞寶なる顏色（かほつき）せずとも」と、出所さへ說明してあるその親切さまでが亦、俳諧味たつぷりのものである。なほ武道傳來記（巻一、心底をひく琵琶の海）にも

歌臺暖響春光融々　　舞殿冷袖風雨凄々

の一聯が出てゐるが、これも阿房宮賦の一節である。鶴の好きな詩の一らしく見える。

漢籍と西鶴文との交渉といふ問題は、源氏物語の飜案としての一代男の論評に、直接の重要性は有たないのではあるけれども、鶴の和漢古典學殖の一般を考察してみる必要と、一には日本古典知識の深さへの類推の大凡の尺度にする爲とから、かく觸れてみたのである。

註一　藤岡博士の近代小説史に論述してある。山口氏の「好色二代男考」は更に字治十帖との關係をも併せ指摘してある。

二　御伽草子の慣用表現である。

三　「恐しく思はれし平泉寺をも、鰐の口を逃れたる心地して、足早に通られける」（義經記卷七、平泉寺御見物の事）因みに謠曲安宅には「毒蛇の口」とあつて、「鰐の口」の詞句は無い。

四　起臥わかで枕より、跡より戀の責め來れば、せん方涙に、伏し沈む事ぞ悲しき。（松風）（原歌枕より跡より……せん方なみぞ床中に居る（古今、誹諧歌）但し鼓を打つことが見えるから、古今の原歌からでないことが知られる。）

五　此の程の形見とて、御立烏帽子狩衣を、殘し置き給へども、（松風）

六　あら嬉しや、あれに行平の御立ちあるが、松風と召されさむらふぞや。（同上）

七・八　駒とめて袖打拂ふ陰もなし佐野のわたりの雪の夕暮（定家）（鉢木）

九　なんぼう奇特なる事にてなきか。（土蜘蛛）

一〇・一一　四條五條の橋の上、老若男女貴賤都鄙……河原おもてを過ぎ行けば……。（熊野）

一二　相生の松風、颯々の聲ぞたのしむ。（高砂）

一三　山口氏の「好色二代男考」に論述してある。

一四　融の大臣陸奥の千賀の鹽竈を、都の内に移されたる……。（融）

一五　されば歌にも、君まさで煙絶えにし鹽竈のうらさみしくも見え渡るかなと、貫之も詠めて候。（同上）（原歌、古今、哀傷）

一六　前出の「大塔宮云々」の文へ續いてゐる。「虎の尾をふみ」は安宅の句。

一七　暇申して花は根に、鳥は古巣に歸る夢の、鳥は古巣に歸るなり。（籠）（原歌、花は根に鳥は古巣に歸るなり春のとまりを知る人ぞなき（千載、春下、崇德院御製）

一八　山口氏「西鶴好色本研究參照

一九　出典未勘

二〇　里見八犬傳第六輯卷之三第五十六回

（五）西鶴文の古典味と寫實味

かく西鶴物に於ては、殆どあらゆる作品に亙つて、殆どあらゆる日本古典との接觸があると言つても謬ではない。それは主に詞章上の影響ではあるが、素材や構想にまで立入つた影響もおのづから存する場合のあること、上に引用した諸例證に就いて知られ得るであらう。卽ち彼の應現自在な妙文は、直觀の鋭さ確かさと、表現の印象的で端的なところに、他の追隨を許さざる獨特のものがあること言ふまでもない

が、一面に於てこれが誘導の契機となり、他面に於ては之を一段潤ひあらしめて、單なる事務的な印象記録の下拙な散文たらしめることから救うてゐる動力は、卽ち(1)に俳諧手法、そして(2)に和文脈と漢文脈とを混融させた古典的文體のニュアンスであると思ふ。普通に西鶴は寫實家の名を以て呼ばれる。世相考察の態度及び描寫の態度がリアリストなのである。表現の味ひ、文章美には、過大に古典的な所が多いのである。

つまり西鶴文の詩味は、上代にも中世にも亦近世の他の作家のいづれにも、見出されないヴイヴイッドな所にあることが事實であると共に、それは同時に、古典の文章味と不卽不離な境地にあるといふ關係に於て、又別樣の詩趣を併せて湛へ得てゐる。傳統の古典味をしかと踏まへて置いて、而も犀利な眼でリアリズムの描寫を成し遂げた所に、彼の不滅の價値がある。表現の點まで思ひきつて傳統から全く離脱した方がよかつたかは、又別問題として論ぜられる餘地があるが、傳統を追ひつゝその中で新しいものを創造しようとしたのが彼の態度であると言へる。謂はば、彼には、枕草子の簡潔味に源氏物語と謠曲との抒情味を加へ得た文の妙がある。それを更に獨創の現代文味と個性味とを以て、渾然たるものに作り上げた新しいスタイルを生み出してゐる。西鶴の作品は決して單なる散文ではない。少くとも枕草子を散文と呼ぶ意味に於て、又馬琴の讀本を散文と呼ぶ意味に於て散文である。一代男の如き、全篇に抒情詩味が流れてゐるが、五人女(卷三)の「人をはめたる湖」など、正に謠曲乃至、淨瑠璃の道行文に髣髴してゐる。彼が同時代の近松と同じく、淨瑠璃の作をも試みる野心があつたことも、決して偶然でないことが想見出來る。水谷氏(註)は西鶴文に古典文の殘滓のあるのを寧ろ遺憾とされてゐるかに見えるが、純正リアリズムの立場からは、此の歎聲が妥當に容認せられねばならないけれども、併し此の古典味は恐らく西鶴自身は得意としてゐた所であると思はれる。且これあるが爲に西鶴文の妙味――所謂難解と同時に含蓄の多い不可思議非凡な文章――が生れ得たのであると思ふ。

なほ後年の町人物などでは、例へば胸算用などになると、一代男などに比べて、餘程文體は寫實的になり、古典味の粉飾が減じてゐるやうに感ぜられる。卽ち世相考察の方向の轉回と共に、內容に卽應した表現が、又其處に見られるのであるが、而もやはり洗練された古典味から脫化しての現實描寫の手法に到達した垢拔けのした小氣味よい文章を成してゐる事實は否み得られないのである。

註　列傳體小說史(上卷、第三章)

四　一代男以外の作に於ける源氏の影響

以上は源氏を除いた古典に就いて瞥見してみたのであるが、次には一代男(乃至二代男)以外の作と源氏との間に於ける詞章上若しくは構想上の交渉を、一わたり調べてみよう。そしてそれは一代男の源氏飜案說を一段支持し旁證する資料が該切に加へられ得るか如何かの結果を齎すことになるであらう。

先づ單に詞句上の影響では

○うかれめの身は定め難く、つながぬ舟にたとへて浪の枕を千人にかはし(武家義理物語卷五、身がな二つ二人の男に)——帚木卷(雨夜の品定(原成句)泛乎若不繫之舟)この出典は文選鵩鳥賦)

○人の身は繫がぬ舟の如し。(懐硯卷一、照を取る漕舟の中)——同上

○今宵は月も更に都めきて……酒も半ばに二千里の外より長旅の面々一度に立ち歸りて……(俗つれ〴〵卷四、嵯峨の隱家好色庵)——須磨卷(二千里外古人心)の出典は白氏文集)

○馬はあれども歩行路の友、木幡の里に待ち合せ、(同卷三、惡性あらはす螢の光)——浮舟卷(原典引歌、山科の木幡の里に馬はあれどかちよりぞくる君を思へば(拾遺、雜戀、人麿)原歌、萬葉卷一一)

等が目につく。次で素材上では

○鼻は人の面の山なりと古詞に申傳へし。男女に限らず高下あつて、思ふまゝならぬは人の貞つきぞかし。むかし末摘といへるものすぐれて鼻醜かりしに、是も美女となんいへり。(男色大鑑卷八、別れにつらき沙室の鶴)——末摘花卷

○銀燭の光る源氏の名をうつし、須磨・やどり木・花散里・うつせみの夜のころもを飾らせ、(武道傳來記卷六、女の作れる男文字)

○世にわりなきは情の道と、源氏にも書殘せし。委に石山寺の開帳とて……(五人女卷三、人をはめたる湖)

等の諸例が拾出される。更に構想上の影響として認め得べきものも二三に止まらない。

本朝二十不孝(卷四、木陰の袖口)の越前國敦賀大湊の榎本萬左衞門の子萬太郎が、繼母を恨んでこれを父に讒し、且庭上で背中に蟲の入つたのを取捨ててくれと母に乞ひ、それを父に遠望させて、母が己れに戲れると誤認させ、遂に激怒放逐せしめたのは帚木卷に紀伊守が源氏の問に對して、「世の譬にて睦れ侍らず」と答へたその「世の譬」の內容を成す支那說話——尹吉甫の後妻が先妻の子伯奇を陷れる爲に蜂を拂はせた繼子いぢめ譚(注好選集・白氏文集等)——を逆に不孝の子に取りなしたので、これは湖月抄師說にも出てゐるから、恐らくそれなどから獲た知識(註一)であらうし、これだけならその原支那說話からの直接影響とも見られ得るけれども、その繼母が

是非に叶はぬ身とて、黑髮切つて家を出で、殊勝なる法師となりぬ。

とあるのは、明らかにかの帚木の空蟬君の後日譚(關屋卷)に相應ずるものといふべき

であるから、右の飜化もやはり帚木卷を繙讀するに際しての、註釋書からの示唆によつて構案したものであることの推斷が十分に可能である。

又五人女（卷四、雪の夜の情宿）の吉三郎が八百屋の隅に一夜を明す條の

……口を寄せけるに……久七分別して、いや〳〵根深・蒜喰ひし口中も知れずと、止めける事の嬉し。

とあるのは、帚木卷品定の蒜食ひの女からの着想らしい臭がするし、同じ五人女（卷二、踊は扇れ桶夜深けて化物）で

東窓より明り射し、隣に火打石の音、赤子泣出し、紙帳もりて夜もすがら喰はれし蚊をうらみて追拂ひ、……物のせはしき世渡りの中にも夫婦のかたらひを樂み、南枕に寢莚しどけなく……

の一節は、夕顔卷の夕顔の宿隣家の貧民生活の情景に倣つたものと思はれる。「夜深けて化物」のその所謂「樽屋に賴まれしいたづらかゝ」が仕掛の化物咄も亦、夕顔卷の變化出現の換骨奪胎であらう。

男色大鑑（卷七、螢も夜は勤めの尻）に、村山又兵衞座の太夫連が石垣町大鶴屋の二階で遊ぶ夏の夜、螢が二つ三つ座敷に飛入つて、藤村半太夫といふ美男俳優の袖にとまつたので卽興の戯れ、「螢も同じ身の上」と、平安城の道行（註二）を語ると、座中どつと笑つたが、

次第螢亂れしを不思議と人遣し見しに、闇に紛れて面影は竹の子笠を着たる法師の墨染の袖より薄葉包みし螢をひとつ〳〵、人の慰みになれるやうに放ちやりぬ。昔車の內へ投入れし事の思はれ、何とやら戀の仕懸めきてやさし。

此の奇拔な趣向の主は、實は半太夫に思を寄せてゐた或法師であつたのが、見つけられて遁げ出さうとしたはづみに、足踏みすべらして降り續く川浪に落込んだまゝ行方を失つた驅に、漫ろ哀念を生じた半太夫は遂に出家してしまつたとある。これは、螢卷の、源氏が紙（註三）に包んで置いた螢を一度に放して、その閃光で養女玉鬘の容姿を弟宮（螢兵部卿宮）に瞥見させようとした心にくい戯れを、摹本としてあること歷然である。而も車の內へ螢を投入れた故事とは、伊勢物語（三十九段）の「天の下の色好み」源至が男の相乘りしてゐる女車と知らずに仕懸けたそれを指すので、此の昔語を表にして、實は眞の原據をわざと隱さうとしたものであること、想察に難くない。

なほ又、前出武家義理物語（卷五）に於て、帚木卷の詞句と併せて「身がな二つ二人の男に」の題名が示し、且同章の內容が又示す如く、それは前にも述べた通り、大和物語の生田川傳說と同時に、宇治十帖の浮舟から來てゐること疑ないのである。

卽ち問題の一代男ならずとも、鶴の源氏から受けた影響は他にも散見する。彼の作品が接觸してゐる古典の種類が大抵の著名作に亙つてゐる事實からしても、寧ろそれは當然であらうし、萬一此の古典小說の王者のみが獨り除外せられてゐるとい

ふのであつたら、却つて問題とせられねばならぬであらう。

註一　一代男(巻一、袖の時雨は懸るがさいはひ)にも、梟、松、桂、草がくれなぐさみも……」の句があつて、これは夕顔巻の諸註釋書(紫明・河海・細流の古註から湖月抄に至るまで)に引揚せられてある白氏文集「囚宅」の一句「梟鳴松桂枝」から來てゐる。(曾我物語巻五などにも同じ典據から出た「梟松桂の枝に集くひ」の句があり、併せての影響とも觀られ得ようが、夕顔巻は鶴の特に熟讀した卷と推知し得られるから、やはり湖月抄あたりから直接にも獲られた知識を例證するものとしても矛盾は無い。)

二　宇治加賀掾の正本「平安城都遷」の「操の前道行」で、その一節の詞句として、

　　實にうつせみも螢も、わが身にそひて、ないつこがれつ、さまゝ〳〵に、やるかたわかぬふみ車

と、加賀掾の段物を集めた小竹集(西鶴の序があり、又西鶴作の淨瑠璃と傳へる「暦」の丸本も同集に收められてゐる。)に出てゐる。

三　「螢を薄きかたに」、この夕つ方いと多く包み置きて、光をつゝみ隠し給へりけるをさりげなく兎角引結ふやうにて、俄に斯く揭焉に光れるに」(螢巻)上文の「薄きかた」は「かみ」の誤かといひ(源註拾遺)或は「几帳の帷の裏」(河海)若しくは「直衣の袖」(花鳥餘情)等の諸説があるが、西鶴は紙と袖と併せ用ゐてゐる。大鑑は貞享四年刊で、拾遺の成つた元祿九年(完成は十一年)よりは以前の作である。から、契沖説に敎へられたのではなく、鶴自身の解に出たものであらう。「薄葉(薄樣)」は恐らく「薄きかた」の本文を無造作に讀過移用した結果で、彼の讀解ぶりの機敏さと觀得べく、乃至は「薄き」だけからの聯想に因る飜化の手際と目さるべきであると同時に、これが一面本據の種明しをしてゐる形である。袖の方は花鳥に就いたとしても、あり得ぬ事ではなく、又强ひて出處を穿鑿する程に泥まなくてもと思はれる。

五　西鶴文の止筆樣式と源語

かやうに一代男以外にも源氏の影響が認められるのであるが、さう思つて觀ると、西鶴文の章末に於ける止筆樣式に於て往々見受ける說話型の手法(A種)と、特に、暗示的な斷筆型の手法(B種)は、これ亦卽ち源語から學び得たものではなかつたかの感を强うせしめられるのである。

A種から先づ引例對照してみると、

〔鶴〕

○明の日早くその弄びの品々調へて贈り給ひけると。(五人女巻六、蟲出しの神鳴も裸かきたる君樣)

○母にさへ見限られて他人物になしけると。(置土產巻三、思はせ袋今は土人形)

〔源〕

○いかで御覽ぜさせむと聞え給ふとや。(野分巻)

○大臣達定め聞え給ひけりとや。(藤裏巻)

○萬に道すがら思し亂れけるとや。(手習巻)

それから又、

〔鶴〕

○これを思ふに知れた事がよしとぞ。（胸算用巻四、長崎の柱餅）
○……小さき事の思はれ泪をこぼすとのたまひけるとぞ。（大下馬巻三、八疊敷の蓮の葉）

〔源〕

○例よりは日ごろ經給ふにや少し思ひ紛れけむとぞ。（薄雲巻）
○此の御中らひの事言ひやる方なくとぞ。（夕霧巻）

なほ右のとや止めもとぞ止めも、源氏に限らず他の物語文學や說話文學の常型樣式でもあるが、主としてやはり源語から來たとしても矛盾は無い。とぞ止めは五十四帖中十帖に及んで最も多きを占め、又とや止めはこれに次いで六帖を數へるのである。（此の計數は流布本についてで、異本は多少の異同がある。）

その他斯種に屬する「となり」「ぞかし」等の說話型の止筆樣式も屢〻用ゐられてゐる。

○この氣大分仕出し家榮えしとなり。（永代藏巻六、買置は世の心やすい時）
○この鹽賣におそれ侍るとなり。（織留巻二、鹽うりの樂助）
○……自ら髮をおろし給ふとなり。（大下馬巻四、忍び扇の長歌）
○浮世に住むから師走坊主も暇のない事ぞかし。（胸算用巻五、平太郎殿）
○……また例もなきよみがへりぞかし。（大下馬巻三、面影の燒殘）

殊にとなり止めの型式は本朝櫻陰比事の各章に常用されてゐる。そしてこれらは源氏との直接關係はないとしても、類種の手法として前二類に准じて使用せられたことは疑ない。

更に興味の大きいのはB種の場合である。

〔源〕

○餘り物言ひさがなき罪さりどころなく。（夕顏巻）
○　心入る方ならませば弓張の月なき空に迷はましやは
　といふ辭たゞそれなり。いと嬉しきものから。（花宴巻）
○例の五十寺の御誦經、又かのおはします御寺にも摩訶毘盧遮那の。（若菜下巻）
○……憎からぬ程に、神のますなど。（匂宮巻）
○宰相はとかくつきづきしく。（竹河巻）

いづれも餘韻嫋々たる印象効果を絕大に擧げてゐる紫女獨特の止筆技法である。

ところが西鶴に又これに比類する表現が少からず見られるのである。

〔鶴〕

○此太夫の事は、諸人名殘惜しさは、もろこし團子へ。（三代男巻六、帶は紫の塵入手を握る）
○心の行くに任せ、又これから疊屋町へなりとも、越後町へなりとも。（同巻七、虛探せば思ひ草）
○……世には長生して見ば、まだ變つた事もなうては。（同巻八、終には掘拔の井筒）
○是前代未聞、少人の鑑かうなうては。（男色大鑑巻一、形見は貳尺三寸）
○……まことに夢と是も發心の身となりぬ。よく〳〵の思入惜しや前髮盛りに。（同巻五、江戸から壽ねて俄坊主）

○扨も若葉の根ざし深く、是ぞ戀の山櫻、今は盛り散るを惜しまぬ人は。（同卷六、委は連理の小櫻）
○……なうてならぬものは、かねの世の中。（永代藏卷三、蔓じやう常とはかはる問藥）
○……現世後世ともに取失ひ、たつた今の事見るやうな。（俗つれ〴〵卷一、過ぎて善きは親の意見あしきは酒）
○人は其時に移りて、かく淺ましく成果坊主。（同卷五、金の土用干伽羅の口乞）
○……年經し狸ども床の下より飛び出でて、今宮の松原へ失せにける。恐しきともなか〳〵。（大下馬卷三、形は畫の眞似）
○其後も心を殘し、あさましき形見えければ國中の道心者集めて弔ひけるに、影消えて伊織も危き命を。（同同卷、紫女）

最後のものは三輪式怪婚說話を素材とした所謂諸國咄の一であるが、右の末尾は脫文ではないかとさへ一應感じられる程、截斷的で、若し脫文でないなら、

○秋つ方になれば、この君は這ひゐざりなど。（柏木卷）

と頗る同巧である。但し源氏の方は河內本に隨へばその下に「し給ふさまの言ふよしもなうをかしげなれば云々」の脫落が認められねばならないことになるが、西鶴の時代は湖月抄を以て代表される靑表紙流布の時代であるから、假に流布本では脫文があるのであつても、その脫文の形をそのまゝ、源氏の例の斷筆型と彼が誤認したとしても頗る自然であり、且その事は、此の場合特に意識して之を模したのではないにしても、右の末尾の表現が寧ろ脫文の疑惑感を讀者に與へる底の印象を偶然生み出すやうな結果を示した筆致の由つて來る所以の說明には却つてなり得るであらう。（なほ河內本の本文が絕對的とは斷じ得られないのであるから、脫落でないとして、靑表紙の本文を支持するとすれば愈問題は簡單になるだけである。前出竹河卷の末尾も、河內本では違つてゐて、遽に正否は定め難い。）

そしてかやうなB種の章末斷筆型の手法は、特に一代男に於て最も多く最も顯著に見出されるといふ事實は、十分注目に値すると思ふ。卽ち

○けふ吉日の都がへり、萬の自由みやこなれや都。（卷三、戀のすて銀）
○……島臺の粧ひ、相生の松風、吉野は九十九まで。（卷五、後は樣つけて呼ぶ）
○太夫樣の黃金のはだへと、うか〳〵とさすつて居る內に、お客立たしやりませい。（卷七、口添へて酒輕籠）
○……なほ御祈念の御ため、女郎長久。（卷八、らく寢の車）

などそれで、

○假初にもかゝる一座にて、年せんさくは用捨あるべし。（卷二、はにふの寢道具）
○……燃杭に火とは、この人の昔にかへる。（同、田家にならねばならず）
○……しのぶ內こそ面白の花の都近くや。（卷三、一夜の枕物ぐるひ）

等も、之に準ずべきものである。

斯種の止筆の樣式の成立には、謠曲や淨瑠璃などから併せ得た示唆も含めて考へ

らるべきでもあらうけれど、主としては源語の卷尾の面白い樣式が、源語飜案の副產物として生んだのではなかつたか。そしてそれがやがて鶴の他の作品にも應用擴大されて行つたのではなかつたか。一代男に特に此の傾向が顯著であることが、さうした想像を一段强化してくれるのである。

如上の數例でも、一代男に特に此の傾向の顯著な事實の一半は語つてゐることになると思ふのであるが、更になほ之を補强する意味でも、或はもつと該切な擧證を提示する意味からも、以下の諸例が是非引揭せられねばならない。卽ち一代男各章の末尾にはA種のとなり止め、及びぞかし止めの說話型も用ゐられてゐる上に(註一)、章末の止筆樣式としては更に特殊な西鶴獨自の型がある。恐らくそれはB種から脫化して一歩を進めたと推し得られるもので、變種として同じくB種に含めてもよいし、或意味では、此の方こそまさしく眞に紫女の骨法を得て、源語に於て覿るB種の神髓と從つて効果とを遺憾なく發揮してゐると言つても不可なきものである。例へば

○……二人の者色々押とゞめて歸る、分別所也。（卷四、形見の水櫛）
○人の內儀むすめに聞かす事にあらず、沙汰なし〳〵。（同、寶の釣狐）
○請出して、直に、丹波に送りぬ、行方しらず。（卷五、欲の世の中に是は又）
○だん〳〵山三郎、身の上の事を、昔を今に愁歎して語りぬ、本じや。（同、命捨てての光物）
○起き驚ぎて、踏まれける、何か申して、氣に違ひける、知らずかし。（註二）（卷六、詠めは初秦）
○さてこそ御茶のよいといふもむかし〳〵。（同、全盛歌書羽織）

等がそれである。

ついでに他の作品からも拾へば（既出B種の例の中にも、此の獨自の型に進み或は進まうとしてゐると目してよいのもあるが）、

○……四人してあけて見れば數の子なり。これは〳〵。（胸算用卷四、奈良の庭竈）
○最前の長崎の男と長物語して別れける。何も忘れはせぬか、忘れな〳〵。（織留卷四、諸國の人を見しるは伊勢）
○今は堺町にて見せ物のゑんま鳥の木戸番、萬九といふ大臣これぢや〳〵。（俗つれ〳〵卷五、佛のための常燈遊女のための髮の油）
○大方ならぬ因果とや是を申すべし、悲し。（五人女卷五、脆きは命の鳥差）

など擧げ得られる。又Aの變種――Aに更に文を添加した型――で、且Bの効果をも併せ得て、而も獨自の型とすべき妙筆は、やはり五人女（卷四、樣子あつての俄坊主）の

○……吉三郎兄分なる人も、古里松前に歸り、墨染の袖とはなりけるとや。さても〳〵取集めたる戀や、哀れや、無常なり、夢なり、現なり。

の名文に止めを刺すであらう。（註三）

所詮西鶴が章末の止筆樣式に於て變化を求め、その各章の內容に卽應して自在の

妙を盡してゐるのは、もとより彼の天賦の創才によるものではあるが、その獨特の樣式――他の近古・近世小說に殆ど見ないやうな、卽ち他の彼以前及び以後の小說が斯の點でも千遍一律の定式になつてゐるのを獨り破つてゐる此の大膽な試み――の完成には、必ずや彼が一代男の飜案に當つてその粉本とした源語のそれが、同じく中古物語文學中にあつて獨り套型を打破して新しい變化の妙味を橫溢させてゐる先縱に、大きな示唆を受得したものと解して、大過ないであらうと言はうと思ふのである。そしてそれは鶴の藝術的な感覺が直接彼をして玆に着目せしめた成果であらうと共に、此の紫女の止筆樣式の獨創さは旣に夙く古來の源氏學者等の問題にしてゐる所でもあるから、註釋書に因る示唆も併せ考へられても不自然ではないといふことをも、附加して置いても、强ち蛇足でもなささうな氣がする。（なほ上揭の引例の範圍を、確定的な西鶴作だけに限定しても、前述の論結には何等の變動も起り得ないことも、容易に首肯せられ得るであらう。）

註一　となり止めは、卷一（袖の時雨は懸るがさいはひ）・卷五（一日かして何程が物ぞ）・同卷（當流の男見しらぬ）以上三章に、ぞかし止めは、卷一（別れは當座はらひ）・卷二（女はおもはくの外）・卷四（夢の太刀風）・卷五（ねがひの掘餅）・卷七（其面影は雪むかし）・同卷（新町の夕暮島原の曙）以上六章に用ゐてある。

二　形の上からはA種のぞかし止めの變種でもある。

三　源氏にも複雜な心境描出として

中將の君面の色變る心地して、怖しうも、かたじけなくも、嬉しくも、あはれにも、かたがたうつろふ心地して、涙おちぬべし。（紅葉賀卷）

口惜しくも、つらくも、むくつけくも、あはれにも、（若菜下卷）

のやうな類似の表現がある。鶴が又之にまで學んだかと敢へて言はうならば、餘りに好む所に偏するの嫌なしとせぬから、强ひて主張することは差控へる。而も姑く內容は離れても、此の面白い表現の手法が敏感な鶴の走讀の腦裡に跡を印したかも知れないといふことの想像は、これ亦十分に可能であらねばならない。

六　西鶴と飜案模擬

一代男を外にして、西鶴には先行作への模擬も飜案も無論ある。卽ち全作品としては、新可笑記の如偏子が可笑記に於ける、桑扶近代艶隱者の深草元政が扶桑隱逸傳に於ける、いづれも模擬の例であるが、勿論單なる形の上の模擬だけに終つてはゐない。更に模擬から一轉した新趣を立てたものには、支那說話の二十四孝御伽草子中にも收められて普及してゐた。）と了意の日本二十四孝とに對しての本朝二十不孝があり、模擬と飜案とを併せた形のものには、支那南宋の桂萬榮の棠陰比事とそれに擬した我が板倉政要とを併せ模した本朝櫻陰比事がある。（以上の內、決定的に西鶴作でないことの確證が擧がれば、除外さるべきものがあることと言ふまでもない。）此の櫻

陰比事は又、各話の起筆に「昔」と置き、新可笑記ではそれが「古代」とあるなど、恐らくそれは今昔物語・宇治拾遺物語の型式に從つたものであらう。いづれも結局說話文學の性質を有つ作品であるから、同類の先行作の樣式に倣ふのは、頗る自然であつたと思はれる。又一代女――特に卷首の「老女の隱家」の一章は、比丘尼懺悔物の先行作に範を仰ぐと共に、山口氏（西鶴好色本研究）に看破された如く、遊仙窟と淸少納言傳說（古事談所載）から脫化したことも確であらう。そこで斯の側からしても、彼が新體小說の創始に際して、我が物語小說の典型作たる源氏物語に恰好の粉本を索め得たであらうことは、少しも不自然ではなかつたと觀られ得るのである。

次に個々の說話に於て、先行作から構想上の示唆を受け或はそれを換骨奪胎したであらうと推定し得られる可能さのある例證亦決して少くないことは、既に前數章に於て便宜觸れてしまつた所で明らかであると思ふから、一々再說することを避けるが、唯その中でなほ說述を後章に約した一好適例に就いてだけ、特に玆で語ることにする。それは本朝二十不孝（卷四）の「本に其人の面影」と題した變化譚である。卽ち岩越作彌八彌の兄弟が母の幽靈を見て、兄は合掌して得脫を勸めるのに、弟は半弓を取つて放つたら射止められたのは古狸であつたといふ說話――但しその結末は、縱ひ變化にもせよ假にも母の姿をしたものに矢を中てたとて、八彌は却つて不孝の子として殿の御不興を蒙り、兄の方が孝心ありと御褒賞にあづかつて二十人扶持を下し置かれたといふ意外な始末になつてゐる。――であるが、これは前に摘示して置いた通り、宇治拾遺物語（卷八）の「獵師佛を射る事」の飜化であることは、兩者を照合すれば明白に首肯される所で、作彌は卽ち愛宕山の聖、八彌は無智の獵師、狸の化した母の靈は同じく狸の化した普賢菩薩に、それ〴〵相當する。而も本據說話では

聖なれど無智なれば、かやうに化されけるなり。獵師なれども、慮ありければ狸を射害し、その化けたるをあらはしけるなり。

と、皮肉を寓した諷刺になつてゐるのを、鶴は更に二重の皮肉に之を飜轉して、人世の一面を辛辣に冷嘲してゐるのである。なほ此の宇治拾遺の說話の原話は、今昔物語（卷二〇）に出てゐるが、それは「愛護山聖人被謀野猪語」として、猪の妖怪になつてゐるのに對して、これは狸となつてゐるから、やはり原話でなくて宇治拾遺から來たものであることは疑を容れない。

斯く先行說話や作品を巧に飜化してゐる幾多の例證のある一方、西鶴諸國咄（一名、近年諸國咄、大下馬）の卷一（雲中の腕押）の常陸坊海尊仙人の傳說が既に狗張子（卷一、富士塚雛）に

も取扱はれてゐることや、武家義理物語（巻一、我物ゆゑに裸川）の青砥藤綱滑川の逸話、同（同巻、癪子はむかしの面影）明智光秀の婚姻の話、本朝二十不孝（巻二、我と身を焦す釜が淵）の石川五右衛門の釜煎など、史的素材の往々收載せられてゐること等を併せ考へると、説話集的な彼の作品、卽ち大下馬や義理物語・武道傳來記又は二十不孝の類に於ける所收各説話のいづれもが、實際の見聞に常に忠實に依據してあるものとのみ見ることにはかなりの躊躇を感じさせられるものがある。中には實際の見聞に依る素材を相當潤色若しくは改變したのや、或は何等かの粉本から採つて之を逆用轉化させて興趣を增大させたものが相應にあるのではないかといふ氣がする。勿論地方の諸傳説それ自體が既に古傳説の變容である場合もあり、それをそのまゝ收錄したのもあるに違ひないが、彼の皮肉な俳諧的手法から原話の姿を殆ど捕捉出來ぬ程度に變轉せしめてしまつたのも存外に少くないのではあるまいかとさへ考へられる。さうした見解から彼の斯種の作品を改めて見直すと、例へば武道傳來記（巻八、野机の煙鏡）の佐々木虎之助の敵討譚の如き、或は近古小説の「あきみち」からの飜案ではないかの點に氣づかしめられる。餘りに兩者の內容が酷似し過ぎてゐるからである。唯、夫と仇との間に板挾みになつた女の、一は剃髮に、他は自刄に結末するのが、一面時代思潮の差異を語ると共に、なほ鶴の飜化の一端をそれが併せ示してゐると言へよう。（御伽・假名草子からの影響は一代男の女護島渡りや前述の一代女の懺悔物の形態にも觀る所である。）

斯樣にしていづれの方面から觀ても西鶴が源氏を飜案して一代男を創出したとの想定を助成する條件は十分に存立し得る。特に元祿遊里の世界と平安縉紳の風習とは、恰も一擧手一投足の勞を以て此の移植飜案を容易ならしめる底の類相を呈してゐた事實を見るに於てをやである。

七　源語の飜案としての一代男

（一）山口氏の原據考證（上）

玆で改めて前に返つて、一代男と源氏物語と、細部的に如何ほどの交渉があるかを、檢べてみたい。そしてそれは同時に山口氏の論證の嚴密な批判を行ふことにもおのづからなるのである。山口氏の考證は主として「西鶴好色本研究」及び「好色一代男の成立」（共に「江戸文學研究」所收）に於て、種々な方向から微に入り細を穿つて縱橫に試みられてある貴重な研究成果である。その內此處では主に源語と一代男との交渉といふ觀點に立つて檢討するのであることは斷るまでもないが、前章までの間に既に論述

のついでに言及した部分は、なるべく重複を避けたいけれども、全然省略することも當を得ないやうに思はれるし、又他の部分に就いても一々章節を逐うて山口説を點檢するのが忠實且親切であるけれども、餘りに明瞭な點や末梢的な點までに亙つて贅辯を費すのは、徒に紙數を重ね且煩雜に陷る惧があるしするから、便宜表示して、簡單な説明で足りる場合は備考欄だけに止め、特に詳論を要する場合、及び山口氏に言及せられてゐない資料に關して、私見を提示主張したい必要ある場合のみを、改めて後に拔出して説述したい。それに先だつて一般論としての山口説を、一應批判して置かねばならぬ。

その(一)は、

今はもういつておいてもよささうである。「好色一代男」一部五十四章、いづれか源氏物語の飜案でないものはないと。(西鶴好色本研究)

「一代男を通じて五十四話、……源氏の本文に據るもの五十三話である。(同上)

の斷定に對する疑問である。山口氏には此の確信があつたのであらうけれど、そして一々之を實證説明するの煩を避けて、一部分の理會され易い箇所に詳説を加へ、他は省略に從つてあるといふのでもあらうが、毎章一々の確證が提示せられないので

は、右の斷案は先入的な獨斷と誤認せられる憂が多分にある。貧弱な私見と薄微の努力を以てしては、到底五十三話のそれ〴〵の原據を闡明することは出來ないのみか、寧ろ五十四話悉くを源語と交渉があると考へる前提にも將た論結にも、卒直には同じ得られない。返す〳〵全篇に亙つての考證が示されてゐない——田舍源氏の研究に於て一々原據が對比せられてあるやうな(註二)——のは全く遺憾であると共に、縱ひ示されても、一代男及び二代男に於て觀る氏の考證態度に徵して、果して十分に何人をも滿足首肯せしめるものであつたか否かを保し難いからである。

その(二)は、右の(一)の斷定を前提として、强ひて此の假設を公理化しようと努力し、爲に自身でも少しく無理かと思はれるやうな場合でも、僅に一字一語の連鎖らしいものがあれば、直ちに以て原據であるとなし、却つてそれを西鶴の俳諧的手法の妙に歸して讃歎するに傾く態度に就いての疑問である。此の場合客觀的擧證が稀少であるから、さうであると觀れば見え、さうでないと觀れば又然く見え、主觀的な水掛論に終るに過ぎず、結局、地下の西鶴を起し來らねば竟に解決のつかない場合が屢生ずるのである。

その(三)は、原據の卷次を時々轉換してあることを認めながら、猶動もすれば、卷次に

拘はれがちな點についての疑問である。

その(四)は、宇治十帖からの影響を全然眼中に置かない態度――後述の如く、二代男の場合はその反對である。――への疑問である。

その他の一般的な問題では、殆ど滿幅の同感を表することが出來る。若紫と夕顏の二卷を特に數度に重ねて、或は幾つかに分割して使用してあると說いてあるのも、正論であり、又個々の場合に就いて觀る時、流石に達眼明察と敬服させられる所が少くない。以下漸次上述の諸問題が明らかにせられることを期しつゝ、對比表と論述とに移らう。

一代男源語交渉對比表

一代男章題(抄出)	山口說(原據)人物事件	源語卷名	〔肯〕=上說肯定 〔否〕=同否定 〔疑〕=同疑問 (?)=確證不十分の試見	私見人物事件	源語卷名	備考
卷一						
けした所が戀のはじまり	光源氏誕生・早熟	桐壺	〔肯〕			
はづかしながら文言葉	品定の夜の書狀	帚木	〔疑〕	玩具	若紫	但し世之介七歲の「戀はじめ」は光君七歲の「文はじめ」に基づいたのであらう。
人には見せぬ所	軒端荻を覗見する	空蟬	〔肯〕	膝枕	紅葉賀	或は然るか。山口氏所說の兼好代書事件は〔肯〕
袖の時雨は懸るがさいはひ	源氏小君の文使と男色	帚木・空蟬	〔肯〕			(說明後出)
寄れてきく程ちぎり	品定の馬頭詞	帚木	〔肯〕	夕顏上と惟光	夕顏	(右同)
煩惱の垢かき	夕顏の宿	夕顏	〔肯〕	須磨謫居と明石上	須磨・明石	(右同)
別れは當座ほらひ	六條御息所	夕顏	〔肯〕	大輔命婦と末摘花	末摘花	なほ部分的に桐壺・帚木・夕顏・若紫か(說明後出)
卷二						
はにふの寢道具	品定の夜の書狀	帚木	〔肯〕			
髮きりても捨てられぬ世	空蟬と指食女	空蟬・帚木	〔肯〕			
女はおもはくの外	北山行	若紫	〔肯〕			
誓紙のうるし判	右同	右同	〔肯〕			
旅のでき心	右同	右同	〔肯〕	雲林院詣(?)	賢木	
出家にならねばならず	右同	右同	〔肯〕			
うら屋も住所	右同	右同	〔肯〕			
卷三						
戀のすて銀	紫上調育	若紫	〔肯〕	朧月夜君	花宴	(說明後出)
袖の海の香賣				夕顏宿	夕顏	(右同)
是非もらひ着る物				末摘花	末摘花	(右同)
一夜の枕物ぐるひ	北山行	若紫		源內侍	紅葉賀	(右同)
集禮は五匁の外			〔肯〕	空蟬と指食女	空蟬・帚木	(說明後出)
口舌の事ふれ						
卷四						
因果の關守	塗籠	賢木	〔疑〕	空蟬(承前)常夏の女(?)	帚木	(說明後出)

形見の水櫛	夕顔の死	夕顔	〔背〕	（説明後出）
夢の太刀風	某院の怪	右同	〔背〕	（右同）
替つた物は男傾城	御息所侍女中將の君	右同	〔背〕	（右同）
世のつり狐	源氏の詞	右同	〔否（？）〕	原據と見做し得るか疑はしい。相當無理の嫌がある。
目に三月	青海波	紅葉賀	〔背〕	
火神鳴の雲がくれ	雷雨と召還	須磨・明石	〔背〕	（説明後出）
卷五				
後は樣つけて呼ぶ	明石上	明石	〔背〕	紫上
ねがひの搗餅	關屋の邂逅	關屋	〔背〕	蕗物合　螢火　梅枝　螢
欲の世の中に是は又				螢火　夕顔・螢
命捨てての光物				御息所怨念
卷六				
喰さして袖の橘	品定	帚木	〔背〕	玉鬘と橘　胡蝶
身は火にくばるとも	文奪ひ	夕霧		
心中箱	御息所の執心	葵	〔背〕	藤壺の髪　賢木
寝覺の菜好				御息所と指食女　夕顔　帚木
匂ひはかづけ物	玉鬘	螢	〔否〕	
全盛歌書羽織	春秋の爭	薄雲	〔背〕	浮舟君　浮舟
卷七				
口添へて酒輕籠	紫上の供養	御法	〔背〕	塗籠及び朧月夜君（？）　賢木
卷八				
情のかけろく	紫上追憶	幻	〔疑〕	空蟬・軒端萩（？）　帚木・空蟬
一盃たらひて戀里	源氏薨去	雲隱	〔否〕	四十賀（？）　若菜上
都のすがた人形			〔背〕	
床の責道具				

五十四章の内、〔背〕二十四、〔疑〕三、〔否〕三、〔私見新加〕十二、以上〔否〕を除き、總計三十九章。殘り十五章は原據不明。

右の中、卷一「人には見せぬ所」の其の後小箱を探し、并人形おきあがり、雲雀笛を取り揃へ……は、若紫卷の源氏が紫君を繪本玩具等を以て慰める件（及び紅葉賀卷の雛遊び）から、又幼き世之介が女の膝枕して「なほおとなしき所あり」といふのは、紅葉賀卷で、無邪氣な紫君が膝枕をしてしまつた爲、源氏が外出を中止する段を轉用したものと推定される。

「袖の時雨は懸るがさいはひ」で、幼年者が念者に戀を訴へるのは、對藤壺乃至は對空蟬に倣ふ心持もあらう。又文中「秋の夜の長物語」の語が示すやうに、中世稚兒物語の

影響も無論ある。「暗部山」の語は恐らくは若紫卷の「くらぶの山に宿りもとらまほしげなれど」の一句に、又「梟松桂」は前に觸れたやうに湖月抄に出たものと思はれる。(註二)「中川の橋かけ初めて」は、山口氏の洞察の通りであらう。

「尋ねてきく程ちぎり」の「かゝる品くだりたる宿」の句から、山口氏は品定の馬頭の詞を想起してゐるが、それが正しいと同時に、それは更に端的には、

かの下が下と、人の思ひおとしし住居なれど、……

これこそ、かの人の定めあなづりし下の品ならめ、……

と、兩度に亙つてまで品定に關聯させつゝ繰返してゐる夕顔の宿でなければならず、後段にその女の父の宿の事に移用してはあるが、「柴のあみ戸に、朝顔いとやさしく作りなし」とある文が、その種明しをして居り、又「かの女昔を隱したる心入れ」も、夕顔の性格に相應ずる。然らば世之介を案内した唐物屋の瀨平は、當然源氏の從臣惟光でなければならない。

以下二章も山口說では馬頭の詞からの着想と見てあるが、これももつと適切な原據がある。卽ち「煩惱の垢かき」の方は、冒頭の文からも須磨が直ちに聯想されるが、須磨の蜑は松風の轉化であると共に、兵庫の湯女には恐らく明石浦の明石上が擬せられてゐよう。「別れは當座はらひ」は末摘花卷で「小者上りの若き者」は、惟光よりは寧ろ大輔命婦、それが「いつぞや物語せし、歌よくうたうて……」といふ女は、琴を友としてゐる末摘花、その家が「疊は何となく打しめりて心地よからず」とあるのも、常陸宮の荒邸を思はせ、「雪のあさ〳〵降り初めし十一月三日」も同卷を聯想させ、又昔の相手が風の朝着物を贈つてくれ、母へは米・味噌・薪・家賃まで世話したと女の語るのも、絹綾綿などの末摘花への源氏の仕送りの轉用であらう。なほこの章で「世之介十二より聲も變りて……」は、桐壺卷の源氏元服に當り、女が隱した素性を語る條は、夕顔上（帚木・夕顔）に相當し、子供の誕生に「百の餅船……」は若紫卷のねのこの餅からの着想と思はれる。

卷二「はにふの寢道具」の冒頭、特に「袖など(註三)をふさぎて世の人に惜しまるゝ……」の一句は、これも桐壺卷の元服から出たものであらう。初瀨の貫之の梅の件を、平安朝氣分を出す技法とする山口說は、思ひ過しではあるまいか。さうまで言はずともこの段の飜案の解說は十分成立し得ると思ふ。花月の飛子說は面白い着眼である。

「出家にならねばならず」の十五六の香具賣を紫君に擬する山口說は明察である。僧庵の外から內の覗見を、內から外に逆用したのである。併し僧庵の敍景は、或は賢木卷の源氏雲林院詣の條が併せ借りられたのではなかつたか。「出家にならねばな

らず」の題號もそれを助證する。卽ち源氏は道心を澄ます爲に山寺へ行つたのが、なほ浮世への關心にふりかへられた。俄出家で一日二日の殊勝な阿彌陀經の世之介とどこか通ずるものがあり、僧庵生活に專念する若紫の僧都や尼君の逆對である。

卷三「袖の海の肴賣」で、鞆の津の髮長と、

其の夜あうて、其の曉の名殘しかと顏さへ見知らず、御縁があらばと、

出船に慌しく袂を分ち、而もその女に書かせた起請を入れた鼻紙入れを取り殘して來たのは、弘徽殿の細殿で、名も知らぬ女（朧月夜）と相會うて、曉慌しく扇を取り交して別れた花宴卷を模したものと推定し得る。

「是非もらひ着る物」は、夕顏・末摘花二卷を併せたかと思はれる。「西隣」に一人暮しの亡き乳母の妹と「中宿」（註四）にあかして、物つかふ男を招き」とは、夕顏卷の乳母の家の西隣（註五）と、宿守の男とに當り、聞いて戀もさめぬべし」は、末摘花の幻滅の戀を暗示する如く感ぜられ、「この行末何にかなるべし」の一句は、同卷の末句「かゝる人々の末々いかなりけむ」を當然聯想させる。

「一夜の枕物ぐるひ」は、大原のざこ寢の習俗を素材としてあるが、構想は狂言「枕物狂ひ」の老人の戀を、老女のまねした若い女に轉用してある上に、それには又伊勢物語の九十九髮と共に、それから出た紅葉賀卷の源內侍が粉本にせられてある。ざこ寢の段の「七十に及ぶばゝ驚かせ」も同じ粉本から出てゐること言を俟たない。

「口舌の事ふれ」の世之介に嚙みついた人妻は、「女はおもはくの外」と同材で特に指食女（人妻の點だけ相違）、卷三「因果の關守」の初めにこれを承けて、「出來心にて人の女を戀ひて一命あぶなく……」といふのは、その中の空蟬にだけ相當する。

「形見の水櫛」「夢の太刀風」二章の原據考證の要點は山口說に詳しいが、細部に就いての補說的な私見は、拙著對譯源氏物語講話卷三（一三二—一三三・二三八—二三九頁）に述べておいたからそれに讓ることにする。（「因果の關守」も同斷）

「替つた物は男傾城」の山口氏は、正に西鶴の狙ひを射當ててゐるが、「畫のつり狐」はかなり苦しい觀方で、そこまで强ひて原據に關係づけなくともよいのではあるまいか。源氏の「狐」の語から着想されることは有り得よう。併し語の表からは狂言「つり狐」の聯想は妥當視出來ても、この方は頗る客觀性に乏しい。それは山口氏自身ですらも認めてある所である。ついでに「替つた物は男傾城」の笑ひは、原典の源氏の言を誤解した侍童の行動を、ユーモアと見て、それの發展とするのが山口說であるが、これは山口氏の誤讀——と云はんよりは、恐らく參考せられた湖月抄師說或は源氏物語評釋

の解釋の誤が踏襲された結果――と考へられる。原典にはさういふ意味でのユーモアはない。(註六) 但し西鶴が又湖月抄による原典誤讀の結果が之を生んだのであつたかは保證の限りでない。若しさうならば、測らず山口氏と一致するわけである。

「火神鳴の雲がくれ」の末段、世之介が父の死で勘當を赦された上に、莫大な遺産を相續する幸運への轉機を、謫居から赦免召還されて、昇天の幸運に向ふ源氏に比して、何れも之を生涯の一大界線と論定した山口説は當つてゐる。巻五以前は持たざる世之介、巻五以後は持てる世之介である。(この末段遺産の俄に轉がり込む件と、巻六の「身は火にくばるとも」の夕霧の火燵の件とを併せて、近松の夕霧阿波鳴渡に粉本を與へたかと思はれる。同曲の上演は正徳二年である。)

巻五「後は様つけて呼ぶ」の「前代未聞の遊女」吉野大夫を、明石上に擬する山口説は、半ば正しい。私見に從へば明石上と紫上との合體とすべきだと思ふ。山口氏は、音樂の教養に注目してあるが、明石上の源語の女性中第一の音樂天才である點と、「一ふしをうたへば……琴彈き歌をよみ、……」の吉野のたしなみは、特に一致する。又「そなはつて賤しからず」も明石上に相當し、

世間の事も見習ひ、其のかしこさ、後の世を願ふ佛の道も、……

は、父明石入道の生活(若紫巻)を取り入れたのである。而も「奥さま」即ち正妻となるのと、一門三十五六人中にも匹敵するものなく「いづれを一つあしきと申すべき所なし」といふ完全女性は、紫上でなければならぬ。且、末章「床の責道具」の女護島渡りに、好色丸に吹き靡す「緋縮緬の吹貫」、是は昔の大夫吉野が名殘の脚布」といふのも、亡妻紫上の形見を偲ぶ幻巻――雲隱巻の前巻――の内容に合致するからである。

「欲の世の中に是は又」で、遊女等の聞香の遊びは梅枝巻の薫物合から出、その香木の「もろかづら」は、玉鬘の名を通して螢巻に連絡する。即ち

……穉まで殘る螢を數包みて、充に遣し、蚊屋の内に飛ばして……

がそれであること云ふまでもない。次の「命捨てての光物」も、亦同じ螢巻であらう。

折節五月の空闇かりしに、……數ある玉の光り物……

にその面影があり、之を怪談仕立にしたのは、西鶴の趣味であると共に、六條御息所の示唆もあらう。素材的には男色大鑑の藤村半太夫の話(四〇六頁參照)と或は同材かも知れぬ。山口説では、巻六「匂ひはかづけ物」を螢巻の趣向と目してあるが、兩者の關係は相當稀薄で、右二章の方が直接に近く、又「屁垂」と「火垂」の語源論の手數もかゝらない。巻六「喰さして袖の橘」の大阪屋の三笠は玉鬘であらう。

泪まじりの空、五月雨の比忘れては、盛りかと見し蜜柑一つ、我口添へし跡ながら、手から手に渡して、は、容器の中の橘を弄びつゝ、源氏が、

橘の香りし袖によそふれば、かれる身ともおもほえぬかな

と詠みかけて、亡き夕顔上の俤を玉鬘に見出して懐しむのを、女は

袖の香をよそふるからに橘のみさへはかなくなりもこそすれ

と應酬する胡蝶卷が原據である。後段の三笠が死を決して命危い瞬間に、世之介がかけつける構想も、「みさへはかなく……」の一句から着想されたものではあるまいか。

「心中箱」の髪の凄さは、山口説が認めらるべきと共に、賢木卷の源氏の手に握られた藤壺の髪をも當然想起させる。遊女藤浪の名もこの聯想を助ける。末段の出家も藤壺の剃髪と御息所の伊勢下りとに基づいたものであらうか。

「寢覺の菜好」の御舟が、額に浪立、眼を開き、聲荒く叫びざま、夢の中に人違へして世之介の肩先に嚙みつくのは、某院の夜の夢現に御息所の生靈が夕顔上を襲ふ嫉妬（夕顔卷）に、品定の指食を併せたと觀られ得る。

「全盛歌書羽織」の野秋が、世之介傳七二人の男に挾まれて、「兩の手に花と紅葉を詠め」といふのを、薄雲卷の春秋の優劣爭ひに出たとする山口説は正しい。その意味で野秋は、秋好中宮（齋宮女御）に恰當する。同時に

お二人の事は、車の兩輪、大方は因果のめぐり、是程ゆかしさ、いとしさ、此あ上に身がな二つほしき

と煩悶する此の女性は、生田川傳説の女主人公であると（註七）共に、浮舟君であること一目瞭然、目錄にも「野秋兩夫に見ゆる事」とある。山口氏に指摘されてないのは、一代男は源氏正篇の飜案といふ先入見があるからである。又本文中の「そのものごし、あれはどこから出る聲ぞかし」は、「例のいづくより取う出給ふ言の葉にかあらむ」（帚木卷）の一句を直感的に想起させる。

卷七「口添へて酒輕籠」の眞木の戸袋に立ち忍ぶ條は、賢木卷塗籠、後段の下駄を探されて緣の下に潜む條は、同卷朧月夜との密會を右大臣に見出されるのに出たかと思はれるが、なほ斷定を保留する。

卷八「情のかけろく」の小紫が一度男に逢うて「其の跡色々くどきても逢はず、心にくき女是也」といふのは、空蟬さながらである。（但し一度逢うた動機は全然異なり、これは却つて軒端荻に逢うた源氏を逆用した感がある代りに、「先さまの人憎さも憎し、あんな男に逢うてとらしました」と言ふ女と、「あのつらき人の強ちに世をつゝむも、流石にいとほしければ」（空蟬卷）と心を配る男君との對比が見出されるからである。）

「一盃たらひて戀里」を「紫上の追善供養の儀式の敍述に專らなる御法の靡案」と斷じた山口説には謬見がある。御法は生前紫上自身の逆修供養で、御法の卷名も紫上の「絶えぬべき御法ながらぞ」の歌から出てゐる。且、紫の死後源氏は茫然自失して、紫の法事すら指圖出來ず、夕霧大將が纔に事を行つたと幻卷に明記されてあるからである。但し西鶴は原典通りの意味で御法卷を移用したかも知れない。「東寺の御影供」「誠に佛法の書」などの句も見えるからである。又水揚の式の描寫には若菜上卷の源氏四十の賀も想到されてはゐまいか。――斷定は差控へるが。次の「都のすがた人形」も、源氏が紫上を「夢現の間にほの見る幻」とする山口説は、是又同樣の誤である。幻卷の內容を、漠然さう説くことは必ずしも不當ではない。併し卷名の因由は長恨歌に思ひ寄せた

大空を通ふまぼろし夢、にだに見えこぬ魂の行方尋ねよ

の歌で「まぼろし」は、卽ち「幻士」であり、夢現の幻ではない。之を紫を偲ぶ爲の都人形とは見做し難い。從つて西鶴の構案が其處にあらうとは思はれ得ない。寧ろその幻士に世之介自身がなつて、女護島の蓬萊仙島に貴妃ならぬ貴妃達を探し求めようとしたのが西鶴の趣向で、末章「床の責道具」にこそ幻と雲隱とを併せたものが見出されると思ふのである。

なほ源語の原據から出た章がもつとあるのかも知れないが、勘へ得ない。後考に俟つて、若し發見し得たら異日報告することにしたいと思ふ。但し五十四章のすべてが源語の原據を有せねばならない絶對的な理據は、又毫もないといふことも、同時に言つてもよいであらう。

以上山口説を檢討してみると、その成果は、

一　普通容易に原據の指摘され得る場合

二　山口説の肯定される場合

(ハ)妥當な見解　(ろ)明察

三　山口説の疑問とさるべき場合

(ハ)言ひ過ぎか　(ろ)誤見か

四　山口説の肯定され難い場合

五　山口説の補訂せられねばならぬ場合

(ハ)補足　(ろ)是正　(は)新補

の各樣の場合に類別し得る。(その一々の例證は改めて掲げるに及ぶまい。)そして

その歸結に於て、山口氏の指摘以上に原據の想定項目が却つて增加した意外の結果を見る。併しそれは山口氏の所說に背反するものでなく、一代男各章を以てすべて源語に依據してあると想定してある氏の總論を或意味に於て裏書し、そして氏が實際勞作に於て試みることをしてない部分に就いて、氏に代つて實證を與へたことに、結果として、なるだけである。而も亦それ故に一代男の每章が餘さず源語から飜案・されたとの氏の假設を無條件に承認したことにはならないといふことをも、敢へて言つて置かねばならない。更に又、氏の所說が源語との關係をつけ過ぎてあるといふ點に於ては、依然として變りはない――それとは又おのづから別である。――といふことも、誤解の無いやうに念の爲言ひ添へる。そして此の行き過ぎといふ點では、二代男の場合は、一層大きい。

註一　山口剛、修紫田舍源氏解說（日本名著全集第二十一卷）

二　四〇八頁註一參照。

三　源氏も元服と共に闕腋袍から縫腋袍（成人の服）に更めた。

四　「內裏よりまかんで給ふ中宿に大貳の乳母の……」（夕顏卷）

五　「この西なる家には何人の住むぞ……」（同）

六　拙著對譯源氏物語講話卷三、七三頁參照。

七　三八六頁參照。

（二）山口氏の原據考證（下）

扨附けて二代男、諸艶大鑑に就いて考察してみたいが、これを宇治十帖の飜案に擬するのは、水谷氏（註一）並びに山口氏であり、宇治十帖と共に、宇、治、の聯想から、宇治拾遺物語の撰述態度をも併せ採つたとするのは、藤岡博士及び山口氏であること既に說いた通りで、いづれにも大體贊意が表せられる。

宇治拾遺の方は當面の問題でない上、全體の構成といふ輪廓的な事が兩者交涉の主點であるから、源語の飜案としての二代男を考へるに際して、特に採上げて論ずる必要を感じない。唯、一代男の續篇としての二代男が、源語正篇（雲隱卷まで）の續篇としての宇治十帖に基づくといふ事は否定出來ない事實ではあるけれども、最も注意すべきは、二代男と宇治十帖との交涉は、決して一代男と源語正篇との關係ほど密接でない、否寧ろ相當に離れてゐるといふ事である。それは山口氏も十分に認めながら、然るにもかゝはらず猶その原據としての宇治十帖の各卷との交涉を、根氣よく探索しようと努力して居られる。「好色二代男考（その一・その二）」（江戸文學研究所收）は卽ちその研究報告である。併し此の相當無理な問題を何處までも究めようとの熱意には敬

服するが、成果は聊か徒勞の憾みか、さなくば牽强の嫌ひがあると難ぜられても、それを甘受されねばならないのではなからうか。

勿論その中には動かし難い好收穫はある。例へば卷一の首章「親の顏は見ぬ初夢」で、女護國から渡つて來た美面鳥が、父世之介からの色道傳授の一卷を二代男世傳に齎す初夢の原據として、横笛卷で遺愛の笛を夕霧の夢を通して薫へ傳へさせようと示唆する柏木の亡靈の出現に擬した初めの案を捨てて、宇治の八宮の許で薫が辨の君から測らず見ぬ世の父柏木の、書狀を渡される事件に吻合を見出してゐる如き、それである。特に宇治十帖の翻案といふ建前からならば、一層後の訂正案の方が肯定されねばならない。又、遺手の古狸のくにが語る諸國の諸分の原據も、宇治拾遺の語手と同時に、右の辨の君の薫への昔語りに在るとする山口氏の說も承認出來る。同じく卷一の「心を入れて釘付の枕」で薄雲太夫を背負うた奴角內、實は粹客「佐渡屋の源（げん）」の袂から「可愛らしき薫」が風に通ふのは、橋姫卷の薫大將から匂染みた狩衣を貰つた宿直人に模したといふのも肯ける。補足して言へば「源」といひ「薫」といふ種明しまでしてあるからである。但し山口說のやうに高橋太夫が薫、源が宿直人と明確に當てる程にも及ぶまいと思はれる。（私見によれば、卷一「誓紙は異見の種」の「平野橋の源（みなもと）」も亦「源」の名で暗示されてゐるやうに薫君で、これと新屋の小太夫との誓紙書きの事件には、總角卷の薫對大君の面影がある。但し斷定は敢へてすることを避ける。）又卷二「津浪は一度の濡」の

さては主ある女を宇治川へ連れし古へも思出されて、世に無き事にもあらず……。

の一節を、浮舟卷の浮舟君を船で伴ひ出した匂宮の故事とするのも當つてゐる。（山口說では後に此の章の構想の所據を總角卷と考へ直さうとしてあるが、それも理據が全然無いではないと共に――但し相當肯定には躊躇させられる。――右の出典に關しての山口氏の意見はそのまゝ殘留してゐる。）

斯樣に明察や正斷は無くはない。けれども「二代男考」の場合は、一代男の原據推考に於ける程の妥當性を、全面的に承認し、且その論斷の一々を支持する勇氣は到底持ち得ない。少くとも次の三點をその主缺陷として指摘することが出來るやうに考へる。

第一は、二代男と宇治十帖との關係を餘りにつけ過ぎてある事である。必ず交渉が相當あるべき筈といふ豫想の見地から常に兩者の關係を觀ようとする結果、頗る穿鑿に無理が行く。卷一「詰り肴に戎大黑」で遊客連が揚屋町の軒別に內を覗き廻る

のを、薫君が宇治の山莊で姉妹の姫が合奏するのを垣間見るに比したまでは假に許すとしても、飯貝が琵琶の撥の變容かとまで臆測するのは行き過ぎではなからうか。「二代男考」は總じて動もすれば此の境界に踏込みがちである。山口氏の所謂「おそるべき西鶴の幻術」(註二)ではなうて、眞におそるべき宇治十帖の幻術である。

第二は、二代男の各章の原據を宇治十帖各卷の順位と見過ぎた點である。これが初案を屢、後から變更訂正して卷次に應ぜしめた要因である。或は浮舟と言つたのを總角に、或は宿木と論じたのを椎本にと改說する類である。併しその爲に愈、原據の推斷範圍が窮屈になり、前掲の如く卷二「津浪は一度の濡」の原據を總角の紅葉舟とし、浮舟卷の方は必然後章たる卷四「忍川は盥が越す」の粉本とせねばならなかつた。而も孰れも强ひてそれと言へば言へもしようが、さうでないと否認しても抗議され得ない程、曖昧な事は事實である。後の場合など、少くとも、此の遊女花月の盥越し逃亡を、私見によれば、馬琴が朝夷巡島記(第四編卷之一)「岐塹(えだはり)の淨器舟(たらひぶね)」の義經の遺孤筐姫(かたみひめ)が盥で敵城を脱出する段に借用したり、同章の末段で蓁の下に身を匿した花月が股を突かれながら堪へる件の構想を、同じ馬琴が弓張月(拾遺卷之一、第四十六回)で、漁船の畚(ざこ)の中に寧王女を隱して危難を免れる條に使つてゐることの推定が可能なよりは、遙かに遠疎である。(それだけ西鶴の俳諧手法が幻妙であるといふ事にもなるが――若し山口氏の推定が當つてゐるとすれば)又前述の私見のやうに卷一に總角卷が擬せられる如きは、此の建前からは當然許されない。而もその卷の順位說は山口氏の主觀に多く因由し(自分では事實の考證によつてこれを確認せしめようと試みてあるが、原據の明證を缺くといふ障碍が、此の客觀的な妥當さを確立させ得ない。)てゐるので、絕對的なものではあり得ない。

第三は、一代男は源語正篇のみから、二代男は宇治十帖のみからの飜案と先入見的に設定した前提に執してゐる事である。卽ち正篇からの影響は、故意に認めようとしてない。これは前に觸れた通り、一代男の場合がそれの逆であるのと同じ態度で一貫してゐる。而もこれは又餘りに自らを拘束するものである。西鶴自身が宣言してゐない以上、一代男は正篇、二代男は宇治の卷と、整然型の如く規定してかゝらねばならぬ理由は何處にもない。奔放自在な西鶴だけに一段その遠慮は無用である。私見に從へば、卷末の一章「大往生は女色の臺」こそは、源語正篇の終、雲隱の構案を追ふものであると言ひたい。

三十三の三月十五日切に差引無しに遣ひ棄て、大盡大往生を極めける。これ世の中の浮かれ男に、物

の限りを知らしめんが爲なり。

の文がそれを端的に説明してゐる。明らかに光源氏の薨去である。宇治十帖には薫の結末は書かれてゐない。卽ち西鶴は一代男の卷末では、雲隱を「行方知れずなりにけり」といふ形に移して、空想的理想的な結末に導いた――其處には長恨歌の貴妃や浦島傳說などの聯想も手傳つてゐよう。(註三)――のと對照して、二代男では却つて同じ雲隱を再び用ゐて、今度は現實的な取扱をしてみたのである。つまり一代男では「雲隱」の字義に卽した趣向に之を利用し、二代男では古來名のみあつて本文なく、そしてそれには光源氏の薨去が豫定されてあるといふ傳へに基づいて、原典に省略された行き方を、此處では正面から寫し出さうと企てたと觀てよいと考へる。又その末段に名遊女達が文殼の煙と相應じて雲中から現じ來るのは、二十五菩薩の來迎に象つたのは言ふまでもないが、一面その吉野・和泉・吾妻・三夕・小太夫・夕霧等々の美人群は、卽ち光源氏をめぐる紫上・明石上・花散里・夕顏・六條御息所等々のそれに照應すると共に、

顧ひの道に、入野の薄萠え出で、荻の燒原に火を懸け、二代の遺繰の文積み重ね、煙の中に手を合せ、

の一節に、雲隱卷の前卷に當る幻卷で、出家を前にした光源氏が身邊を整理しながら數々の思出深き女達からの文殼を破棄し、特に紫上の分は

かきつめて見るも甲斐なしもしほ草同じ雲居の煙とをなれ

とて、「皆燒かせた」とあるのから來てゐると推斷しても、過言ではなからうと思ふ。

斯く二代男に源語正篇からの影響のあることが認められるとすれば、卷初の初夢の構想に就いての原據を橫笛卷と觀た山口氏の舊案も、無下に廢棄されねばならない必要はないと言へるかも知れない。但し改案の方を主材と目する點は無論渝らない。夢の媒介といふ形ぐらゐは或は橫笛卷のそれから併せ用ゐられても不思議はないといふ程度に於てである。共に宇治十帖の主人公たる薫君への亡父からの相傳といふ意味で注目せられ得るし、特に夢の形を採用してある點まで、山口氏の推定を誘導するに頗る自然であつたと言へるからである。萬一橫笛卷の方は穿ち過ぎる觀方として棄却されても、前述の如く橋姫卷だけでも粉本は足りるし、その場合は唯正月の初夢といふ習俗を利用したといふだけでよいわけである。

如上三點の私議は右の通りであるが、なほこれに關聯して一二試みに言つてみたい。二代男と源氏物語との素材上の接觸資料を、卷七「勤めの身は狼の切賣よりは」の本文中に見出す事を先づ報告する。

或時覺えの弱き人、わりなきは情の道と書きしは、柏木の卷には無きと爭ひ、さる太夫殿へ源氏物語を

借りに遣はしけるに、そのまゝ湖月送られて、即座にその埒も明けしに……。

といふ一節で、昔の太夫は名筆の書寫本を揃へて持つのを嗜みとしたのに、板本で間に合はす淺薄さは、此の里の太夫も末になつたと歎ぜられたといふ話の條である。これも宇治十帖とは直接の交渉はなくて、寧ろ横笛卷の方に關聯がある。「わりなき」は情の道」は西鶴の好きな句と見えて、五人女にも引いてゐることは前に述べた。(註四) それには單に「源氏」とだけであるが、これには柏木卷と出處を明示してある。二代男の刊行は五人女に先だつ二年前の貞享元年であるから、柏木卷の本文に照して確認した上で五人女に再び引用したと信じたいのであるけれども、かやうな詞句は、平安物語の慣行表現に相應はしくないことは一瞥しただけでも想像がつく。事實柏木卷には見出し得ない。即座に埒が明いたといふのは、無い事が確められたのなら當然であるが、どうも有る方に決着したやうな書きぶりに讀まれる上に、復も五人女に繰返してゐるのを見ると、西鶴は何かのはづみでさう思ひ込んでゐたのであるらしく、此處も本文爭ひは附りで――その爭ひの內容は既定の事實として問題にせず――、板本で間に合せた太夫の趣味教養を主要な話題に採上げてゐることは、明らかに看取出來る。湖月抄を知つてゐること――それは當然過ぎる事であらうが――の明

確な外證が右の文で提供されてゐると同時に、西鶴の源語知識の一面も語られてゐるやうに思はれる。

それから山口氏の鑒解態度で二代男に臨むなら、なほ種々の試案を供示することが可能である。前の源と小太夫の關係を總角卷と觀る如きもその一例であるが、やはり卷七の今述べた章の前章「惜しや姿は隱れ里」の如き、返討に遭うた愛人に似た嫖客を助太刀に賴んで、男に代り又男の爲に敵を討つといふ珍しい遊女の復讐譚で、怪談味も加はつてゐるし、源氏物語とは全く別箇の世界ながら、愛人角彌が「また逢ふまでに殘し置く」とて一腰の刀を形見に留める「格別なる戀の別れ路」は、光源氏が都へ召還の別離に、「また搔合すまでの形見に」と、手馴れの琴一張を明石上に與へる明石卷を模したと思はれ、結末の太夫長山が本懷後山籠りして若い尼姿で勤行に日を送るのは、入水から救はれた後の浮舟尼の面影(手習卷)がある。「昔の角彌に相も變らぬ男」吉澤權八は、長山の薫大將(註五)から觀れば、亡き大君に生寫しの妹浮舟君で、雙方性別を交換しただけであり、又本文の詞章中には「長山人の氣を汲みて、山の井の淺くは人に見られず……」と、若紫卷の影響(註六)も見られる。然らば此の章も亦即ち源語正篇と宇治十帖と併せ借りられてゐることになるのである。そしてそれは「二代男考」で示された山

口氏の推論程度の一般以上に、客觀的擧證を含むものと自信するけれども、猶明石卷の飜案の點だけを特に確信を以て主張するだけに留めることを以て滿足しようと思ふ。而もそれは又宇治十帖からの飜案でないことの助證を增加する結果となるのである。（山口氏の「二代男考」は遺憾にも卷四までで中絶してゐるから、此の卷までで試みられたら、或は私見と同じ論斷に一致した結果を見たかも知れないが、明石卷の方は、二代男の原據を宇治十帖に局限する氏の持說からは到底生じ得ないこと明白である。）

要するに山口說は宇治十帖に拘泥し過ぎてゐる。範圍からも卷次からも內容からも、皆さうである。所詮一個の假設として揭げて置いて、之を努めて證明しようとする態度が宣せられてあるから、それでよいのではあるが、それにしても餘りに泥み過ぎ、そしてそれだけでは自身だけの娛みに留まり、獨斷の危險性が多く、その成果に無條件に聽從することの不安が相當大きい。一代男と源語正篇との交涉考究の大功績の餘勢を驅つて、且自らその不安を十分に警戒しながらも、いつか宇治十帖の巧妙な催眠術に快く誘ひ込まれ、樂しく夢遊しつゝ、竟にその夢の中斷したまゝで終止し、結局木乃伊取が木乃伊になつた形に了つた感がある。――故人自身は恐らくは併しその作業に沒頭することに十二分の滿悅を感じて居られたのであらう事、これ亦十二分に共感させられる所である。兎に角、嚴正に觀て、一代男の原據考證は拔群の功績と絶讃したい代りに、「二代男考」の方は前に好收穫として擧げた數項目の程度に肯定を止め、他は姑く贊意を留保したいのである。從つて源氏物語の飜案としての成果を論評する對象としても、二代男は先づ殆ど問題にせずとも大過ないものと考へる。

註一　列傳體小說史上卷七二頁參照。

二　江戸文學研究一四〇頁參照。

三　「……御身の父世之介、稀に彼地に渡り給ひ、女王と玉殿の御語らひ淺からず……」（二代男卷一、親の類は見ぬ初夢）

四　四〇五頁參照。

五　然らば長山は薰と浮舟との兼役となるわけである。

六　「あさか山淺くも人を思はぬになど山の井のかけ離るらむ」「汲みそめてくやしと聞きし山の井の淺きながらや影を見すべき」

（三）西鶴の源語知識と近松及び種彥

惟ふに西鶴の源語知識は近松よりは優位に置かるべきであらうが、種彥ほどは無かつたであらうと察せられる。

近松とても源語常識を一通りだけは持ち合せてゐる。西鶴に比して甚だしき懸隔に於て輕蔑されなければならぬ程の貧困さではない。やはりそれは作家としての應分の用意から出た古典への關心に因由するものとして觀てよいであらう。彼の確定作としては猶疑問の餘地ある江州石山寺源氏供養（改作、源氏六十帖、又、石山寺開帳）・葵の上の二作を姑く措くとしても、例の弘徽殿鵜羽產家（原作、花山院后諍）の構想が、桐壺卷の弘徽殿女御と桐壺更衣乃至藤壺女御との對立、及び葵卷の車爭ひに激發した六條御息所の怨靈事件の轉用である如き、周知の事に屬する。狂言本の今源氏六十帖も――内容は源氏の飜案ではないが――その外題に源氏からの着想が示され、それに所作の猫の狂ひは必ずや女三宮の聯想に依るものがあらう。その他近松の作品で素材上、構想上、及び詞章上に於て源語の影響を受けてゐるものは相應にある。(註一) 但しそれらの中には謠曲の源氏物などを通して間接に借り用ゐられてゐる場合が少くないやうであるが、(註二) 猶原典から直接に引かれてゐると推知し得られる例證も無論擧げることが出來る。例へば、

小萩がもとを思ふにも、我が宮城野がやるせなさ（賀古教信七墓廻）

尋ね行くまぼろしもがなつてにても、つてにても、魂のありかは其處としも白露分けて……。（弘徽殿鵜羽產家）

は共に桐壺卷の桐壺帝の御製から出、

折らば落ちなん萩の上の露、拾はば消えなん玉篠の霰（相模入道千疋犬）

拾はば消えん玉篠の霰（日本西王母）

は帚木卷の雨夜の品定中の名句、――尤もこれは增鏡などにも引かれて有名であるから、必ずしも直接とのみ斷じ得られないかも知れないが、

自らこれにて琴を調べて合せんに、如何にと咎むる人あらば、帚木の卷と答ふべし。（孕常盤）

の如きは、同じく品定で馬頭が語る木枯の女彈琴の件で、かなり特殊な、そして源氏物語の本筋ではない部分であるから、原典との直接交渉と目しても大約謬りではなかならう。假に梗概書からの知識としても、少くとも輪廓だけの源語知識以上ではある。

更に、

花照姫と名にこそ立てれ色黑く丈高く、誰かあぐべきつくも髮、花のあたりの深山木と、各〻どつとぞ笑はるゝ。（天智天皇、美人ぞろへ）

は、紅葉賀卷の源氏青海波の舞と前にも觸れた同卷の老源内侍の滑稽とを採合せたもので、「花のあたりの深山木」は原典では源氏に頭中將を比較して「立並びては花の傍らの深山木なり」とあるのを、美人揃ひ中の惡女の形容に轉用したのである。（そして

その源内侍の原據を示す伊勢物語の九十九髪に、髪の緣語から同じ伊勢物語筒井筒の段の「くらべこし振分髪」の歌の末句の連結したのが、その上句の「誰かあぐべきつくも髪」で、これは「君ならずして」どころか、懼れをなして誰も擧げ手がある、まいと茶化したのである。）

又これも例の難波土產に近松の語として、

某若き時、犬内の草紙を見侍る中に、節會の折ふし、雪いたう降り積りけるに、衞士に仰せて橘の雪掃はせられければ、傍なる松の枝もたわゝなるが怨めしげに跳返りて」と書けり。是、心なき草木を開眼したる筆勢也。

と見え、此の擬人法が彼をして淨瑠璃に精神を入れる骨法を自得させた手本となつたと傳へられてゐるが、これ亦源氏末摘花卷の一節から來由してゐる。但し源氏の原典では、

橘の木の埋れたる、御隨身召して拂はせ給ふ。淡み顏に松の木のおのれ起きかへりて、さとこぼるゝ雪も、名に立つ末のと見ゆるなどを……。

とあつて、光源氏が常陸宮の姫君末摘花の許を訪れた時の事になつて居り、節會に衞士に掃はせたのとは少異がある。これは近松の記憶違ひか、聽者穗積以貫の聽き違ひ若しくは記憶違ひか、いづれかであらう。「往年某近松が許にとむらひける頃」とある難波土產の文から推して、假に後者と目しても大きな不自然さは發り得ない。「大内の草紙」といふのも、近松自身が原據を忘却したとも解せられ、或は只漠然平安朝古典の意味で言つたとも聞え、又やはり以貫の原書名の忘却或は朧記の結果とも想像されなくもない。が、これも後の場合であつても矛盾は無いのみか、寧ろそれを是認させるやうな資料が提供せられ得る。といふのは、現に近松の作品の中にも、

橘の木の埋れし御隨身召して拂はせ給へば、淡ましげに松の木のおのれとひとり起返りさつとこぼるゝその氣色、花とも波とも眺むべし。（融大臣）

或は、

歸る家路も入る山も、白妙匂ふ空の色、朝日夕日の影までも、共に凍りて松の雪、暖げなると書きたるも、是ならん。……折れ伏す岡のいざり松、おのれと枝の起返り、さら〳〵さつとこぼるゝその氣色、名に立つ末のと言置きし、末摘花の閨の雪。（源氏冷泉節）

といふ詞章が見出されるのである。兎に角、近松にとつて末摘花卷の彼の一節が頗る印象深いものであつたことは疑ひないと思はれ、且如上の詞章が難波土產所引の詞句以上に原典に忠實である上に、「松の雪暖げなると書きたるも」の一句の典據も亦同じく末摘花卷に、

いとあはれに淋しう荒れ惡へるに、松の雪のみ暖げに降り積める、山里の心地して物哀れなるを、彼の

人々の言ひし雅の門は斯樣なる所なりけむかし。

とあるに出てゐる點から言つても、少くとも近松が源氏の本文を閲讀してゐたであらうことは信じてよいと考へられるからである。それは若い時の繙讀感銘であつたらうことも信じられ得るが、その原據を忘れる程の朧げな記憶振と、それにしては作品に現れてゐる原據の明白さとは、稍撞着に近いものを示さぬではない。融大臣の著作年代は明確でないが、大體初期の作であることは疑ひない。若し想定されてゐる如く元祿七年とすれば近松四十二歳、況や冷泉節は寶永七年五十八歳で、「若き時」とは大きな距離がある。(假に融大臣の年代がもつと「若き時」に接近せしめられねばならないのであつたら、又今日では否定されてゐる冷泉節の上場が外題年鑑(明和板)通り假に元祿元年であつたとしたら、その場合「若き時」との距離が狹められる代りに、右に言ふ撞着は愈顯著さを增大することとなる。)老來執筆に際して、朧げな記憶を確めがてら原典を模索してそれを探し獲たといふことも全くあり得ないことでもなからうが、さうした穿ち過ぎの稍牽强な臆測よりも、かの引據の少謬並びに原典の不明瞭は、難波土產著者の稍漠たる往年の記憶に基づいた記述に因由する――尤も「大內の草紙」だけは、近松が意識して原書名の種明しを避けた爲であつたかも知れな

い。――と觀る方に、より自然さがあるのではあるまいか。代りに又、末摘花卷のかの一節が再度も近松の作品に於て歷然と引揭活用されてゐる此の事實は、難波土產の近松の藝術談が相當信憑されてよいものである。ことの擧證をおのづから提示してゐる點にも收穫がある。

いづれにせよ、上述の如く、近松も源氏の繙讀者であつたことは明らかであるが、併し注意すべき事は、巢林子の源氏繙讀の範圍は餘り廣いものではなく、又深いものでもなかつたらしい事である。少くとも作品に引用せられた材料から逆に源語を展望すれば、典據の卷名は、僅に桐壺・帚木・夕顏・末摘花・紅葉賀・葵・須磨・明石等の數帖に限られ、而もそれは通俗的に有名な且大略初めの方の卷々に止まつてゐる。夕顏は最も屢引かれ、この點西鶴と共通した所があると共に、此の卷が如何に源氏を代表して世俗的に最も親しまれてゐたかをも語つてゐるが、要するに近松の源語知識は所謂須磨源氏程度で、特に本文の完讀は精々桐壺・夕顏・末摘花ぐらゐに終始してゐたと臆測しては酷に失するであらうか。所詮は作家教養としての普通の古典常識以上には出ないが、それにしては先づ上の部と言つても然るべき方なのではあるまいか。そして彼の源氏物語に對する繙讀態度は、その內容よりは主として文章の手本として

といふ意味が大きかつたと觀て、大過無いのではあるまいかと思はれる。

種彦に至つては、源語に於ける親炙乃至精讀の程度に於て、從つて又源語に對する造詣の程度に於て、近・鶴二氏は到底その比でない。彼は田舍源氏の飜作に當つて、意識的に改變添加した構想を除いては、殆ど忠實に原典に依據してゐる。それは近松の詞章利用、西鶴の俳諧轉合の類ではない。(源氏の飜案といふ主點の外にも、原典の和歌を田舍源氏では發句に移し代へた點――これは源氏鬢鏡や綾足の俳諧源氏などに示唆を獲てゐると共に――で、外形的ながらも西鶴との間に或連緣は見出されるとは言へるが)一代男のやうに讀者の前に煙幕を張る態度ではなく、最初から源氏物語を飜案の原材にすることの企畫を明示し、卷を逐ふに從つて原據に卽いてゆく凝性が漸層的に加はつて行つてゐる。これは山口氏にも曾て衝かれた所であるが、(註三)「物の本江戸作者部類」の馬琴が、種彦を品黜して、女五經明石物語や、風流源氏・若草源氏・雛鶴源氏・猿源氏等の源氏俗譯書類からの間接知識に過ぎず、「田舍源氏は竊に是等を父母として作り設けたるべし。本を得しらで末取るはながれての世の常なれば」と冷笑し去つたのは、(註四)これも結局商賣敵への嫉視と、博學を以て任ずる自身すら滿足に讀めぬ源氏を、種彦輩に讀める筈が無いといふ先入見的錯覺を、不用意に曝露してゐる以外の何ものでもない。此の場合喜劇は却つて傲岸なる馬琴大先生の上にあつた。味讀如何は措くも、田舍源氏の構想と詞章とは、決して單なる梗概書や俗譯書からの間に合せ知識だけでは生成し得ないことは、原典と比讀すれば十分に理會せられるのである。(註五)學和漢に通ずる曲亭蟬史も、源氏物語に關する限り無學と、種彦からはもとより、その大先生から「肚裏に一字の文學なし」と憐まれた西鶴からすら、逆に笑殺されかねないのが皮肉である。

田舍源氏は世界を室町時代に引直して應仁の亂を絡ませてある上に、前半は特に種彦好みの芝居がかりで、平安朝の原作とは似ても似つかぬ場面が續出するが、そして卷の順序を前後に取換へたり、內容を分割したり、人物の二三を一に併せたり、それに御家騷動の紋切型で草雙紙式着色を鮮明に施したりしてあるが、そして又源氏以外から脫化して來た部分も少くないが(その中には謠曲や近松の弘徽殿鵜羽產家なども參考されてゐる。(註六))、源氏飜案の大綱は常に執り失はれてゐないばかりか、詞章上に屢、原文を殆どそのまゝと言つてよい程に借用してゐる場合が頗る多い。それは特に抒情風景詩的な箇所、所謂美文的な箇所に於て見られるのであるが、さうした部分は筋立の上に餘り關係が無いのと、それによつて一面原作の面影と美趣とを傳へ

ると共に、抒景美文の勞作を極めて賢明に節約して、而も自身の行文以上に良効果を期した彼の用意に出たものと觀てよいであらう。

例へば前に近松の場合に述べた末摘花卷の彼の一節を田舍源氏に取上げてみても、

今朝は雪も降止みて、日は高う差昇り、殘りなく見渡さるゝに、哀れに淋しう荒れまさり、只松の雪のみ曖げに降積り、山里の心地して、荒の門とは斯樣なる所をこそ言ふべけれ。……橘の木の枝重げに、降積む雪に埋れたるを、早百合を召して拂はせ給へば、拂はぬ松も淺み顏に、己とひとり起返り、梢よりさと溢るゝ雪も、名にたつ末の松山か、空より浪の越えぬ日ぞなき、といへる歌の心も思ひあはされ、

と、近松以上に原文に卽して居り、「名に立つ末の」の引歌の本歌まで採込まれてゐるのは、湖月抄(註七)からの獲得知識であらう。(註八)、その他夕顏の仲秋(田舍源氏五編上)、須磨の流謫(同十七編下・十八編上)をはじめ隨所に適例を引證することは甚だ容易である。更に風物詩的背景の箇所以外でもそれは發見せられ得る。

……返す〴〵も小王(紫上の祖母尼君に擬してある。)が病氣いたはるべしトねんごろに、言の葉(紫上の乳母少納言に擬してある。)へ言ひ置きて、立出でながら去るにても、彼らが言ふに違ひなく、いと幼げなる紫が、振舞にはあんなれど、心のまゝに教へなば、生さかしきには勝らんと、心のうちに思ひつゝ、乘物へ乘移り、硯の墨を磨流し、

鏘鶴の聲はいづこぞ八重霞

と殊更幼く書きなして、ちいさやかに引結び、すぐにかしこへ遣りければ、言の葉が受取りて、あたたのお目にとまるため、可愛らしき結文、讀みよきやうに一字づつ、拾ひ書きの美しさ、あすから是をお手本に、お手習遊ばしませト紫にこそ渡しけれ。(七編上)

これを若紫卷の原文に照合すれば、最早忍草の境域をすら超えて、相當な源語口譯の成果を齎してゐることを、何人も否定し得ないであらう。

此の傾向は田舍源氏後半に於て益〻顯著で、二十四編上の澪標卷住吉詣に於ける、三十編上の槿卷雪轉しに於ける、三十七編下の堅田(近江の君に擬してある。)の行幸卷に於ける、三十九編上下の賤機(紫黑大將北方に擬してある。)がヒステリーの眞木柱卷に於ける、飜案と言はんには、餘りに源氏の俗解に止まつて、風流源氏、紅白源氏と殆ど擇ばざる形に逆行してゐて、爲に內容の興味は激減してしまつた。卽ち種彥が原典に忠實である程、合卷物としての特色、飜案としての田舍源氏の價値は稀薄になつて來てゐる。その反面に田舍源氏の作者の源氏物語に對する精讀の程度が立證されるのである。而も此の熱心な繙讀の過程に於て、彼れの用捨箱や還魂紙料の考證趣味と相俟つて、原典の難語を解釋考證しようとした副產物まで生れた。卽ち柳亭記(卷上)に、澪標卷及び常夏卷に見える「ひぢちか」の語に關して、「ひぢちか・うちゝか」の說を提示してゐるのがそれである。所論の當否は別として、源語の讀破に相當努力した迹は、種々の點で窺はれるのである。

勿論それ故に種彦が源氏物語の勝れた味讀者心讀者であり、正しき理解者鑑賞者であつたと卽斷されることは許されない。古典專門の學者と雖も、否國學者中の而も源氏學者と雖も、宣長・廣道の源語理解、源語味讀に比肩はおろか追隨だに難い一般を考へれば、更に又田舍源氏に於ける飜作の態度並びに成果――それを招致した動因は他に種々あることも事實であるが――に照せば、さうした推斷は益、輕忽に下し得られないのみならず、寧ろ眞摯に問題として取上げる熱意が湧起しない事を告白せざるを得ない。彼の創作の全般から觀ても、亦彼の考證の一班から觀ても、彼をそれほどに過大に評價する必要がないやうに感ぜられるのである。

扨西鶴である。彼の場合は恰も右兩者の中間程度に位すると觀るが穩當であらう。單に源氏物語からの利用脫化を量的に乃至は外象的に觀ても、又源氏各卷との接觸の範圍の廣さから言つても、共に近松より大きいことは爭はれない所である。（前述諸章に於て引揭或は論及した所でも、その一斑は例證されるであらう。）源語理解・源語鑑賞の程度に於ても亦同樣の事が言へよう。代りに原典の逐語譯的丹念さにまで沒入する場合のある種彦の源語通とは又、おのづから比較にならないことも事實である。――少くともこれ亦表面的、外象的、乃至量的に觀れば、そしてそれは一方鶴は故意に原典にそのまゝ卽することを努めて避けてゐるに對し、他方柳亭は意識的に原典に接近してゐるからであることも無論であるが。

列傳體小說史に關根只誠翁談として式亭三馬の興味ある言が載せてある。

ちなみに曰ふ、三馬が學問を蔑如したることの本文にいひたる如し。或時の事なりけり、同代の戲作者墨川亭が三馬に問ふ、我れ近ごろ源氏物語末摘花の卷の講義を聞きつるが、こは幾分か戲作の幇助ともなるべくやと、三馬答へていふ、源氏物語は諸物語の翹楚なれば、雅文辭を綴るの師表とはすべけれど、戲作者には用無し。戲作者の本意は、さるむづかしきものならず。君も戲作して心を慰めんの志ならば、さる講釋を長々しく聽くには及ばず。源語をも水滸をも少しづつ聞きはつり、そを似つこらしく取做して巧に物せんこそ戲作者の腕なれ。餘りに源語に凝りすぎて、カヤ〳〵と笑ひ、サヤサヤと繰りひらきなど、なまごなしの源語風（さう）かたはらいたしとて、手を拍ちて笑ひき云々。これも故關根翁の話なり。（下卷、第二章江戸作者、式亭三馬）

此處でも亦末摘花にめぐり合せた偶然もをかしいが、最後の一節は特に衒學として彼の最も嫌忌する馬琴にあてこすつたのであらう。浮世風呂（三編卷之下）の「かも子・けり子」の滑稽も亦彼の古典學者への辛辣な諷刺である。三馬自身卽ち「似つこらしく取做して巧に物する」方で、從つてなかなか〳〵學者らしく見せる「腕」があるが、その學殖は彼自らの此の語でも底が知れる。（「カヤ〳〵と笑ひ、サヤ〳〵と繰りひらき」などを

源語の詞句と思ひ込み、それを八犬傳などで頻繁に使ふ馬琴を冷罵しようとしてゐる――同時に馬琴をも相當の源語通と買被つてゐるらしいのも笑止だが――のでも、三馬の無學ぶりが遺憾なく發揮されてゐる。）そして小說家の教養としての學、小說家の知識及び利用資材としての古典、といつた意味で一面西鶴が又、おのづから說明されてもゐる感がある。馬琴に「一字の文學なし」と評されてゐるのも其處にあらう。が馬琴のやうに彼の所謂「文學」が過剩して、眞の藝術としての「文學」の溫醸をまで妨げ、學の恩惠を通り越して、學の災禍に結果しても困り物である。（但しその平生の博識超過が無論三馬の幻視を頗る自然に誘致したのでもある。）此の點神才西鶴は天與に救はれてゐて、逆に學を自在に引きずり廻し、最少限の學を最大限に驅使してゐるかに見える。その氣構へは馬琴よりは寧ろ三馬に相通じ、而もその靈腕は到底三馬の追隨し能はざる所、更にその學問――殊に源氏物語に關して――は又明らかに三馬の企及し得ざる高さにあつた事は十分に認められざるを得ないであらう。

要するに西鶴が源氏物語を詳密に完讀したか如何かは疑問であるにしても、少くとも源語に就いての概識は謬たず持してゐたこと、走讀程度でも全篇を一應は通覽ぐらゐはしたらうこと、そして主な卷々、特に桐壺・夕顏・若紫・須磨などは相當熟讀したらうこと、それから宇治十帖の方は餘り熟讀しなかつたらうことは、推知し得るに難くないと言ふことだけは斷言して憚ないであらう。そして又彼の源氏味讀の深度は近松以上であるは言ふまでもなく、種彥と孰れが果して眞に藝術としての源氏物語に觸れ得たのであつたか――單なる知識の數量に於ては種彥に讓るとも――も、彼の藝術天分と、源語の取扱ひ方との綜合觀點から、容易に判定せられねばならないであらう。

註一　近松語彙に「源氏物語に據れるもの」として擧げてある項目十九、作品數二十八（內、重出七）。その他にも源氏に關係ある例證を拾ひ上げることが出來る。例へば「心は古にまよふ雨夜の物語」（千載集、後に薩摩守忠度と改題――帶木卷）「心づくしの秋風に、海は少し遠けれども、關吹き越ゆると眺め給ふ、浦わの波の夜々は」（松風村雨東帶鑑――須磨卷）等で、これらをまで加へれば今少し增加する。

二　問題の源氏供養・奏の上は勿論であるが、これを別にしても、「夕顏」「葵上」「野宮」等の曲や、源氏物語でなくとも、橋辨慶「松風」等から來てゐるのもある。註一の千載集の詞句も、忠度から、東帶鑑の方も、松風から、移されたのである。

人々轅に取附きつゝ、人だまひの奥に、押遣られて、物見車の力も無き身の程を思ひ知らすべし。（弘徽殿鶯羽產家）

思ひ出でたりその昔、賀茂の祭の車爭ひ、車の前後にばつとよりて、人々轅に取附きつゝ、人だまひの奥にヲ、〳〵押遣られて、物見車の力も無き、身の程ぞいとほしらしげなり。（傾

城島原蛙合戦、第五松竹梅嫁入縫形）

の如きも、原典奏卷からの引用のやうに見えて（近松語彙にはさう取扱つてある。）實は野宮からそのまゝ借用されてゐる。（旁點の部分は即ち、野宮の詞句と共通）

三　修紫田舍源氏解説、四二頁（日本名著全集第二十一卷）

四　馬琴の此の臆測は、田舍源氏第三編の卷首に「全部引書目錄」として、源氏提要・源氏小鏡以下、雛鶴・若草・風流源氏等十數書名が列擧してあるのを曾見しての論斷――それに女五經明石物語を加へて例の博覽を示したと思はれる。此の書だけ「五册」と態〻詳記してあるのにも微笑させられる。――ではあるまいか。又御伽草子の猿源氏を（源氏に關係はあるが）他の俗譯書と無造作に並記したのは、馬琴にしては稍不丹念のやうであるが、ついでに書添へたのでもあらうけれど、これも田舍源氏第七編序に「他人の猿似の猿源氏」とあるのを、粉本資料の一と即斷したに出たゞではなからうか。

五　關根只誠の隨錄に從へば、種彦は石川雅望の源語の講義をも聽き、又加藤美樹の書入本の湖月抄に據つた由である。（列傳體小說史下卷三〇二頁）

六　これも註四所出の引書目錄中に見える。なほ他の近松物、例へば槍の權三や大經師昔暦、又近松以外の諸作から着想した種明しが同じく前記第七編の序中で示されても居り、御伽草子花鳥風月の趣向を借りた事は第十三編序に明記されてゐる。他に名著全集の山口氏解説（註三參照）中で究明推考せられた原據もある。

七　註五參照。

八　後撰集戀四の本歌は「……日はなし」とあるのに、これを「日ぞなき」としたのは、古註以來後者の形で踏襲されて來たのに從つたのであることも、それを證示する。

八　飜作源語の成果

然らば西鶴の一代男に於ける源語飜案の手際は如何、その成果は如何といふと、概言して成功の部と言はねばならない。

第一に、彼は七百年前の王朝の世界を全然德川期の現代に引直し（尤も必ずしも西鶴の現時代に居た新町の夕霧の如きにモデルを限るだけでなく、稍古い時代の遊里生活に理想を置いてはゐるが、これは源氏物語の場合でも或意味でさう言へる。）唯いづれも概言しては當代の世相である。而も生活背景が西鶴並びに紫式部の孰れもの現實體驗や身邊見聞に依據してゐるものが少くない事は推斷に餘りあり、實證さへ屢〻擧げ得られるに於てをやである。）、雲上貴族の理想公子を、地下町民の理想當世男にしきつてしまつたことがその殊勳である。これまでの擬源氏物も、亦これ以後のものも、これほど徹底してゐるものはない。

第二には、戀愛から好色への移行である。「物の哀れ」から「粋」への發展である。

見そめ給ひてむ人を、御心とは忘れ給ふまじき（少女卷）

上に、

さしも深き御志無かりけるをだにおとしあぶさず、取りしたゝめ給ふ御心長さ（玉鬘卷）

といふ流石に堂上らしい典型的な鷹揚さから、

それこそ女郎の本意なれ。我見捨てじ。（一代男巻五、後は様つけて呼ぶ）

と卽夜吉野太夫を身請したほどに花街常識の極意を體得した「大大大じん」の「譯知り」への進出である。そして又同時にこれは時代の變移と生活層の差等とを語つてゐること勿論である。（性的な若さの超凡な永續性は兩者に通有して見られる所であるが、但し前者は前にも言及したやうに、精神的なものが中心であるが故に恆久の美が保持せられるに對して、後者は肉體的なものが基調となつてゐるが故に、本卦がへりの悲哀なくしては已まない。[註三]）

第三に、位から富への轉移である。權貴の誇から經濟力の强さへの置換である。これも亦時代と階級生活とによつて說明し得られる所であるが、餘りに普通に說き盡くされてゐるから、多言を加へる必要を認めない。只、其處には個人としての西鶴が特に拜金生活謳歌の雄であつたことに關しての我等の記憶を一段と新にすることの無意義でないことと、源氏物語の作者も、光源氏の經濟生活を何等否定してゐるのではなくて、唯語らないだけであるといふことを、言ひ添へて置かうと思ふ。

第四には、既に實例に就いて詳しく考察した所でも明らかなやうに、源氏の諸卷の要所は必ず之を捉へ得てゐながら、殆ど原據の面影を離れた新しい姿に轉生させてゐることである。時に夕顏卷の「別れの水櫛」や「夢の太刀風」に於ける如く、原據の痕を明示してゐる場合もなくはないが、大抵はもつと不卽不離の限界茫乎たる姿相に於て源語は新生せしめられてゐる。而も伊勢物語を織り交ぜ、謠曲を混入し、或は全然古典を忘れ、原據を棄てて、新世の活寫に沒頭する。種彥の田舍源氏每編に於ける如き確實さを以て、一代男五十四章を源氏各卷に推し當てることは不可能であり、――强ひて試みれば牽强となり――又その必要が無いのである。要するに飜譯でも擬物語でも、亦忠實な飜案でも決してない。

第五に、右におのづから關聯してもゐる事であるが、原作の構想を逆用轉化、或は離し或は接ぎ、種々變幻させてゐる。その妙味が卽ち飜作源語としての最も興趣ある所で、原據推定の作業に於て、山口氏を存分に引きずり廻して飽くまで苦しめ惑はせつゝ、同時にその困惑の中に愈愉悅感を深大ならしめた所以も其處にある。

但その文は物を賦するのみにして、一部の趣向なし。（燕石襍志卷之五上册）

と馬琴に評せられたやうに、元來西鶴の作には構想の巧みさは餘りない。彼はその點は確に馬琴の如く得意ではない。だから長篇小說が書けないのである。（構想家

でなく、長篇小説の書けないのは、紫式部の敵手たる清少納言と同素質同傾向である。）尤も右の「物を賦するのみ」は例の極言に過ぎ且稍皮相の見で、西鶴に言はせれば、馬琴流の型にはまつた構成こそ自ら藝術の天地を壺中に狹めるものと、逆に一笑に附するでもあらうが、兎に角西鶴は構想の作家ではない。唯、粉本のある構想を轉用變性させる手腕は相當獨特なものを有つてゐる。（これは又馬琴が最も得意とする所、但しその行き方は同じでないが）そこで源氏物語が粉本として採上げられれば、彼の構想手腕の貧困が大に救はれるのである。而も此の粉本たる源氏物語が又卽ち、構想を小説の最大要件として重視する行き方でないのが、おのづから又西鶴の行き方と一致もし、甚だ都合の好い手本を示してゐるのでもある。

第六には、彼の新味ある構想手法である。上述の如く、西鶴は所詮構想家ではない。それでゐて、彼には他と類を絶した特異の構想型の創出がある。卽ち一つの章の構成が、二箇のとつて附けたやうなそして互の限界の頗る模糊たる說話――乃至さうした形を有つ兩段――の結合、或は主題が孰れかと疑はれるやうな、中心が一話に二つ若しくは二つ以上存する型、といつた樣式がよく用ゐられることである。具體的の例で示せば、

一代男（卷四、形見の水櫛）｛前半――女の奪還、櫛の形見
　　後半――髏の女との再會、土葬の掘返し｝
永代藏（卷二、天狗は家名の風車）｛前半――天狗源內の鯨分限
　　後半――西宮惠比須の託宣｝
同（卷三、國に移して風呂釜の大臣）｛前半――父の遺言の「種」からの成金物語
　　後半――風呂釜大臣の榮華から沒落へ｝
胸算用（卷四、奈良の庭竈）｛前半――足切り八助
　　後半――追剝に數の子｝

のやうなのがそれである。卽ち右の第二例の如きは「鯨惠比須」が前後兩話の連鎖をなし、修練乃至苦心の努力式と信仰乃至偶然の好運式と、そのいづれもが分限獲得の機因である僞りなき生活事象を、それ〴〵眞實と皮肉とを以て興味深く讀者に印象させつゝ、而も全章を福運の氣分で一貫させてある。又第四例の如きでは「奈良の大晦日」といふ觀念が後半への聯想の楔をなして、文の上では「されば」といふ稍不明瞭で併し利便な短い接續詞で、前後の兩段が極めて手輕に結びつけられてゐる。そして或構想を有つ說話としては、八助の鮪切りと素浪人の俄追剝の失策とに二分されるが、全章の主題は却つて中間の部分に試みられてゐる大年の夜の奈良の特殊習俗の描寫に在つて、右の二箇のユーモラスな事件は、その前後に隨伴的に添加せられた所

謂落語の「まくら」と「さげ」とに過ぎない感もあり、此の章を敍述の分段に卽して觀るならば、

前――足切り八助　中――奈良の庭籠　後――追剝の喜劇

とすべきであらう。此の場合の後段の說話は「此の銀荷に心懸けて……」から始まるのであるが、それと中段の大晦日から正月へかけての行事習俗の記述との限界は、前段と中段との限界ほど判然してゐず、頗る滑らかに自然な形で漸次に話題が移行する。その印象からすれば、やはり又前後の二大段といふ構成感が妥當視せられねばならない。つまり二段と觀れば三段、三段と觀れば二段、劃然と分ち得ない所がその妙趣の存する所である。重ねて言へば、數箇――就中二個――の獨立說話の結成、そしてその分割が一見可能なやうで事實は不可能な一種獨特の構成法、それが馬琴等の企及し能はざる所のもので、此の手法が一代男でも常に新鮮さを以て我等に臨み、原據古典とは別樣の感觸を發させるのである。

これは恐らく俳諧の附合、特に談林の所謂心附から習得したものではなかつたか。（前の第四及び第五の態度並びに技法が同じく附合の骨法に出てゐること言ふまでもなく、山口氏の所述にも詳しく論及せられてゐる。）且それも彼が十分意識的に好手法として作り出したといふのではなくて、寧ろ結果として偶然に――但し生成過程としては自然に――此の怪我の功名的な所產を齎したのではなかつたか。（鶴自身はそれを功名とも或は面白いとも格別思はなかつたに違ひないが。）

併し此の珍しい附合構成法も、餘り屢〻だと類型に墮する。又面白いけれども本格正道の構想樣式では無論ない。

第七に、原典のまじめな素材や構想を、逆に笑にとりなす――そしてその場合多くは皮肉か奇拔な笑に轉移させる手術に長け、且屢〻成功してゐる。これ亦彼が談林の俳風から得來つたものであること辯ずるを要せぬ。例へばロマンチックな松風の狂戀悲話を、

若い蜑人はないかと、あるものにまねかせて見るに、髮にさし櫛もなく、貌に何塗る事も知らず、袖ちひさく、裾短く、わけもなう磯臭く、心地よからざりしを、延齡丹などにて胸おさへ……。（卷一、煩惱の垢かき）

と思ひ切つて現實的に感覺化し而も意表の外の笑に移導してゐる。源語からの場合でも、格子の隙からの胸あらはで「ばうぞく」な女の垣間見（空蟬卷）は、容赦なく數歩を進めて、「あとをも恥ぢぬ臍のあたりの垢かき流」す姿を遠眼鏡で擴大してまざ〳〵と偷見する（卷一、人には見せぬ所）かと思へば、心に泣きつゝ老伊豫介の爲に守らうと苦惱する

空蟬の貞節（帚木・空蟬巻）は、猛然たる積極性に飛躍して、「私兩夫に見え候べきか」と、突如「手ごろの割木」を振上げざま、男の眉間めがけて打下す活劇（巻二、女はおもはくの外）となる。何としても覺えず浮び出る笑を禁じ得ない。六條御息所の侍女中將が源氏の戯れを優しく拒んだ擧止（夕顔巻）が、大名の北方に仕へる奥女中の、錦の袋入の貴重品をば、鎖帷子に鉢卷姿の物々しい世之介の鼻先に突出して、仇討の約束履行を迫る光景（巻四、替つた物は男傾城）への轉合ぶりに至つては、天外の奇想とは正しくこれ、啞然哄然、釋尊をして捻華微笑に誘はしめ、而して柴女をして失神驚倒せしむるに十分であらう。

第八は、雅俗折衷の一種獨特な新文體を創始してゐることである。古典的表現から見れば、急轉直下平俗な町人語に變り、卑近な里言葉かと讀めば、いつか「侍り」と王朝語になつて行く。簡潔な印象的な筆致でゐて、繇々とした情調を語り續ける。斷れる文が斷れずに次の句の中へ跳り込み、續いてよい句が却つて斷止して息を拔く。滑らかなやうでぎこちなく、迫力があつて而も潤ひがある。單純で平明なやうで、難解誤讀を頻發させ、わかつたやうなわからぬやうな境地に屢、讀者を彷徨させる。全く端倪すべからざるもの、これが西鶴文である。そしてこれも亦俳諧の散文化であらうと共に、古典的な雅文の妙味は源氏・伊勢と併せて、それ以上に寧ろ枕草子・徒然草の斷想的な隨筆體からの感化が認め得られる。事象凝視と感覺描寫も亦枕草子に教へられてゐるものが尠くないかと想測出來る。

その他、粉本の源氏に較べて、地理的範圍の擴大、各種職業人の登場、積極的男性的且現實的唯物的で、强靱な徹底的な生の享受態度等、顯著な異色を示してゐる。がその起因は大體に於て、作者の性別と時代環境の差異とに歸せられ得る。又原典で故意に忌避せられた描寫が、これでは露骨に曝出された興味や、原典の詠めがちな涙の世界が端的寸鐵的な朗笑の世界に變換した大旋廻はある。而もそれは又、原典の上品さを失つた卑俗な醜惡感や、精神的純美の稀少した不滿やによつて功罪相殺されねばならないものがあるのも否定出來ない。

兎もあれ、雲界から完全に地上に引下された源氏物語である。宮廷生活の面影すら殘らず、王朝情趣の名殘だに留めず、凡そ似ても似つかぬ別世界の展開である。全く驚くべき更生である。その意味で成功と言ふに躊躇しない。粉本に此の古典を選んだ賢明さも賞せられてよい。事實、或意味では、前にも言つたやうに、雲上から花街へ、之を移植するのは、眞に一擧手一投足の勞と言つてもよい程に、舞臺と人物とは誂へたやうに用意されてあるからである。飜案に當つても、素材に、描寫態度に、表現

に、種々新境地を拓き、新機軸を出して、原據を離れて立派に獨立した作品を創成してゐる。流石に近世小説の開祖だけはある。

が併し、飜案といふ立場から眺める時、果して粉本の源氏物語と對比して、それを後に瞠若たらしめる無上の成功にまで到達し得たかといふことになると、公正に觀て、否と答へざるを得ない。

一言にして竭せば、結局、源語の後繼者であり、而も源語以上のレベルには拔出てゐない。そしてやはり全體としては、源語の亡靈につき纏はれてゐる。源語から堂々と脱却しきつてゐない。――それは源語の模擬といふことが意識的な目標である以上已むを得ず且結果として甚だ自然ではあらうけれど。そしてそれは又源語の超絶な偉大さとその魅力が如何に驚異的に國民の間に又西鶴にも滲透してゐるかを反證することにもなるのではある。

千變萬化の妙腕を揮つてゐる西鶴の非凡さが、その爲に打消されるといふ意味には毫もならないが、彼の馳驅の馬場は廣大のやうに見えて實は要するに源氏五十四帖に局限せられ、而もその種本が桐壺・夕顏・若紫の僅々數卷に狹められてゐる如きは、おのづから一層の拘束が出來てしまつてゐる事を示してゐる。換言すれば、僅少の資料を最有効に使用して幾樣もの變貌を次々に寫出して行く手際は或は紫式部以上とも言へるが、獨創的なプランを湧出づる泉の如く續々流し出す才能は、到底七百年前の一女性に及び得ない。それ故に山口氏に煎じ詰められれば、源語飜案といふ大旗幟に似ず、夕顏と若紫との模擬の反復の底が露出するのである。(註四) 前に說いた新構想型――一章に中心が二箇以上存するやうに見える珍しい型――すらもが、仔細に考察すれば、西鶴以前に既にある。そしてそれはやはり源氏物語である。手近い例は帚木卷である。卽ち前半は雨夜の品定が主題であり、後半は空蟬の情話でこれは次卷空蟬へ引續く。薄雲卷の如きは、

第一段＝前卷松風）を承けての明石上母子の別れ――第二段＝薄雲女院の崩御――第三段＝夜居の僧の密奏――第四段＝源氏と齋宮女御（春秋の爭）

と四段に分れ（第三段は第二段に附帶させても觀られ、その場合は三段になる。此の行き方も西鶴と同斷である。）、そして全卷を貫くものは「親子の關係」（肉親と義理と對照し又交錯させてある。）といふ主題で、これを以て此の互に直接の連繫の無い三つの分段を統轄してゐるのである。西鶴の場合は前に述べたやうに、恐らく俳諧から自得したものと解する方が自然であると考へるが、斯形の創出といふだけでは又や

はり紫女に一籌を輸せざるを得ない。そしてそれは偶合である場合の事であるけれども、萬一これも鶴が源語から或示唆を獲たといふのであつても矛盾しないのみならず、却つて前の新構想型の創案といふ功績は失はれねばならない。いづれにしても紫女の天才の助證されるに役立つ點に變りはない。

又一代男の卷三の終章「口舌の事ふれ」の章末で終結した形を見せてゐる事件の記述が次卷の初章「因果の關守」に新に引繼がれる如き型式――型式といふほどでもなく、自然な敍述の成果といつてもよいが――も源語には珍しくない。紫女は寧ろ此の斷續型の表現樣式を得意としてすらゐる。前出の松風から薄雲へもさうであり、帚木卷末から空蟬へもさうであり、須磨から明石へも同樣である。これも必ずしも一代男にそれが學ばれたと、附會しようとするのではない。新構想型や表現樣式の獨創と見えるものでも、源語を凌ぐことが容易でないことと、止筆樣式の場合から類推して萬一偶合でなかつたとしても、少しも不自然ではないといふことを、言ひたいだけである。

次に生活態度と國民意識といふ點からしても、時代と階級とのハンデイキャップがあるとはいへ、源氏物語と一代男とは全く比較にならない。宮廷女流の世界に限られてゐても、紫女には西鶴に於ける人間精神――性別から來る差異を超えた――に加ふるに、皇室中心の日本國民精神が鮮明である。貴族と町民とのそれ〴〵の特質はあつても、教養ある國民生活といふ立場からすれば、いづれがより望ましきものであるかも、說述を要しない。一代男が多くの伏字を置かねば飜刻が許されないことだけでも、それを語つて餘りあるであらう。

更に作品の文藝精神といふ點からも、西鶴は螢卷に於ける程の紫女の自覺が無い。尤も所謂轉合書の態度を以て、不ゑじめだと觀ようとするのではない。轉合書と戯れてゐる態度の中に、又その態度から生れた作品の中に、寧ろ眞摯で熱烈純粹なる文藝精神が横溢してゐる。けれども文藝に對する理論的又實踐的な紫女の信念と成果には、竟に幾十歩を讓るとも、一歩をも拔くことは出來なかつた。篇末の女護の島渡りの如き、原作に伏せてあるとされてゐる雲隱の趣向に應ぜしめて、御伽草子から獲て來た實に恰好の終結で、彼としては恐らく、微笑ものであつたに違ひないけれど、それは人間愛慾の無限とその完全な充足への希望といふ、或象徵的なものは寓されてゐても、所詮御伽噺の感を脫れ得ないのは如何ともし難い。粉本たる源氏には決してこれほどの非リアリズムは無いのである。此の終末の一斑は以て全豹を示す

は足り、世之介一代の好色生活、生々しく現實的であるにかゝはらず、全篇としては竟に「つくり物語」――源氏物語よりも以上に――の感を消し去ることの出來ないのは、何人も認めざるを得ないであらう。三千七百餘人の性交からがさうである。兎もあれ、「遊び」の心持が多過ぎる。それが西鶴の西鶴たる所以なのではあるけれど。

リアリスト西鶴の名を恣にする彼の作品一代男が、それより遙かにロマン味の多い善の源氏物語よりも、リアリスチックでないといふのは如何にも皮肉である。事實、鶴の作中で一代男が最も古典味ロマン味が濃い。習作たる此の一代男に、粉本の源語の面影が強く殘つてゐるのは、恰も源語の首卷桐壺にその粉本たる長恨歌の面影の最も顯著に見られるのと對照して、一段の興を覺えしめられるが、而も一代男に於てロマン味が相應に強い理由は、推するに西鶴は源氏物語を主としてロマンとして觀たによるのだと思ふ。「本朝の色所殘らず遊回して」(註五)、これが昔男及び光源氏に對する西鶴の理解であつたちうことは爭はれない。つまり鶴は源語の外觀的構成に最も興味をもつた――だから五十四章に卽し、年立に卽した。――のである。そしてそれを當世に再生させようと試みたのである。

卽ち鶴は古典源氏を斯く理解し、源語のロマンとしての面を觀て、リアリズムとしての面を觀得なかつたのである。語を換へて言へば、源語のロマン味は感じ得ても、源語のリアリズムはわからなかつたのである。若しそれが明確に理解把握されたら、一代男にもつといゝ意味での影響が與へられたであらう。これはまことに惜しい事であつた。彼も亦或意味では他の擬古作者達と同樣に、古典を趣味の上で愛好し、文藝の傳統の上のみで學ばうとしたのを觀る。無論生活の實相に於ては、却つて古典は遠い堂上の昔の夢であつた事は事實僞りない所ではあるけれども、彼が源語の有つロマン味と同時に、その現實味にまで讀入し得たら、卽ち源氏物語の眞髓に眞に徹し得たのであつたら、此の古典の有するすぐれた文藝精神と、人生觀照の透徹さとは一段の生彩あるものとして彼の一代男を蘇らしめたであらうことを疑はぬ。

斯樣にして、リアリスト西鶴に源語のリアリズムがわからなかつたのは實に面白い。リアリスト西鶴の文章が古典味を主調としてゐることの意外さ以上に面白い。(勿論此の二つの事象は相關的な關係をもつて居り、そして共通な趣味に根ざしてゐる點についてゐる。)否、リアリスト西鶴が源氏物語のリアリズムに觸れる前に、源氏物語のロマン味に幻惑されてしまつたことが面白い。といふ方が一層具體的で適切であらう。これは併し西鶴のみが責められるのは酷で、一般

通俗人の源氏物語觀が卽ちそれなのであり、此の事は畢竟源氏物語の文章と氣分とから來る夢幻美の如何に絶大なるものであるかを證示すると同時に、源氏物語をさうしたものとしか目し得ないまゝに、長く慣らされて來た中世以降の源語鑑賞態度の傳統の煙幕が然らしめたものである。此の煙幕に由る錯覺は、昭和の今日に於てもなほ大きい事實に觀ても、思ひ半ばに過ぎるであらう。かくて詮じ來れば、西鶴にはやはりほんたうには源氏物語は味讀出來なかつたといふものがわからなかつた――ほんたうには源氏物語といふことになる。從つて源氏物語に於ける作者の尊い內省、淨い心境の表現、人物の性格描寫、心理描寫等の深さと複雜さとは、これも鶴には十分觸れ得られ敎へられなかつたのも是非がない。――觸れ得られ、且學ばれても、此の點亦到底紫女の敵ではなかつたのでもあるが。更に又鶴が徹底した現實家であることは改めて說くまでもないとして、彼とて空想が無いのではないけれども、これすら紫女には遙かに劣るのである。如上の條件を以てして、而も粉本の輪廓に制せられる限り、一代男が源氏物語以上に出で得なかつたことは、甚だ當然と言ふべきであつた。

が、一代男は源氏物語を主とし、伊勢物語を副にして趣向が立てられ、――一代男の名も惟ふに伊勢物語の「昔男」から來たと推定し得られる。(註七) 同時に又源氏物語の「一世の源氏」にも或は併せ擬せられたのかも知れない。(註八)――その粉本を離れず、古典味ロマン味をも捨てないやうに(但しそれは主に構想と詞章の上で、さうした用意が設けられてゐる。)試みる一方、飽くまで新しい時代の生活を、感覺を、的確に實寫し、新しいスタイルの文學と文體とを創り出さうと力めたことは明瞭に看取される。その理想と寫實との混融調和を目ざし且相當豫期の成果を收めてゐる點は、卽ち又源氏物語と同じ軌道を歩むものと言はねばならない。

繰返して言へば、源氏物語はその內容の深みのむつかしさに加へて、古典語、古典文としての難解さがある爲に、動もすればその皮相のみしか讀まれ得ない憾みがあり、そして西鶴も亦その例に漏れず、又創作の實際としては、假令原典に關する正確な知識と味讀とを必須とせぬとは言へ、原典からの收穫が一段積極的でなかつたのが望蜀の歎を禁ぜざらしめる。而も偶然にも、素材に於て、觀照に於て、描出に於て、彼の體驗に接觸する生きた生活を對象とした爲に、彼の作品にリアリズムとしての成果を齎したことは、期せずして紫女の狙ひに近いものを示し得たのが、又非常に興味深いことであると思ふ。その意味では原典の新生に於て、粉本に恥ぢない、少くとも粉本

の行き方に背かないものであつた。要するに鶴の一代男に於ける態度は、主題及び構成的には紫女に則り、描寫の傾向としては寧ろ枕草子の淸女に學び、氣分と技法とには俳諧を移用し、觀照內容には新世相を把捉した、といつた姿に於ての再生源氏物語の創出と約言し得るであらう。

註一　卷六「身は火にくばるとも」所出。

二　吉原五十四君（其角）・俳諧女歌仙（西鶴）等所見。源氏物語の場合は、拙稿「源氏物語論考」（源氏物語新考八九頁）參照。

三　「既に早くる年は本丹にかへる、ほどふりて、足弱車の音も耳にうとく、桑の木の杖なくてはたよりなく、次第にをかしうなるものかな」（卷八、床の責道具）

四　山口氏「西鶴好色本研究」參照（特に「江戸文學研究」五一頁參看）

五　二代男卷八、大往生は女色の臺」

六・七　題名の外、本文にも、一代男に生れての……」（卷八、床の責道具）と見える。（二代男卷初にも、父は一代男とて」の一句がある。）伊勢物語との交渉は歴然たる上に、世之介を指して「初冠して、田來業平」（卷二、女はおもはくの外）と言つてある所さへある。

八　若しさうならば、湖月抄に引揚された古註からの知識であらう。これは光源氏元服の條で、即ち桐壺卷であるから、彼の熟讀した部分であるとの想定が十分可能であり、妄斷の誹は少くとも免れ得ようと信ずる。

馬琴とロマン

一

この頃馬琴を談ずる人をあまり聞かないやうである。小說は八犬傳以外にない位までに、すばらしい勢で江戸後期以後の斯界の王座を占めてゐた馬琴が、逍遙博士の小說神髓が出てから、一朝にして顚落の憂目をみたのは全くみじめであつた。その後幾度か刊行される國文物の叢書の中に、八犬傳だけがいつもきまつて厄介視されて、眞先に列を離れて古本屋の店頭に淋しい形骸を曝してゐるのを見る毎に、私は昔日の大文豪の墓碑を弔ふやうな氣持で、その前に悵然と足を止めさせられることが一再ならずあつた。文字通り寢食を忘れて――あの更級日記の著者が徹夜で源氏物語を貪り讀んだやうに――讀み耽つた少年の頃の自分をほゝゑましく振り返りながら。

馬琴日記抄の跋文の鷗外博士の言のやうに、小說神髓によつて馬琴が葬られねばならなかつたことは必然で當然であつた。（但し逍遙博士は馬琴を全然葬らうとさ

れたのでなく、別にその價値も認めて居られることは、小說神髓によつても、亦後年鷗外博士に語られた詞によつても知られるのであるが）そしてその對照に引出された春水の人情本が一般の支持を受けずに、却つてそれよりもつと溯つた西鶴が復活したのも、皮肉ではあるが又當然であつた。その代り西鶴・近松の復活の反動で、馬琴や竹田出雲やが少し引下げられすぎてしまつた氣味はないであらうか。――馬琴・出雲を西鶴・近松の上に置かうといふのではもとよりないが、これは私一個の好みかも知れないけれど、世間で言はれてゐる程好きでないのは西行法師で、世間で嫌はれてゐる程嫌ひでないのは馬琴なのである。

二

何と言はれても馬琴は日本での長篇小說家、又傳奇小說家としての雄である。長篇小說家としては兎も角も、傳奇小說家としては第一人者として許さるべきでなければなるまい。アストン・キホーテのセルヴァンテスに比せられたが、三上・高津兩先生の文學史では、驚く勿れ日本のシエークスピアとまで絶讃された惠まれた時もあつたのだ。鷗外博士の言のやうに、神髓が出なくとも馬琴は誰かに葬られたかも知れない。併し葬り切られてしまふには少し大き過ぎる人物ではなからうか。憎らしいには違ひないが、自ら信じ自ら高しとして、儼然と貧乏搖ぎもしないあのどつしりした構へ方、そして生計と好評とに關聯してゐるとはいへ、二十有八年を盲目になつてまでも一つの述作に沒頭しきれたあの勇氣と耐久力は、大馬鹿かも知れないが、膽玉の小さいそして何でも早く投げたがる人間の群居してゐる日本には、稀に見る超人的所產ではあるまいか。彼の銷夏法は避暑地行でも晝寢でもなく、讀書であつた――酷暑の日は著述を休む代りに「讀書消日」(註一)した彼の懶惰嫌ひ――なぞも、如何に旺盛な氣力家、不斷の勤勉家であつたかを語る。到底凡庸の遊戲人などではない。この超人が全靈を傾けて、「我を知るものは只それ八犬傳か」とまで言つた九輯百八十回の大長篇は、生きてゐる人間が居なくとも、事件が非科學的過ぎようとも、一面の面白さは何としても捨て難いものがある。馬琴は、又馬琴の傳奇小說は、神髓以後永久に全然葬られじまひに終るものではないやうな氣がする。

馬琴を談ずる人が少いと言つたが、その中で特に私の記憶に殘つてゐる言說では、前に樗牛・東圃あり、後に芥川君の小說戲作三昧（これは併し馬琴といふよりは芥川龍之介の方が餘計に面貌を出してゐるが）と中央公論に載つた眞山靑果氏の馬琴論(註二)とがある。眞山氏のは特に私の興味と多くの同感とを惹いた。

リアリズムの行き詰りと長篇小説の要望とから、それに非常時日本の國粹宣揚主義とから、馬琴が又注意されて來ても少しも妙ではない。唯どの程度に、うつり氣で而も科學時代の現代人に顔を向けさせるかは疑問であるが。

註一　「此節大暑浚かれ著述暫く休暇、讀書消日す」（文政九年六月十八日の日記）
「今日大暑に付休業、終日讀書消日、今夕五時就寢」（天保二年六月二十日の日記）
二　「曲亭馬琴についての夜話」（中央公論大正十四年三月號）

三

馬琴の作には全く馬鹿げた奇蹟が多過ぎる。これは如何にも事實だ。これは江戸時代の民衆思潮の現れでもあるが、勿論唐山小説の影響でもある。後に述べるやうに、いつも馬琴式に合理的な説明を施して、頻りに事實性を賦與しようとしてゐるのが却つて煩ひとなつて、お手本の支那小説程の思ひ切つた空想が自由に躍動しないのが惜しい位だが、さすがに島國日本にしては珍しく規模（スケール）が大きくて、而も日本らしく傳統の武士道精神をこの舞臺で縱横に發揮させたのは、何としても大働きである。

およそ非科學的非現實的なものは、科學が發達し、現實主義が熾んになればなる程、反對に憬れられて來るのではあるまいか。恐らく人類のあらん限り絶滅しないであらう。理性で否認しながら、科學で自分を説服しながら、その反對の心持が反撥して來るのが妙ではないか。迷信がいつの世になつても新粧を施して更生し、宗教は衰へても宗教心は益〻旺盛となり、科學で打破られた奇怪が今度は心靈現象といふ新生科學の姿になつて現れて來る。馬琴の傳奇はかういふ心持に觸れる時、いつも新しい感興をもつて蘇つて來て、讀者に慰めと不思議な安樂さとを與へるに違ひない。我々も亦忽忙な生活の間隙には、恰も傳説を喜ぶに類する心胸を開いてゆつたりと馬琴でも讀みたいと思ふ。

四

馬琴の傳奇小説の構想は、併し粉本たる唐山演義の趣向の範圍を出ない。（日本の古典や古傳説からも勿論採入れて内容を複雜豐富にしてはゐるが）けれども作者の意圖は、その粉本から新機軸を出さうとするよりも、それを如何に巧妙に飜案したかを示すに在り、それに作者の勝手な空想でなく、一々本據の出所明白だといふ所が味噌で、例の考證好きな典據癖の祟りであるが、時にはそれだけでは物足りないと見えて、得々と自身で種明しまでしてしまふ。三國志の長阪橋（ちやうはんけう）の張飛を模して、犬飼現

八が長坂橋で上杉勢を威嚇する所など、橋の名まで自分で同名にしておいて、

その百萬の敵兵をのり退ける其勇一對、橋の名さへに相似たる、事の勢愉快を見す。和漢今昔多からぬ、前視あれば後筆なきにあらず。看官坐に含笑まれて後思唯何にと思ふもあるべし。

の一節の邊り、讀者を愚にしたつもりなど毛頭無いどころか、會心の笑みを口邊に浮かべてゐる曲亭先生の姿が目に見えるやうである。

それに爲朝でも義秀でも、不遇の國民的英雄の末路に同情して、これを自作の小說の世界で思ふ存分活躍させて、讀者と共に堪能しようとするのが馬琴の望みである。これは卽ち日本國民の持つ所謂「判官贔屓」の心情の現れであり、虐げられたる正しき弱小者に對する公憤と正義感で、日本そのもの、及び日本人そのものの純粹な姿でもあり、この純粹な姿を、西鶴よりも近松よりも、最もはつきりと彼は感じてゐる一人である。馬琴が源氏と南朝が好きなのも、國家主義と結び付いた彼のこの心持の發露である。八犬士が姓を名乘るに、東國の邊陬からわざ〳〵、京都の柳營を通して禁裏の勅許を仰ぐ爲に、親兵衞が代表で上洛する如き、作者の勤王思想に基づく所で、所謂戲作とはいへ、馬琴の作が武士道精神の發揮と共に幕末士人の忠魂を涵養した功績を、日本外史と分つのも偶然でない。そして小說史の上では、義經記に於て結象しようとした歷史小說の形態が、馬琴の讀本に於て後繼者を見出したことを注意せねばならない。更に小說の位置を高上させたことと、平家物語に相次ぐ國民文學を創成しようとした文學運動が、少くとも當時は大きな成功を收めた事實とは、沒却することの出來ない功績である。

五

性格描寫の側から見ると、馬琴は全く零で、確に八犬士は仁義八行の化物に違ひない。「肚の裏にて思へる事だに、徹頭徹尾道にかなひて」瞬間といへども心猿狂ひ意馬跳りて彼の道理力と肚の裏にて鬪ひたりける例もなし」と小說神髓に指摘せられた通りである。美少年錄の大江成勝・末晴賢なども畢竟善玉惡玉の取組なのである。馬琴の作中の人物は大抵觀念的で、生きた人間が居ないと言はれても仕方がない。この點西鶴物や近松物が無論勝つてゐる。源氏物語の人物でも比較にならない程生き〳〵してゐる。併し一面から言へば、その仁義八行の化物たる所以が卽ち馬琴の面目ではあるまいか。

夫美は醜の對、惡は善の偶なり。然れば世に美少年あるときは、又惡少年なきことを得ず。且その美たるや、眉目の美あり、又稟性の美なるあり。惡にも亦相貌の醜惡あり、心術の醜惡あり。かゝれば容

貌は美麗といふとも、その性毒惡なるものは惡少年といはまくのみ。又容止は醜しとも、その性の美ならんものは、美少年とこれをいはん。況性と容止と、共に善美なるものは、是眞の美少年ならずや。

と美少年錄の序文に自ら述べてゐる通りの建前であるから、仁義八行を具體化した八犬士や、所謂眞の美少年や、爲朝や義秀や達小六やが極端に理想化された人物であつても(その何れもが又類型的過ぎるのは一寸困るが)、それが作者の意圖した所で、且讀者もそれを要求してゐるのではないかと思ふ。人間としての弱點がある方が現實の人間としてならば、自然に違ひないが、理想英雄に完全人物に――事實多少の缺點は無論あるとしても――微瑕でも見出したくない心持も亦常人の通性でもあらう。現時でも大衆が國寶級の人物として尊信してゐる人には、神格に近い完全性を附與しようとするのが自然の勢ひで、これを裏切るやうな言動に不思議に目をつぶりたい氣持があるのが人情である。國民英雄として一般の渴仰を受けてゐる古來史上の人物が、不知不識に史實以上傳說化せられ理想化せられて來るのは卽ちこの心持である。有り得ないと十分知りながらも、不自然さはあつても、道德理想の權化として約束せられてある八犬士には、やはり惡を些もさせたくないのが作者の望みであり滿足であり、この氣持に共鳴する讀者の又喜びなのでもあらう。童話の善主人公は終結まで完全人であるのが普通でもあり當然でもある。馬琴の讀本が理窟好きの成人の爲の童話でもある以上、寧ろそれは自然の事と言つてもよいであらう。(從つてその窮極する所、爲朝でも八犬士でも仙人にしてしまふ他はなくなるわけでもある。一方支那神仙傳說の影響でもあるが。)美少年錄のお夏が馬琴にしては珍しく善惡何れともつかぬ人物として最も自然に描かれてあると大町桂月の贊辭を贏ち得たのは、西鶴復活後のあの頃の文學批評規準に照して、偶ま馬琴の創作した人物に不思議にも見出された平凡人であつた爲で、琴翁自身は支那の蛇性傳說に範を仰ぐを第一義として、肝心の善玉惡玉以外の人物である爲に、その性格描寫にはあまり責任を用意しなかつた偶然の僥倖がこの結果を生んだものであらうと思ふ。

六

馬琴の作は人物よりは事件の推移に勿論興味がある。構想の複雜さと而も整然さとは作者得意中の得意で、この點お手本の水滸西遊を凌いでゐることを自負さへしてゐる所で、殊に水滸すら重複の多いのに、八犬傳には深甚の用意があり、人物の中途立消えもないのを言明してもゐる程であるが(八犬傳第九輯附言)、長篇小說にはどうしても免れ難い所と體驗に徵して馬琴自身嘆じてゐるのも尤もで、同じ八犬傳には重

複はないが、親兵衛が管領家の武藝試合の弓術と、美少年錄で大江成勝が江州觀音寺六角高賴の御前試合の弓術や、巡島記の義秀と俠客傳の達小六の似たりよつたりの武者修行譚など、さすが趣向自慢の翁でも同一書ではないからとの辯疏ではちと苦しさうな足どりである。

が、得意な程あつて、整然は實に整然で、一々話の切りを懇切に讀者の爲につけてやらねば承知出來ぬ程の入念さである。立消えの人物なども若しあれば、この人物の物語は以下に出て來ないと克明にことわつてある。弓張月・八犬傳にはないが、巡島記や俠客傳になると毎集の初めに登場人物を將相・武士・婦人・市人・奴隷等に分類して一々掲げる程の親切振りである。その代りこの病ひが昂じて時々自繩自縛の窮屈さに我と苦しむ態が笑止に見える。それでも强情な翁は、何とか理窟をこねては自作の說話を出來る限り合理化しようと專念する。非合理的な世界を描きながら、外面的には出來る限り筋を通し事實らしく見せようとするその矛盾を平氣で犯しながら、而もすつかりそれを自分の理窟で解消してしまつてゐるつもりなのが全く愉快である。（その極端な例は、曾て日本文學講座の「源氏物語研究」の中に書いたことがある。）(註)

註　同研究はその後源氏物語總論と改題して、拙著源氏物語新考中に收めた。同書一二―一四頁參照。

七

勸懲の敎訓は言ふまでもなく馬琴の本領である。作中の人物の口を藉りて言はせるだけでは我慢が出來ず、屢〻作者が素顏で心學道話の鳩翁代りを相勤める。例へば八犬傳の墓六・龜篠横死の段を述べ終ると、勿體らしく開き直つて、

作者この段を創し了て、ひとり漫に贊して云、善惡應報果せるかな。彼龜篠は不孝にして且婬濫なる、加るに、墓六が不義殘忍の甚しき、神は怒り、人は怨り。……吁、義なるかな額藏。汚吏の家に仕れども、清きこと泥中の蓮の如し。……噫、賢なるかな額藏。宜しく忠義の人とすべし。

と始める。これは曲亭翁の玉手箱の水滸傳に、金聖歎が評を加へたのを學んで、一人二役買つて出てゐるわけである。而も聖歎を「小說を評する毎に、動もすれば聖敎經傳を引く、これ余が受け難しとする所と難ずる口の下から、その簑笠隱居が滔々と聖敎の訓へを說き立てるのだからいよ〳〵面白い。敎訓や批判を指標としてゐないと源氏物語の紫式部すら、時折自己の作中の人物に道德的な寸評を殺人的に加へてみたり、談論熱の逆る所、品定めの座談會に、馬頭の假面を忘れて說法をし過ぎてゐるで

はないか。まして勸懲を看板の曲亭翁、こゝこそと馬力をかけるのも尤も千萬である。つまり馬琴の讀本は手もなく心學小説である。彼はこれで立派に社會教化をしてゐるつもりなのである。自ら卑下する彼の所謂「無用の書」(註一)に興味と同時に「有用の書」を讀むと同じ、或はそれ以上の意義と効果を持たせようとする名案で、「有用の書」を購はんが爲(註二)に戯作するといふその「無用の書」に魂を打込んで――八犬傳なぞは一生の三分の一を費し、健康を犧牲にしつゝも――娯しさうに筆を執つてゐるのでみてもそれが解る。それに讀者を甘くみるといふばかりの氣持だけではなく、自分の描出の意嚮を、十分にそして誤りなく讀者に解つてもらひたい自作に對する神經質的な責任感が、どうしてもさうさせずにはおかぬのであらう。やはり翁の性格がさうさせるので、一種の潔癖と親切心の現れで、この凝性から來る自作の説明の蛇足が――つまり作者の所謂「隱微」の「發明」に資したつもりが――實は讀者には相當有難迷惑なのであるが、御當人はこれでやつと氣がかりさから解放されたつもりで滿悦してゐる所が可愛いのである。

註一・二　八犬傳第七輯自序及び玄同放言參照。

教訓と關聯して馬琴に附き物は講釋であらう。これも殆ど同じ事が言へるが、馬琴の小説はそれ全體が大衆講談――但し高級の――向きに出來てゐる。筋の立て方から人物の行動、神出鬼沒の場面の轉換、さすがは傳奇小説の旗頭であるが、その話しぶりが又宛然講談式で「再説」「話分兩頭」「閒話休題」といふ行き方から、

畢竟里見の御曹司父の陣營に送還されて、後の設話甚麼ぞや。　亦は次の卷に解分るを聽ねかし。

と來ると、全く張扇が一本欲しくなる。これが殆ど毎卷毎回の終末の口上で、馬琴先生の講釋振りはすつかり手に入つたものである。(註)　美少年錄の續編を「新局玉石童子訓」と改題するに際して、

在昔孰の御時、孰の國に賊ありけん、槐の郷蟻宮村といふ一村落に、架空先生と喚做たる生儒ありけり。

と幕外の序曲役を登場させて、昨夜の夢に見たといふ善惡少年等のその後の成行――それが續編の内容である――を「汝等が爲に説出さん歟。言長くとも听ずや」と油をかけて、聽衆に是非にと所望させ、

架空先生。たり。貌。に、書案引よせ扇子を笏に、其物語にぞ及びける。

と、得意滿面一席御機嫌を伺つてゐる――辯じ立ててゐると言はねば抗議を申込まれるかも知れない。それでも實は不服であらうが――所は、正にその架空先生事釋

師馬琴老が、今までのラヂオだけでは承知出來ず、たうとうテレヴィジョンつきで乘り出したといふ態である。聽手の中には馬鹿らしく思ふ人もあらう。高慢ちきと癪にさはる人もあらう。それでゐて少々鼻につくのを我慢しい〳〵やつぱり面白がつて聽き入つて來るのだから可笑しい。

註　かうした次卷に讓るといふ斷り書の形式は、例へば次々にぞ」（宇津保物語俊蔭卷の卷尾）、「殘りは次々にあるべしとぞ」（同、國讓中卷の卷尾）、「二の卷にぞことごともあべかめる」（落窪物語卷一の卷尾）のやうに、古い物語からあるにはあるが、馬琴のは殆ど紋切型の口癖になつてゐる。

九

全體の講談張りは我慢出來るとしても、物語り半ばの精しい考證の講釋には少しへこたれさせられる。八犬傳の義實が龍の講說、巡島記の井平が雷上動の名弓の長談義などはその尤なるもので、龍の方などは第九輯にも、政木の老媼といふ變化まで出して「按ずるに奇事記に曰」と又々狐龍の來由を述べさせ（この狐龍が約束通り化石となることが九輯の終りにあり、そこでも淵鑑類函を引いて政木孝嗣が論辯することがあるたりする。俠客傳の仙孃九六媛が南朝論は翁の勤王主義の披瀝であるからさもあらうが、史實の考證癖も十分加味せられて隨分と長い上に、これは必要とは言ひ條支那の劍俠の說明が又詳しい。そこで思ひ出すのはスコットの「オールドモータリティ」だが、一體スコットはよく馬琴と比べられる好一對の傳奇作家だが、これが又略東西時を同じうしてゐるのも面白い上に、彼のこの名作の中の老夫人が、暴兵等を前に聖書を引いて「默示錄第十二章第三節及四節を見よ」「列王紀略第二、第十五章第十九節をみよ」「同第八章第十四節及十五節を見よ」と雄辯に說法する場面などは正にこれ又、東に馬琴あり西にスコットありと言ひたい所。尤もこれはバイブルだからお手のものといふ辯護は出來るかも知れぬ。併し突嗟の場合何章何節まで捲くし立てる博識には、琴翁意外の知己を異鄕に見出したと云ふべきである。が琴翁のはそれ所ではない、道樂が過ぎて厄介でさへある。

もと〳〵この考證論議は馬琴に始まつたのではなく、近古の小說に既に濃厚で、幸若舞の本の十番斬あたりでは、五郎時致が法華經の講釋をやると、賴朝公初め滿座隨喜の涙を流すし、曾我物語でも十郎兄弟は大の佛學者である。その曾我物語の卷の二「酒の事」の條の一節などは、少くとも自然に、軍記物を愛讀してゐた馬琴に引繼がれたに違ひないと思はれる程、文辭の工合までもう型が出來てゐる。（馬琴が曾我物語を愛好したことは昔語質屋庫を讀んでも解る。これこそ文學の形を借りた考證物

で、これに出て來る序開きの見臺先生は、又架空先生事琴翁の變身でもあらう。）つまりさういふ軍記物以來の遺產が、歷史小說としての繼承と共にいよ〳〵豐富に蓄積せられ、いよ〳〵意識的になつたものと言へるであらう。

兎に角この考證癖は、結果からは衒學的に見えるのは致し方ないが、必ずしもさうばかりでもない。玄同放言や燕石襍志の考證と同じ心持で大眞面目大熱心なのである。それにこれもやはり自分の書くものは出鱈目でない、悉く典據がある事を示さうとする忠實さからも來るのである。眞面目な作家の心持として、又長篇小說の構成要素として、かういふ分子も亦自ら要求せられ、或は寬容せられるのかとも思はれる。現代でも山本有三氏の「女の一生」などにも看た傾向でもあつた。結局馬琴は不幸にして――全く不幸にして、學者だつたのである。而も歷史小說である以上、一層この蓋然性は約束せられるものと見ていゝ。釋師典山老が講談半ばに博識ぶりを御披露に及ぶといつた、あれに何百倍かの輪をかけたといふだけで、愛すべき所さへある。ましてや敎へてやらうといふ啓蒙心の發動たるに於てをやである。而も聽衆の迷惑などは頭からかつ飛ばして、ラヂオのスタヂオの中で獨り自足感に浸つてゐるやうな幸福さを、怒りもならぬではないか。羨ましい境界だとさへ言へる。

それから馬琴はよく作中の人物に變な名前をつける癖がある。これも翁の道樂の一らしい。八犬士は名前だけは實存したことが軍記によつて知られると八犬傳の自序に見えるが、扇谷定正・里見義實・正木大膳を初め、正史の人物を驅使する一方、假作の人物で善惡それ〳〵奇妙奇天烈なナンセンシカルな名をつけては獨り悅に入つてゐる。その中には實際愉快なのがある。〻大法師などは犬の字を二つに分けたので、伏姬と同樣、かなり得意の命名であらうが、無賴漢の土田土太郎・交野加太郎・板野井太郎だの、賊將蓁田素藤の郎等平田張盆作與冬・奧利本膳盛衡・淺木椀九郎嘉俱だの、怪猫の僞劍客赤岩一角の弟子月簑團吾・玉坂飛伴太（酒浴のつるり）・八黨東太・乞足潑太郎だの、噴飯さずに居れない。この化弟子等と共に現八を討たうとして却つて命を落す下郎の尾江内・墓内に至つては、自分でつけた名ながら、翁の所謂「名詮自性」に誂へ向きである。巡島記の湯島沸九郎・美少年錄の吾足・吾足齋延明など皆この類で、いくらでも學げられるし、意圖は違ふかも知れぬがこの點確に岸田國士氏の大先輩格である。そしてこの命名にも作者の興味の相當さと凝性とが遺憾なく窺はれる。

勸懲の總本山馬琴先生にエロなどは藥にしたくもないやうに、いやそんなこと口にするさへ潔とせぬ頑固老爺のやうに一寸思へるが、實はさうでない。彼は好んで美少年を主人公にする。これは若衆歌舞伎や陰間の喜ばれた時代の反映でもあらうが、一面固苦しい彼の道義小說の彩でもあり、性的描筆の變態的逃避場とも見られぬ事はない。犬江親兵衛といひ犬坂毛野といひ、只その出現だけで讀者にも自身にも或滿足を與へてゐるやうに見える。その毛野や信乃の女裝も同樣の變態趣味からであらう。美少年錄ではいよ〳〵題名にまで謳つて大つぴらで善惡の前髮連(註一)を續々登場させ、これまで寺院が舞臺であつた中古以來の稚物語を、武家式にそして芝居がかりに引直して、新しく活かして來たのが才覺である。後に出た草雙紙の白縫譚の鳥山秋作・青柳春之助・蔭山夏之丞・或は時代加賀見の白山雪若・藤波由緣丞の類、皆これに倣うて時好に投じた所であつた。

男女間の情事でも馬琴は取扱つてはゐる。が濱路の信乃に於ける雛衣の角太郎に於ける、或は姑摩姫の小六に於けるといつたやうに窮屈なものか、さなくば爲朝・義秀をそれ〳〵中心とする英雄譚的情話(註二)かで、殆ど型に嵌つたもので頗るぎごちない。その代り稀に本當の濡場を挾んで來る。但しそれは必ず惡人・奸婦或は淫婦に限るので、例へば美少年錄のお夏、八犬傳の船蟲の類がそれである。そしておいてその後で例の心學者擬ひの曲亭先生が待ち構へて居たやうに顏を出すのである。それは一には自分の主唱する勸懲主義の手前からと、今一つにはかういふ場面を挿入せねばならぬ言譯ともなるのである。そしてそこではやはり二枚舌と難ぜられるには餘りに眞劍な自任社會教育家――卽ち理想主義の道學先生たる彼の半面――が大眞面目に自己矛盾に無感覺な程(偶にはその矛盾を感ずる時もあるだらうが、殆どそんな事に頓着せず)熱心に說き立てる。がその前の「楚の襄王にあらねども、雨の箭頭に雲の盾、鬪戰數刻更闌て」とか、「思はず佳境に入りしより、おん身の舌の絲斷齒に障りたりけんそは怪我也」などと筆を走らして、自ら暫しその世界に沒入享樂してゐる氣味さへあるのが、あのやかましやのお爺さんであるだけに面白い。洒落本まで書いたといはれる馬琴だから、格別不思議はないかも知れぬが、讀本で見參する馬琴イズムに一寸不釣合な氣味なと同時に、やはり人間馬琴がそこに見出される感がある。六尺棒を振廻して躍起となつて迷ひ犬を追つかけ廻したり、お百婆さんに手を燒いて、

右內亂にて今日予著述休筆諸事廢業也。事皆吾不德の致す所人を怨るの心なし。その罪、吾一人に

あり、おそるべし、つゝしむべし。（天保九年五月十六日）

とか、

女子小人の養ひがたきは聖人すらしかり。況んや凡夫のわれら實に愧るに堪たり。（同閏四月十日）

などと、いつもの口吻そつくりで日記に書いてゐる所を見ても、頑固な代りに翁は、案外正直者であつたのではあるまいか。率直で單純で、自己の二重人格を反省する懷疑すらも殆ど持たない氣のいゝ一徹人で、逍遙先生に要求せられるやうな人物はやはり描けない人であるかも知れない。

註一　大江杜四郎（毛利元就・峯張柴六郎は善美少年、末朱之介（陶晴賢）・蔦津爪作・日高景市等は惡美少年。

二　爲朝には白縫・鄙江・三郎の長女・寧王女、又義秀には女鶴といふ妻妾がある。而もそれらはすべて純粹の戀愛ではなく、女の父方からの強つての懇請か、乃至義理若しくは奇蹟の因緣などといふ釋明的理由が附せられて成立してゐる情事關係である。就中、爲朝が女護島に於ける三郎の長女との結婚は、文化向上の爲卒先して島民に範を示すといふ奇拔な合理化が施されてある。

一二

字句の彫琢文章の推敲に馬琴が腐心してゐるのは驚くべき程だが、朗誦に適するやうにとの爲か、七五調の反復羅列はちと困りものである。弓張月などまではまだそれほどでもないが（尤も雨月物語の白峯に倣つた例の爲朝が崇德院の御陵に詣でる條だけは特に目立つて所謂美文式で、殊に太平記（註）などの文體を學んでゐる。）晩年になるに從つて八犬傳は勿論、巡島記でも美少年錄でも俠客傳でも、もうすつかり判で捺したやうに七五の型が出來てしまつてゐる。もと〳〵平家・太平記などの軍記物式文體から出發し、それに支那傳奇の用語措辭が流入して來てゐるのだが、だんだん意識してこの時代物の白めく馬琴式韻文的散文を作り上げて行く中、筆癖がしつくり板について、後にはその方が寧ろ樂になり、さうせねば氣が濟まなくなつたやうにすら見えるのである。近松は例の虛實皮膜論で淨瑠璃の文章のコツを說いて、

文句に、てには多ければ、何となく賤しきもの也。無功なる作者は、文句を必ず、和歌或は俳諧などの如く心得て、五字七字等の字配りを合さんとする故、おのづと無用のてには多くなる也。例へば、年もゆかぬ娘をといふべきを年はもゆかぬ娘をぼと、言ふ如くになる事、字わりにかゝはるよりおこりて、自然と、詞づら賤しく聞ゆ。されば大やうは、文句の長短を揃へて書くべき事なれども、淨瑠璃は、もと音曲なれば、語る處の長短は節にあり。然るを、作者より、字くばりをきつしりと詰過ぎれば、かへつて、口にかゝらぬ事有るもの也。この故に、我が作には、此のかゝはりなき故、てには自ら少し。（難波土產）

と言つてゐるが、語り物作者の文章觀が、この卓拔さを示してゐるのに、讀み物作者の文章が自ら求めてこの弊に陷つてゐるのは如何にも皮肉で、微笑を禁じ得ない。七

五の鑄型に强ひて鎔し込むのであるから、

猶。且。恩人野上の翁を、連係せらるゝことあらば(中略)。又。只。時運を天に任して、脱れんものをと尋思をしつゝ、(俠客傳第一集卷之二)

の「猶且」「又只」のやうな贅語がざらに出て來る。これが屢、内容の迫力を鈍らせるのは止むを得ない。その上作者は時折道樂氣を出し過ぎて、

起きんとするを小文吾が、蠻蕈つゝ擊太刀風に、一葉の露の玉櫛笥、ふたりが身とて四となる。いつしか積る兇惡の、むくひ來にけん天の網、七重やま風吹くからに、ここに天引く遠煙、百千の國も萬みな、火宅なりきと悟りたる、おくこそ知らね無量劫……(八犬傳第六輯卷之二)

のやうに、寺子屋のいろは送り式修辭遊戯が飛出したり、

隈なくなりし月光に、三人は面を佶と見て、共に驚く聲も齊一、句和殿は犬飼、句現八ならずや。句しかいふ二兄は犬山犬塚、句然也道節信乃なるぞ。句こはこはいかにと、呆るゝまでに、……(同第八輯卷之五)

などと、讀み方の注意書まで親切に添へた芝居がかりなぞは、いよ〳〵院本作者の領分への惡進出――實は院本乃至歌舞伎からの惡影響であらうが――である。(八犬傳を種にした淨瑠璃本を、拙作見るに堪へずと口には貶しながら取り寄せて讀ませたり、講釋になつたのを態々聽きに行つたり、芝居に仕組まれたのを滿更ではない氣持でゐる翁でもあつた。)

とはいふものの、文章はやはりうまいと思はされる。馬琴型と承知の上で讀むと、七五もそれほどの苦にもならない。却つて作者が悠々然と綽々たる態度で、無限の糸を繰り延べるやうに、リズミカルな美辭をいゝ氣持さうに――自己陶酔に十二分にひたりつゝ――並べて行くのにいつかつひ引込まれて、うつとりした心持にさへされてしまふ。殊に作者の熱情と氣魄とが昂揚して來ると、七五の定型律外にそれが迸り出て、不自然さ單調さを忘れさせて、作者に同化させる魅力さへ屢示して來るのは、さすがだと思ふ。源氏物語の文を惡文拙文と感ずる人でも、或は源氏物語よりは馬琴の方が名文だと――少くとも所謂美文だとは――みるかも知れない。芳流閣の組討でも、嘘と知りながらやつぱりいゝ氣持で面白く讀まされるのは、一はこの缺點を十分に持ちながらも、讀者を引きずつて行かずには措かない馬琴獨特の文章故である。

ヤツと被たる聲と共に、眉間を望て礫と打。十手を丁と受留る。信乃が刃は鍔際より、折れて遙に飛失せつ。

……撞と落れば、傾く敧と立浪に、突と音す水烟、纏丁と張斷て……。

など擬聲語をふんだんに使つての動的（ダイナミック）な立廻り描寫は、成氏（なりうぢ）主從ならずともその頃の讀者に手に汗を握らせ、血を湧かさせるのに十分であつたらう。馬琴流の文章が內容と相應じて一世を風靡したことは、人情本の春水（しゅんすい）まで、大內（おうち）記（きしる）十杉傳だの、（文政九年）七國士傳だの書かずに居れなくなつたのでも知れるが、少くともその文體が、如何に根深く誰にも浸み込んでゐたかは、當の馬琴に正面攻擊を堂々と加へた逍遙遊人の文章なるものが、

彼の曲亭の傑作なりける、八犬傳中の八士の如きは、仁義八行の化物にて、決して人間とはいひ難かり。

といふ立派な馬琴調なのが何よりの證據である。

註　太平記卷二一、先帝崩御事・卷三四、吉野御廟神靈事等。

一三

要するに馬琴の世界は「ある」世界、將た「あり得る」世界ではない。「あつた」世界でも勿論ない。彼の道德理念に照して「しかくあらねばならぬ」世界であり、そしてさう「ありたい」世界なのである。リアリズムの側からは問題にはならないが、そして不自然であらうとも、非科學的であらうとも、稚氣な英雄主義（ヒロイズム）であらうとも、人類から想像の自由と創造の活力とが奪はれない限り、好奇心と非現實趣味と偉人熱とが消失しない限り、新しく提唱されるロマンティシズム（非リアリズムといふ意味での）の波に乘つて、いつもその時々の新しい意味を多少づつ與へられて、問題にされるのではあるまいか。管見は取るに足りないかも知れぬが、現にこの稿を三月號（昭和九年）の爲に「新潮」から要められたのもそれを語つてゐる。少くとも西鶴にも近松にもない或もの――あの氣魄と道念と根氣と重厚さと、そしてロマンティックで、理想主義的で而も日本的で、國民的で、又大衆的で、積極的な男性的な所はやはり日本小說史上の特異の存在である。缺點は多分にあつても、そして源氏物語には比肩出來ずとも、馬琴はやはり紫式部と共に、古今の二大長篇小說作家（西鶴は長篇小說家ではない）として日本を記念する一人であると思ふ。

馬琴論片

一　逍遙・鷗外と馬琴

「文學士坪内逍遙述」といふ小説神髄が仁義八行化物論を提げて、近世小説の王座から勸懲の總本山馬琴をば一瞬にして蹴落したことは誰も知つてゐる。その神髄の文章が皮肉にも

よしや小枝末術なりとも、まつたく法なく則なうして、これを成こと難かるべし。繪畫に畫法あり、音樂に音律あり、詩歌といひ踏舞といひ、みなそれ〴〵に規矩をそなへて、後世子弟を導くべき、便利を圖るの事あるからには、我小説にも之にひとしき、規矩法則のなからずやは。是予が此論ある所以なりかし。

といふ曲亭仕立であるのにも、時代とそして如何に馬琴が根深く文章道に食ひ入つてゐたかが映つてゐて、別の意味で又興味があるが、これは明治十八、九年の交のこと、そしてそれだから又神髄の出現も要求せられるのだとの逆説も成立つのである。

饗庭篁村編の馬琴日記鈔の跋文を頼まれた鷗外は、

馬琴を再び葬つた小説神髄は恥かしい書だと、坪内君が僕に言はれた。あれは坪内君の恥ぢなくても好い書だと思ふ。なぜといふに、あれはあの時出なくてはならなかつた書だからである。（中略）坪内君が葬らなかつたら、外の人が葬つただらう。

と言つてゐる。その言に誤りは無い。そして馬琴の「眞價は動かない」と斷じつゝも、所謂馬琴熱の流行を嗤ひ、それを「却つて馬琴の爲に氣の毒」と心配してゐる。この跋文を讀めば、少くとも鷗外はその所謂馬琴の「眞價」なるものを、スコット以上には買つてゐないことも明白に看取出來るし、それからこの日記鈔に序跋を書き或は日記の本文に論評を加へてゐる諸大家が、すべて馬琴に十二分の好意を寄せてゐるらしい中に、鷗外だけが、稍有難迷惑の形で申譯的にこの書の提灯持をさせられてゐるのが、歴然として讀まれる。

ところが、その鷗外の戯曲でかなり知られてゐる日蓮聖人辻説法――これが逍遙の法難の「法論」と同材少くとも類材で類型であるのも亦面白いが――の日蓮と進士太郎善春との問答（この問答は又、勸進帳の山伏問答の意氣と形に倣つたことは蔽ひ難い）中の日蓮の白、

こは折を得て柳營に、勸文もて申さうと、かねて存ずるところなれど

は、そつくり曲亭張で、「こは折を得て柳營に」なぞ、あの世から散歩に來た馬琴がうつか

り戸惑ひして觀潮樓に一寸休息したといつた形であるのは、覺えず微笑させられる。（尤も馬琴ならその下が「勘文をもて申さむ」だらうが。）そしてこの脚本の發表は、恰も神髓からは二十年後の明治三十七年三月「歌舞伎」で、上場はその翌月の歌舞伎座であつた。神髓の文が笠翁スタイルを脱却出來なかつたのは無理もない。

二　芳流閣――馬琴の描法

一

例の馬琴の芳流閣の立廻りには、「ヤッとかけたる」「はたと打つ」「丁と受留むる」だの「だうと落つれば」「ざんぶと音す」「纏丁と」などと、多く擬聲語を使用して實感を効果的に出さうとしてゐるのが著しく目につく。一言で言へば、それは芝居がかりである。全くあの三層樓の屋根の上での格闘から、組み合つたまゝ「覆車の米包」と轉つて、跳へたやうに、水際の小舟に落込む寸法まで、作者の裏書通り「よに未曾有の晴業」だから、構想からして恐しく芝居がかりである。これは畢竟此の趣向の粉本になつた壇浦兜軍記四の切の、左官に扮した箕尾谷と大工姿の景清が屋上での組討が、卽ちそのまゝ模擬せられたに因る結果であることは、容易に想像がつくし、實際同段の詞章にも、

ヤア物々しや事をかしや、景清を掴めんとは、大黒柱を蟻の髭と、嘲笑ふ障間を見て、捕つたとかゝる一番手、ぱつしと蹴られころ〳〵、勾配するどき屋根瓦、巴に並んで三方より、駈寄ればまつかせと、手斧にちよんと首飛んで、こけらを風の吹きしく如く……頭はつしとさい槌に、目を白黑の三つ目雛……一度にどつと群るを、當り任せに引抓みばらり〳〵と投げはふるは……。

或は

互に付け寄る身の構へ、眼を配り氣を配り、踏む脚代の壇の浦、八島の戰今此處に、見るやとばかり挑み合ひ、しばし勝負も付かざりしが、互に引組む脚代の板踏碎き廣庭へ、どうど落ちたるはづみの拍子。

とあるから、八島の鍬引から著想しての院本作者の舞臺技巧が、大衆小說の場面に再登場した徑路が明瞭に說明される。そして右の前身の淨瑠璃では、捕手の箕尾谷が却つて信乃の役處で、敵と狙はれる景清の方が、さながら現八もどきの大惡形なのを見ると、その邊が又換骨の手際のつもりなのであらう。但し三重屋臺に大急流の小舟とは、思ひきつたプランで、正に大ケレン大道具の宣傳ビラものである。

尤も曲亭の芝居がかり趣味は珍しい事ではない。對牛樓でも圓塚山でも、鶴龜の仇討でも、いづれは讀む舞臺劇で――讀む、脚本、ではない――あるが、時々は調子に乘つて人物の對話に「句」といふ符牒まで附けて白のやりとりをさせることすらある程

だし、院本からそつくり趣向を借用することも一再に止まらない。例へば八犬傳の扇谷定正の出陣を忠臣河鯉守如が切諫する（第九輯卷之一）のは、神靈矢口渡二段目由良兵庫助信忠が主君新田義興を忠諫する段から、同じく掛軸の畫虎に魂が入つて洛中を騒がす（第九輯卷之二十七）のは、傾城反魂香の上の卷（狩野元信の畫虎の不思議から例の「吃又」の土佐將監住家）から、又弓張月の爲朝が新院の御所で飛箭を袖や齒で受留める（前編卷之一）のは、說教節の小栗判官の親子對面から、俊寛僧都島物語の鬼一と牛若の對面は素材の原據以外に特に平家女護島（三の切）と鬼一法眼三略卷（三の切）とからと、それぞれ歷々指摘することが出來るのである。

註　近路行者の繁夜話（第三卷白菊の方猿掛の岸に怪骨を射る話）にも、類話がある。馬琴はこれからの影響も併せ受けてゐるかも知れない。又同書のそれは同じく說教節小栗判官からの影響でもあらう。（なほ繁夜話の右の話は八犬傳の庚申山の件の粉本でもある。）

二

が、斯うした格鬪の場面に於ける擬音効果を應用しての動的技法は、今一つ馬琴には彼に取つて歷史小說の御手本とも言ふべき軍記物から獲得せられた點があることを認めたい。

向ふ敵八人切伏せ、九人に當る敵が甲の鉢に、餘りに强う打當てて、目貫の元より丁と折れ、ぐつと拔けて、河へざつぶとぞ入りにける。

これは平家物語（卷四）橋合戰の筒井淨妙坊が奮戰ぶりである。そして

十手を丁と受留むる、信乃が刄は鍔際より、折れて遙に飛失せつ。（八犬傳）

といふ一節をまで想起させる。

秋山はたと打てば、阿保受太刀に成つて受流す。阿保持つて開いてしと切れば、秋山棒にて打ちそむく……。

これは太平記（卷二十九）の阿保・秋山の河原軍である。而も馬琴は八犬傳（第九輯卷之三十六・三十七）で、犬田小文吾が野武士あがりの鷲熊の兩雄を對手に鬪ふ場面を、三國志の關羽が顏良・文醜を斬つた光景に自ら比してはゐるけれども、實は直接には此の晴れの一騎討を參考臨摹してゐるのである。それから

大鉞を持つて開いてちやうど打つ。馬の三頭に猪の目の隱るゝ程打込み、ゑいと言ひてぞ引きたりける。馬こらへずしてどうど臥す。

風を切らせよと言ひも果てざりければ、吹きもて來て、帆にひしひしと當つるかとすれば、風につきてさゞめかし走りけるが、何處とは知らず二所に物のはたはたと鳴りければ、船の中に同音にわつとぞ喚きける。帆柱は蟬のもとより二丈ばかり置きて、ぽつと折れにけり。

共に義經記(卷四)の堀河夜討と大物の難破の情景である。又

持ちたる太刀を打振りて、甲の鉢の上にからりと投げかけて、ちとひるむ所を帶添への太刀を拔きて走り懸りてちやうど打つ。丙甲へ太刀の切先を入れたりけり。あはやと見ゆる所に、鎧を傾けてちやうど突く……大の節木ありたまらずゆらりとぞ越えにける。覺範追ひかけてむずと打つ……。

これも義經記(卷五)忠信・覺範吉野山の勇戰で、故大町桂月(學生文庫、義經記解題)に從へば「宇宙間有數の快文字」として、卽ち芳流閣の活劇の母胎をなしたらうとまで說かれてゐる所である。その當否は別として、以上揭げた文例に觀るやうな描寫が、軍記物好きの馬琴に、そして軍記物の延長たる彼の讀本に、極めて自然に流移して來たらうことは大過なく想測出來る。そしてかの院本に於ける同斷の場合の描法が既に又、かうした先行軍記物や舞曲の類からの繼承でもある以上、直接と間接と二重に馬琴には影響してゐると觀る方が正しいのであらうと思ふ。

三　俠客傳

一　ひるぞののあろじ

俠客傳の續稿に筆を染めた蒜園主人は、源氏物語評釋の著者として知られた萩原廣道である。玉の小櫛の宣長が手枕の一卷に試みた源語模擬、或は源註餘滴の雅望が近江縣や飛驒匠に示した雅文小說の戲作趣味と比べて、さりとは變つた餘技であつた。此の人に狙ひをつけて無理やりに役を納めた書肆群玉堂も面白いが、同じ稗史小說でも、楠・新田兩氏の子孫の誠忠義烈といふ主題が、必ずやその諾意を唆したものがあつた爲と考へられる。傑物玉松操と同門で、大國隆正に國學を受け、本學提綱を著して皇道を說いた彼だつたからである。

さてその執筆の事由を述べた序文の文章だけは「耳にも目にも餘るふしぶしを」と、小櫛の物の哀れ論から詞句まで流用しての鈴屋ばりであるが、本文は「勉めてその體裁に倣ふべき由」といふ書肆の注文に從つて「再說」「一切從はざりしかば」「這籌決めて妙也。現郎君は今世に多く得難き才子にこそ」「卷を換て次下の回第四十三回の首には、第五集から作者が入替つた事に、直には氣がつかないくらゐである。けれども此の拘束の窮屈さがある上、內容の構想も未だ新しみ獨創さの發揮せられる所まで行かずに、これ又此の一集五卷だけで中絕したのは遺憾であつた。但し、

百年の後凡筆をもて、他人の是を繼ぐ者あらば、事損ねにこそ候はめ、といへば主人は點頭て……玉の

いまだ全からずとて、瓦をもて是を補はば、誰か連城に代まくせんや。縱令和ならずとも、鼻を矮みて走るべし。（八犬傳第九輯、回外剩筆）

と嚴に豫防線を張つて置いた著作堂の主人からは、やはり「作者の隱微を知らずして、叨に蛇足を做し」た「似而非作者」と一喝されることになるのであらうか。玉か靈筆かは問はずもあれ、瓦か凡筆かは讀者の正直な答に聽くことが出來るであらう。

二　姑摩姫

晩年の作だけに前編に於ける曲亭蟫史の筆は流石に圓熟して自在である。少し手馴れて餘裕が出來過ぎ、角々もさら〳〵と片づけて、力演の熱が薄れた氣味も無いことはない代りに、枯れた味はひも隨處に感ぜられ、貫祿ゆたかな老手たるを想はせる。市井の女俠奴の小萬が一躍楠氏の息女とは、驚異的な大出世、簑笠翁ならではの藝當ではあるが、これを唐山の劍俠傳に結びつけた爲に、その活躍面が更に變つた容相に開拓された。无上玄通神仙孃と號する葛城の女仙九六媛に劍俠の祕技を授かる所（第二集・第三集）は、相當西遊記じみるけれども、金閣の夜遊に目に見えぬ靈箭を飛ばして、鹿苑院義滿を殪し、父祖累代の怨を復す段（第三集卷之一）の如きは、何としても愉絶快絶の場面たるを失はない。

第四集（卷之二）に「姑摩姫莎庭に四賊を斬る」といふ條がある。五十槌電次隆光といふ賊魁が一黨を率ゐて來襲したのを、熊坂一類を斃した御曹司なみに、稀世の女丈夫が手練を示す大殺陣で、

姑摩姫見つゝうち笑ひて、言可笑や天罰を、なほしら波の驚げばとて、清き河内に隱れなき、楠氏の嫡流なる、我莊院は父祖相傳の、千劍破の城に異らず。然るを鼠の輩の、土足に踏も汚させんや。嚮に來し四個の賊は、我一刀に八段に做しぬ。そを目前に見つゝ知りつゝ、死地に入りしは天の網、望に儘して一個も漏さず、這世の暇を取せんず、といはせも果ず群立て、ふたゝび鬪く衆賊が突戰、手に〳〵双をうち晃めかして、蒐競るを姑摩姫は、もの〳〵しやと短刀もて、殺靡けたる秘術の太刀風、その双尖に當るもの、眞額梨子割車劃或は大袈裟割暴の、腦漿出て死するも多く、然らぬも深痍に平張俯て、殘寡になりしかば……。

の邊、正に不二洋子・大江美智子と競演の形である。百年後の淺草を待たずして、測らず女劍劇をまで開創した筆端の副收穫には、今地下で勸懲小說の總帥も、自ら呆るゝこと半時ばかりしてゐるであらう。

傳說·說話

說話學の對象としての傳說

——傳說學序說——

一　語義

傳說といふ語は、往昔支那では經・史・諸子・傳說と並べられ、正確な事實を錄した經史ではないが、かなり信憑すべき眞實性あるものとして取扱はれてゐたのが、宋代の頃からは、根據なき話柄の意に用ゐられて來たやうである。又別に支那では小說といふ語を古くは街談巷語の意に使用してゐたが、我が國に於ては右の兩者に流通した如き意味で傳說の語が行はれ、中世以後は特に、噂・風說の意に用ゐられてゐた。卽ち正史、或は眞相に對して、雜聞若しくは非眞實的事相の意であつた。明治以後西洋の神話學・民俗學等が輸入せられてから、この舊辭に新しい解釋が與へられて、その意味內容が餘程學術的に限定せられ、專門的な術語となつた。現今に於ては大體二樣に常用せられてゐる。

(一)は口碑乃至は「いひつたへ」の義で、各地方の父祖からの傳承による、その土地々々

の習俗・古蹟・諺・民譚(說話形態を具へたる民間傳承卽ち民間傳說)等を概括して指すので、これは民俗學の取扱ふ對象である。そして純粹な口誦によるものの外、それを文獻に移したものを記錄傳說と呼んで、所謂口碑と區分することもある。

(二)は說話學上の術語で、この場合は、普通に神話・童話と並稱せられ、說話形態を具へた國民傳承たることを要する。神話が宗教的信仰を第一要素とし、童話が文學的假作的要素を首位とするに對して、傳說はおもに史的事實に對する民衆的觀察及び判斷がその核心を成し、假作的誇張が之を潤色し、又信仰的熱意が伴ふことが多い。この說話の三形態の成分を圖表に示せば、

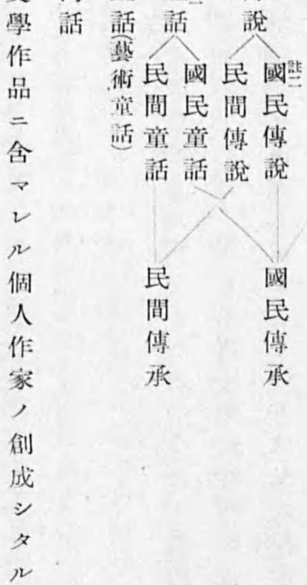
	第一位	第二位	第三位
神話	宗教的成分	空想的成分	(史實的成分)
童話	空想的成分	宗教的成分(屬ろ主として動物崇拜)	
傳說	史實的成分	空想的成分	宗教的成分

となる。而してこの場合の傳說は傳說的說話の略稱で、この點で(一)のと必ずしも一致しない。又同時に國民傳說の略稱としては(一)の民間傳說と接觸もし又對立もする。そして多くは國民的敍事詩、或はそれに準ずる文學作品の內容を形成し、謠曲・戲曲或は歷史小說に素材を提供し、同時に此處では個人作家の手に成る純製作說話と交錯或は對立する。今茲に說からうとするのは、主としてこの後の意味に於ての傳說である。

なほこの傳說といふ語は更に通俗的には、(一)の民間傳說と(二)とを併せて、廣義に歷史と又は文學と對立しても用ゐられ、或は場合によりもつと廣義的な意味での文學の中に含めても用ゐられる。

二　說話の分類

簡明に就く爲に表にして示せば、



註一　物語としての筋を持つはなし。
二　國民傳承による傳說的說話。大抵文學の形をとつてゐる。
三　傳承童話。

前章にも略述し、又右の表に示した所でわかるやうに、一般的には神話・童話は傳說と別個の區分に屬するものである。が、元來國民的民俗的なものであるところの神話と、傳承童話の中で國民的に流布してゐるものとは又、同樣に傳承による國民的說話であるといふ側からは、何れも明らかに一種の國民傳說の變種乃至特殊形態であるとも言へるのである。そしてそれ等も亦文學的形態をとつて記載せられてゐるものが多いことは、他の一般の國民傳說に於けると全然同樣である。故に場合によつては、これ等をも廣く國民傳說乃至傳說(廣義の)の稱呼の下に便宜總括しても、大きな矛盾はないのみならず、況や神話・傳說・童話・製作說話、この四つのものは、下に說く如く性質上、事實に於て互に交錯し混融する場合が少くなく、神話の傳說化、傳說の童話化、童話の傳說化したもの等多樣多彩で、相互を細別し難い場合も時にはなしとせぬので、些か漠然たる嫌はあつても、汎稱に於ける說話的國民傳承の範圍內に、屢、便宜上、神話・童話を包括させることは許容されて然るべきであらう。

三　傳說の變移性

傳說・說話は常に固定することがなく、不斷の流動轉移を繼續して、その間分解・接合・吸引・膠着・膨脹・派生等の作用を營みつゝ、變幻窮りなく玄妙自在の生成を營んで、その正體を捕捉するを容易に許さぬのが顯著な一特性である。然らばその變移性なるものは何處に起因してゐるのであるか。それは既に傳說の發生過程に於て必然に胎生せしめられてゐるのである。卽ち傳承――或一人の口から他の今一人若しくは數人の耳へ語り移される――といふ事その事の中に、それが規定せられてしまつてゐるのである。そして大抵殆ど例外なく多少の誇張的態度を以て語り移されつつ次々に傳はつて行く爲に、おのづから變移を餘儀なくされて來るのである。元來一つの傳說が產み出されるに當つて有力にはたらくのは好奇的興味と文學的潤色とであるが、更にその根基をなし、原動力となる母胎は、民族的な宗敎的信仰であり、或は又理想人への國民的憧憬仰慕であり、それからの芽生えを空想裡に發展させつゝ、史實的背景の前に創造形成せられたものが傳說である。例へば太陽に對する原始的信仰が民族的精神の具現的最高標徵を讃仰し絕對視する意識と合體して天岩戶神話を形成し、祖先英雄神への尊仰思慕と讃美感謝とが、素盞嗚尊の大蛇退治神話を

醸成し、又理想の不遇英雄源義經に對する憧憬・同情・崇拜並びに完美欲は蝦夷生脱傳說を發生せしめた。その他高僧・神仙・美人にも亦同樣の事が言へるのである。

かくして發生せしめられた傳說は、發生の時のまゝの姿で、あまり改變を加へられぬ形に於て傳承する場合もあるが、(無論上述のやうに、傳說本來の性質上、傳承の間おのづから少改變を蒙るのは必然であるけれども、)國土により時代により、それ〴〵の民族的思想と生活とに從つて着色改變せられつゝ傳承播布するのが普通である。卽ち發生に於てのみならず、成長の間にも引續いてその變移性が發揮せられるのである。つまり時代及び土地に順應しつゝ自由に流動遊行するのが、傳說の本質であると言へる。今假に時代粧により發達を遂げて行くのを時代的變容とし、土地により推移して行くのを國土的變容と名づけるとすれば、前者に於ては各時代精神及び思潮風俗の著しい影響着色の下に傳說の原の姿が樣々に潤色せられて變容し、こゝに傳說の進展性が觀られ、後者に於ては、國內に於て地方的に、或は國外に於て國際的に、變質改容して行く所に傳說の播布性が觀られるのである。この傳說の播布性は又その遊離性と密接に關係する。換言すれば、人類共通の心理智能事象等に基づくやうな說話は、國土を超越し、歷史的拘束を受ける事なしに、凡ゆる民族に、又凡ゆる地方に結合もし、――その民族若しくはその地方の民衆の手によつて適應に着色せられつゝ――或は自由にそれらから離散もする。これが所謂說話の遊離性である。これに反して一定の國土に、一定の歷史的背景の下に發生した傳說は、その土地その時代に密着して遊離性は稀薄である。一方を遊離的傳說とすれば、これは固定的傳說と說明せられるべきものである。從つて遊離的傳說は、史實的背景を有せぬ、民族的固定性のない童話と共通性を有し、(下にも述べるやうに、童話の中にも民族性を具現した國民童話もあること言ふまでもないが、童話といふものの一般的性質からは、斯く言つても大過ではない。)史實的背景の下に國土に密着せる固定的傳說は、國土により或は特殊の民族性により發生した神話と共通點を有し、乃至はその後繼者とも目され得る。併し固定的傳說といへども、說話としての本質上遊離的成分を有するのは必然であつて、唯遊離性の濃淡の度合によつて兩傾向が生ずるといふに過ぎない。固定(的)傳說の一例として、ひよどり越坂落傳說が擧げ得られる。卽ち義經平家追討の史實的背景を有し、「ひよどり越」といふ地理的事實の特殊性から發生して、民族的な文學的潤色が附加せられて成立した傳說である。故に史實的地理的背景が濃厚な爲、比較的遊離性が薄く成長性も少い。遊離(的)傳說の代表としては、猿神退治傳

說が擧げ得られる。これは歷史的背景を持たぬ民間傳說であるが、諸國に播布して、種々の地方的變容を持つ遊離說話である。他の適例としては羽衣傳說がある。これは更に廣く世界的に遊離し、分布してゐるので、この種のものを世界大播布說話と呼んでゐる。又國際的變容の例證としては有名なギリシア神話のユリシィズのオデッセイ物語が、百合若傳說として日本化し、同じくローマ神話のイニーアス傳說が義經の地獄極樂廻り傳說（御伽草子天狗の內裏）となつた如きそれであり、又俵藤太傳說は支那傳說・朝鮮傳說と共通性を有し、互の影響が見られ得るし、義經の島渡り（御伽草子御曹司島渡り）はアイヌ神話と結合してゐる。かくの如き變移性に於て、傳說の無限の進展成長發達の玄妙が湧出するのである。

四　傳說の他種說話との交錯

前表が示す製作說話に對する傳承說話中に含まれる傳說・神話・童話の三つは、前にも觸れたやうに、その性質及び成分に於て、その相互の間に確然たる界線を引く事は實際に於て頗る困難である。大體に於てはその區分があり得るのは無論であるが、共に國民的民族的な說話といふ點から概括しては他の二類も亦廣義の國民傳說と呼ぶことが可能であり、他の語を以てすれば、國民傳說の變種乃至特殊形態であるとも言へることは先に說いた通りである。卽ちこの三類の說話は民族的・國民的・空想的・變移的等の共通したものを有する性質上、互に交錯し混融するのは必然で自然で、又當然でもあるのである。

再び繰返して言ふが、傳說の中でも、殊に遊離性を多量に有するものほど童話との共通味が大きく、その接觸も緊密である。それは卽ち遊離傳說が、土地的乃至歷史的に特殊なる密着を有せぬので、各國土・民族・時代の思想・習俗等に從つて種々に改變せられ易く、固定性の薄い所が、童話と最も相似の性質にある爲である。これに對比して、土地的乃至歷史的の固定した背景の下に發生した傳說、卽ち固定傳說は、空想性遊離性からは比較的懸隔し、代りに歷史的事實に近い爲、童話との間隔はかなり遠く、寧ろ神話に連なると觀てよいのであるが、而も亦他面では、歷史以前の國民傳承は原始的・低度文化的であるから、從つて稚蒙的・超現實的・超人間的・非合理的・直觀的・單純的・空想的・民俗的等の諸點に於て、神話は却つて童話と親近なる類緣をなしてゐるのである。かやうにして神話・童話・傳說の三つは相互に接近し合ひ從つて又影響し合ひ、斯くして時代的民族的潤色を施されつゝ成長して行くのであるが、それ故にその成長の過程に於ては、いつの間にか次第に童話的成分を特に附加されて來た傳說もあれ

ば、又逆に傳說的色彩を加へられて來た童話もあり、或は後の時代になつてその時代の史實的背景を附與せられて傳說味を帶びて來たり、若しくは殆ど後代化した別樣な姿になつたりした神話も生じて來るのである。

二三の實例を擧げてみると、先づ神話の傳說化したものには酒顚童子傳說がある。これは說話の本質上並びに形態上から觀ると、素盞嗚尊の大蛇退治神話の傳說時代に於ける變形といつてよい。卽ち日本武尊熊襲誅戮の史的說話を經て、賴光の武勇といふ史的事實に結び附いての變形であると說明せられ得る。傳說の童話化したものとして、浦島太郎・文福茶釜等がある。前者は萬葉集・丹後風土記・浦島子傳等所載の神仙譚的な浦島傳說が、動物報恩說話と結合しつゝ、主人公に浦島太郎の名を與へられて童話化し、後者は地方的口碑の高僧譚が、怪談味と滑稽とを加へて童話化したものである。又傳說が童話的色彩を附加せられて來たものとしては、五條橋傳說が擧げ得られる。これは義經傳說中最も童話味の多分なもので、所謂橋辨慶傳說であるが、もと〳〵五條橋上での勝負ではなかつたのが、巨人と小人――辨慶と牛若丸――の勝負型の童話の形になつてしまつたものである。が、これは又逆に、大動物と小動物、巨人と小人の勝負型の遊離した童話が、牛若丸と辨慶に結び附いて發生した童話の傳說化形態であるかも知れない。又童話が次第に傳說的色彩を帶びて來たものには、金太郎がある。これは發生に於ては民間說話としての山姥傳說と合體した同じく民間說話の怪童傳說が童話の形を採つて語られて來たのが、その內容に禽獸童話の分子を含むにもかゝはらず、史上英雄坂田金時の生立譚に附會せられて、實在性を帶び、土地的にも固着性が出て來て、傳說的成分が濃厚になつて來たのである。

更に傳說と製作說話との交涉は、下に章を改めて述べたいと思ふが、かく傳說を中心として觀る時、他種說話との間に行はれる接合・吸引・膠着・轉化の流動作用によつて、それらは互に交錯し次第に複雜化せられ、その純粹性を失ひつゝ變容混成されて進展を續けるのが說話現象の特性である。それに各傳說がやはり同じく傳說形態の範圍內でも無論變容することは前章に述べた如くである上に、一個の傳說から他の傳說や童話を分派したり、又他の傳說や神話・童話を併合したり、若しくは却つて滅失したりして、分解・膨脹・崩壞の諸作用を營むのであるから、いよ〳〵その現象は複雜の度を增大して行くのである。

五　傳說の文學的進展・凝成

以上說述した如き意味の傳說乃至國民傳承は、その成立の過程として、又結果とし

て、國民總體のおのづからなる共同創作になるものであり、そして國民總體が共有し流布させてゐるものである。そしてその種の傳說は、發生並びに成形の機因は必ずしも常に同一であるとは言へなくとも、傳說本來の面目たる傳承に依る成長擴充作用と相關的な關係を保ちつゝ、概して國民的な敍事詩や大衆的な小說・戲曲等としての好適の題材を有名無名の作家達に豐富に提供して――換言すれば、國民の間に漸次語り繼がれ移動させられながら、絕えず改變添除を蒙ると共に、竟には何時か國民的な文學作品の形相にまで推し進められて行き――そしてそれによつて一層その傳說自身の國民的――或時には國際的にまでの――流布を促進させ擴大させ、且その姿態に凝成した形に於ての恆久性を確保するのが一般で、これ亦傳說がその播布及び進展の性能をこの方面でも自由に發揮した極めて自然な展開現象に他ならないのである。

要するに、傳說から文學への進展凝成――卽ち傳說の文學作品化といふ事は、結局傳說の本性の中に既にその可能と未來とが大部分約束せられてある、かなり重要な特質であると言つても過誤ではあるまい。傳說それ自體が大體に於て少くとも廣義には文學として許され得る場合が殆ど普通であるのみならず、素材としても、形態、表現からしてもその具有する文學的性質の多分さは、これに或纏まつた文學形態と生命とを與へ得ることの比較的容易であることを、常に示現しそれを勸誘すらしてゐるかに見えるからである。實際、傳說と文學との限界はこれ亦嚴密には劃線の引けない程、互に混融しぼかされ合つてゐる場合に餘りに屢、遭遇せしめられるのである。兎も角、かうして作品化せられてそして弘布した傳說こそ、卽ち國民傳說としての意義が判然と賦與せられた外證の保持者であると論定していゝのではなからうかと思ふ。勿論、作品化といふ事が絕對必須の條件ではないし、それよりも國民的成長及び弘布といふことの方が唯一の重大な要件ではあるのだけれども、文學的凝成は流動斷え間なき個々の傳說をば各、その寫し出されたやうな姿態として國民的に印象づける役割を勤め、認識させる結果を生むことだけは誤りなき事實である。

もとより記錄傳說、特に文學作品がそのまゝ說話研究資料として無條件無批判に採用せられることの危險さは十分以上に嚴戒せられねばならない。作品化せられたが爲に必然に或は有意的に附加せられて來た非傳說的成分の餘りにも多過ぎることは――極端に言へば、殆ど例外なしに――傳說の特質・本性をやゝもすれば攪亂しようとし、危く傳說そのものを消失せしめようとすらする。文學を通しての傳說

研究の最大缺點と困難とは此處に存する。併しそれだからとて、文學を通しての傳說研究が蔑視せられ無用視せられ排斥せられてはならない筈である。それのみでなく、傳說から生れる文學、文學から生れる傳說といふ二つの傾向と緊密に連關して、此處にこそ傳說研究の重要なる一つの面――立場――は嚴存するのである。

六、製作說話と傳說

或特定の個人作家が意識的に創り出した獨立した文學的說話、――藝術童話などはその一例である。――或は個人作家の手に成つた文學作品の一部としてその內に含まれる、その作家の創意による說話を、私は製作說話と名づけて、民衆の傳承による說話、即ち傳說的說話即ち所謂傳說と區別してゐるが、――尤も如何なる傳說・說話でも、發生の當初に於ては、完不完に關せず、或無名の個人作家の製作說話でないものは有り得ないであらうが、傳說としての意義と性質とは寧ろその後の成長流移の過程に於て決定的となるのは無論であると共に、この最初の第一人たる無名の說話創作家も實は民衆の代辯者たるに過ぎず、その意味では作家としての個性的色彩を要せず、否却つてそれが極度に拒否される。だから個性の强い文學的な作家の創作した所產、私の所謂製作說話(嚴密に言へば、製作といふ名辭は創作と撞着するやうにも聞えるが、上に述べるやうに、自然的野生的な說話と區別する爲の便宜上の稱呼であることと、そして創作といふ文藝學上の術語と紛れない爲の說話學の用語として使用したいのであることを重ねて言ひ添へて置きたい。)とはやはりおのづから區別されてよい、又區別され得る理由があるのである。而も原形がそのやうな製作說話であつても、又は元來は一地方に偏在した民間口碑であつても、それがやがて國民全般に迎へられ擴がつて行くといふ限り、それらは個人的或は地方的色調や感興以上に、國民性の本質に觸れるものがあるからであるが故に、もはや立派な民族的な傳說としての資格を獲得したものと言つて不可なきものである。

即ち初めは個人の製作說話であつたのが、國民的熱情に迎へられて、民族的思想の下に空想の世界に再生せしめられ、遂には實在せるものの如く傳說化して信ぜられ行はれて來る場合が多い。例へば竹取物語からうぐひす姬の傳說が生じ、源氏物語宇治十帖の蜻蛉・浮舟に因んで蜻蛉の墓・浮舟塚の傳說が生れ、維茂鬼退治の武勇傳說の作品化である謠曲紅葉狩から、紅葉といふ名の鬼女を維茂が退治したといふ口碑が信濃の戶隱に行はれて、鬼女塚まで遺存し、十返舍一九の膝栗毛から彌次・喜多の泊つた桑名の旅宿が生み出され、德富蘆花の小說不如歸から逗子に浪子不動が出現し、

又これは童話であるが、桃太郎の誕生地が各地に散在する等枚擧に遑ない程である。

又一面に於て、製作說話は傳承說話卽ち傳說に示唆を獲、類材を求め、形相を模して ゐる場合が頗る多く、且說話卽ち「物語られるはなし」といふ意味で、やはり傳說と種々の點で共通性を有することは明らかな事實である。兩者が互に關涉し、混合し、交錯し、轉化して來ることは奇しむべきでないのである。

七　傳說の民族的特色

第五章に論じたやうに、傳說――就中國民傳說――の發生及び弘布は、必ず國民總體のおのづからなる協力の下に行はれる。從つて國民乃至民族全般の特性も思想も生活相もこれに赤裸に無邪氣に投影してゐて、その國民自身の魂と姿とを最も如實に、最も明確に、且最も興味深く解明し描出し紹介する。換言すれば、その民族特有の思想精神によつて各傳說の形相と內容とは規定せられるものである。

發生當初からその民族特有の生活事相に根基を置く如き固定傳說にあつては無論のことであるが、玆に或一個の遊離說話があるとする。それが國內的に若しくは國際的に、或は又時代的に流移して行く場合、亦必然に、その時代の各民族性により、又國土的特質或は時代思潮によつて多少とも潤色せられ變容せられるのである。卽ち神話、童話(傳承童話)もさうであるが、國民傳說たると民間傳說たるとを問はず、或は製作說話から派生した傳說でも、その發生成長の過程に於て民族性が常に有力な指導者となつてゐるのである。故に傳說の發生進展は、その根本動力としての民族性を他にしては考へ得られないことを知らねばならぬ。

傳說の發生心理たる超現實の翹望、神祕の確信乃至迷信の慣習、新珍の希求、好奇心の誇張、空想の事實化、理想の具象化、傑人に對する崇敬、弱少者に對する同情等の著しい現象は、又世界人類に共通した所でもあるが、これが各獨自の民俗性の活動によつてそれ〳〵に特異に色づけられ、强調せられて、獨特な性質を帶びて來るのである。我が國民傳說に照して之を觀れば、例へば弱少者に對する同情は、弱きを助け强きを挫く任俠的精神にまで强められて、獨自性を發揮する。それはかち〳〵山や猿蟹合戰等の國民童話にも著しく現れてゐるが、就中義經傳說に於ける判官贔屓、曾我傳說に於ける曾我贔屓が最も如實に之を立證する。(かち〳〵山、猿蟹合戰の如きは單なる禽獸童話であり、後者は南洋童話にも共通したものを見出すやうな遊離說話であるが、これが日本的義俠精神と、敎訓的寓話思想によつて潤色せられて來たものである。そしてその動物も國土的の特性を顯してゐるのである。)

理想の傑人への憧憬は、史上の神仙・高僧・美人・英雄等に對する尊崇愛慕思想によつて具現し、且屢〻又それに日本の國民的信仰たる神道思想が結びついてゐる。卽ち佛敎的な方面では飛倉・良辨杉・役行者・一休和尙等の傳說の如き、神仙高僧に關する靈驗譚を生じ(その構成にも發生の機因にも他の要素も併せ含まれてゐるのもあるが)美人薄命に對する愛憐の同情となつて現れたものは、松浦佐用比賣・處女塚・靜御前・虎御前・淨瑠璃姬等の傳說があり、いづれも戀愛又は夫婦愛に於ける日本的な思想によつて內容づけられてゐる。特に英雄的非凡人に對する崇拜尊敬は最も數多くの國民的英雄傳說を生み、それ等の英雄譚に最も濃厚に國民性が現れてゐる事は、一々の例證を俟つまでもないが、就中英雄傳說中の白眉をなす義經傳說——義經及びその臣從を中心とする傳說群——について拾錄すれば、先づその幼時に屬する五條橋傳說(卽ち橋辨慶傳說)及び鞍馬天狗傳說に於ける牛若丸の非凡な小英雄ぶり、續いて成人後にあつての鵯越・弓流し・八艘飛等の諸傳說に於ける神人性、又辨慶の叡智及び武勇を主とした安宅傳說・衣川立往生傳說等に見られる超絕力と無二の忠誠とは、卽ち國民の英雄崇拜精神が所謂判官贔屓の義俠的心理と合體して、より完全な英雄として國民自らの空想裡にこれを描き出し、創り出さうとするのであり、同時に後者には日本國民精神の標徵の一たる忠義の理念が滲透せしめられてゐるのである。又これは極めて特異な一例であるが、任俠的日本精神の强調が、傑人崇拜の心意と合して、義賊に對する或同情同感にまで進み、鼠小僧の如き義賊傳說の生じたことも、民族性の現れとして興味ある問題である。

正義感の强調は、本格的には武士道の精華たる忠義の形相を採つて現れることは、辨慶の傳說に於ける如くであるが、この主君の爲には進んで身命を捧げて毫も厭はぬ日本獨自の國民性は又、各種の身替傳說によつて端的に現されて居り、世界無比の驚異的な犧牲精神を發揚してゐる。又、現實に於て不過なる終末をもつた、敬慕愛惜に値する正善の英雄に對する國民的同情の發露は、これ亦正義を熱愛する輿望と常に相携へて、甚大な義憤に高まるのである。佞臣梶原の讒に遭うて非命に終つた義經をして、史上の逆境を轉じて福祉を得しめ、正義に對する永遠の凱歌を擧げしめてゐるのはそれである。安宅傳說の辨慶も富樫も、畢竟國民の正義に對する絕叫の代辯者であり、代行者なのである。高館に於ける秀衡の三男泉三郎忠衡の義奮戰死も、亦辨慶必死の血戰も、史實の如何に關せず、その心理の現れに他ならない。更に、義經の高館生脫說話に至つては、國民同情の最高調といふべく、遂に內地に於て容れられ

ざる正義英雄は、蝦夷に渡つて、義經大明神(オホクルミ)とまで崇祀せられる事になつてしまつた。そして更に進展して、義經の韃靼入り、續いて成吉思汗說をまで生むに及んでは、國民的同情の如何に熾烈で、如何に無限であるかが推知せられると共に、正義を飽くまで主張し、善きものを結局に於て必ず成功せしめねば已まない民族性が旺盛に活動してゐることが例證せられる。

又忠と併せて國民思想の一つの代表を成す孝の一念、の爲に、その生涯と身命とを賭した曾我兄弟に關する諸傳說も亦この國民的同情によつて創造成長せしめられたのである。つまり判官贔屓と並稱せられる曾我贔屓の結晶なのである。殊に曾我傳說は時代思潮たる敵討――そしてそれは孝心の武士道的具現方法であつた――を中心思想としてゐる爲、一層特異の國民性を顯示してゐる。

超現實の世界を求め、神祕を信じ、迷信に溺れ、好奇心を飛翔させる所にも、異常人、奇行人に對する興味畏敬の一方に於て、日本獨特の怪異譚として現れ、菅公化雷、賴豪化鼠、葛の葉、安達ヶ原、四谷怪談等の諸傳說が生じてゐる。怪異思想並びに怪異傳說の發展には隣邦支那からの影響感化が甚だ大きいものがあり、特に近世に著しいのであるが、なほ日本的な習俗と考へ方との支配を脫することが許されない。菅公の傳說の如き又義經傳說と相似た國民の同情愛敬と義憤とから來てゐるのは爭はれない。これら普通の怪異譚よりも更に特筆すべき日本特有の神祕的な傳說の一類がある。それは藝術を崇拜し神聖視し、その靈活力を强調するの極、これを一種の信仰にまで推進めた心意から生れた藝術傳說である。殊に和歌に關しては、古今序に、「力をもいれずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ」と提唱せられてゐるその信念を具象化した、和歌による靈感說話、所謂歌德傳說、として種々の雨乞、日乞傳說や、蟻通、墨染櫻等の傳說を生じ、漢詩、俳句の場合にも類話を生んでゐる。その他博雅三位、巨勢金岡、左甚五郎等に關して傳へられる藝術技靈傳說も類種の特異な民族的所產である。

なほ性質上傳說と類緣を成す童話及び神話の兩者にあつても、民族性の顯現することは同樣である。童話に就いては先にかち〳〵山、猿蟹合戰に關して些か述べた。その他桃太郎にも、花咲爺にも日本國民性の特質が遺憾なく見出される。特に前者に於ての海外發展の意氣と、惡鬼の征服と父母への孝心と、そして後者に於ての灰から花を咲かせる美しい奇想天外的な構案とは、いづれも日本民族の好尙を十分に表現し得てゐる。又、日本神話を通して最も深甚に現されてゐる淸淨を愛し、明朗をよ

ろこぶ天性の如きは、實に又代表的な民族性の特質と言はねばならぬ。それは外國の建國神話に比して、根本的な國民性の相違を見出し得るところである。

傳說が流移弘布するに際して、國土的特質若しくは時代精神の影響を免れ得ないことは、民族性に於けると同樣で、これに次いで着目せらるべき大切なポイントである。民族性について說述したのに附して簡單にそれを例證して置かう。國土色に關しては、猿蟹合戰童話に關しても一寸觸れたが、例へば因幡の白兎傳說の如き、その本據をなすと思はれる印度說話では猿と鱷、或は南洋說話では小鹿と鱷の話であつて、何れも熱帶地方生棲の動物となつてゐるのが、一度遊離して日本化すると、その國土的特色を現して白兎となり(鱷も後にはわにざめと變り)更に因幡といふ土地的固着を生じ、大國主命の國土經營神話に吸合せられて命の仁慈を說明する說話となり、更に正義の豫言者となつて兎神といふ神格まで與へられるといふ事になつて來た。舌切雀の童話でも原話と考へられる蒙古乃至朝鮮の腰折燕が日本化して腰折雀となり更に轉化して舌切雀となつたのである。遊離性の多分な童話ほどこの變化が甚だしいのは當然であるが、傳說でも厚薄の差があるだけでやはり同斷である。又傳說に時代精神の宿る例は、これも前の猿蟹やかち〳〵山等の國民童話に於ける敵討思想にも窺はれるが、大蛇退治神話が變容した酒顚童子傳說の如きは、英雄譚であると共に、神佛の靈驗が加つたのは、近古の時代色であり、總じて近古の諸傳說に佛敎的色彩の濃いのは卽ち時代意識の如實の現れを物語るもので、又賴光以下が山伏姿で退治に向かふ行裝には、これ亦近古時代の習俗と信仰とが反映してゐる好適例を示してゐると言ふべきである。

要するに、傳說神話童話は、民衆或は民族乃至國民の僞り得ない姿見である。これを考察し解明することは、やがて民族性と國土色と時代相とを察知し解剖する所以となるのである。

八　傳說の分類

國民傳說の本質並びに特性に關する概說を以上で一應了したから、次には形式と內容とから併せ考へて、これを種別に分類しつゝ、國民傳說の大略についての考察說明をしてみたいと思ふ。各傳說個々に關しての精細な分析檢討は今此處での問題ではないから、主なる形態に類別して、その各類に屬する有名なものを數箇例擧する事にする。(名稱・性質等で必要上既に用ゐたり說明したりした術語や內容もあり、幾分重複する所もあらうが、それらをも含めて、玆で又改めて總括してみようとするの

である。）そしてそれとても前に述べた如く、傳說の性質上、確然と一つの分類の中に收め得られず、數項の分類に跨るものや、特殊の形態を保持しないものもある爲、嚴密の分類は不可能であり、又未だ日本の傳說學なるものが確立せず、一定の分類法が完成してゐないので、私見によつて便宜上大體の分類を行つてみるだけである。不備の點は尠くないであらうと思ふ。

扨國民傳說の中で最も主位を占めるものの一は何といつても英雄譚、卽ち武勇傳說である。殊に武の國日本は、武勇崇拜の國民性によつて、史實的英雄を誇大化し非凡化し理想化し完全化する所に英雄譚が數限りなく生じた。この英雄譚を更に細別して、

鬼神退治說話
　例　賴光酒顚童子退治・渡邊綱羅生門鬼退治・維茂戸隱山鬼女退治等。

怪物退治說話
　例　賴光土蜘蛛退治・俵藤太蚣退治・源三位賴政鵺退治等。

力競說話
　例　朝夷義秀と曾我五郎草摺引（同種の說話型として鎧引・首引・車引がある）・朝夷門破等。

弓術說話
　例　爲朝の强弓・百合若大臣の强弓・那須與一扇的・賴政鵺退治等。

英雄出生說話
　例　鬼若丸出生・保昌出生・日吉丸出生等。

英雄生脫說話
　例　義經高館生脫・爲朝琉球下り・朝夷島渡り等。

英雄身替說話
　例　佐藤忠信の義經身替・村上義光の大塔宮身替・仲光傳說等。

英雄巡島說話
　例　爲朝島巡り・義經島巡り・朝夷島巡り等。

戰鬪說話
　例　八艘飛・鵯越・逆櫓等。

復讐說話
　例　曾我兄弟敵討等。

以上の中、力競說話は、競爭者が互に腕力・脚力・武術・我慢・智慧・法力・技藝・寶等を競べ合ふ說話型の一種で、この競合の說話型は、何れの民族にも屢〻發見する所であり、事實とし

ても、亦度々行はれたのである。我が國でも力競・武勇競は神話中にも既に存してゐる。(建御雷神と建御名方神との力競はその代表的なものである。)身替說話は、日本固有の武士道精神から生れた諸傳說であり、主君の危急を救ふ爲、自身若しくはその愛子を以て身替に當てて敵を欺くもの、特に仲光傳說の如き愛子を身替に立てる悲痛な形式は特殊な日本的樣式で、淨瑠璃・歌舞伎に最も多く行はれる寺子屋型がこれである。巡島說話は、所謂ガリヴァー型の說話で、珍奇の國々を巡歷して、異人種異風俗に接觸するといふので、甚だ空想的分子の濃いものである。そしてこの主人公が英雄である場合は、それ等の國々島々の土人等に恩威を施して臣從させるのが常型である。(前揭の生脫說話と連なることもある。)

「英雄譚は國民傳說の主部に位するものであるから、國民傳說の一般を說明するに便宜である爲、稍精しく述べてみた。國民傳說の他の種類についても右と同樣に細別の分類が出來るが、頗る煩雜になるから、唯主要な類別と特殊の形式とを示すだけに止めて、次に略述して置かう。

卽ち英雄譚の次に最も重要な位置を取つてゐるのは宗教譚である。これは神仙・高僧譚と靈驗譚とに二大別してもよい。兩者の相重なるもの、或は密接に連關する場合も無論多い。前者は英雄崇拜が宗教心と結合したものとも解釋出來るし、後者は神佛の利益がその核髓を成してゐる。役行者・弘法大師等の傳說は卽ち神仙或は高僧の偉大さ若しくは聖德を語るものであるが、その神祕超絕の法力が靈驗を顯す場合も屢、附帶せしめられて居り、それが單にその仙僧自身の偉力の發揚であることもあれば、神佛の感應の誘因となることもある。日蓮上人の龍の口法難傳說など後の例である。高德の宗教家でなく、庶民としての信心家、純眞弱少の子女、無智の漁農等の場合は單なる神佛の靈驗譚のみを構成することもある。そして靈驗譚には民間信仰としての觀音信仰と地藏信仰とが特に多い。これらの宗教譚は日本靈異記・今昔物語を初め、說話文學特に佛教說話文學に無數に並擧せられてゐる。その中には發心・往生・再生・冥府巡行等の說話や、時には神仙・高僧の失敗墮落の傳說なども見える。又後に述べる浦島傳說も亦一種の神仙譚でもある。

それから孝子譚としては、養老瀧の酒泉傳說(これは地名譚でもある)・松山鏡の孝女傳說・隨身公助の孝行傳說等が擧げられる。孝子の至情に感應して神佛の冥助があり、惠報が來ることに終局する如き、靈驗譚と結合した形を取ることもある。養老傳說も天地神明の感應に他ならない。

次に美人譚は、美人に對する憧憬に根ざして、これに對するその生涯の不運や末路の非命やに同情哀惜する心情――それは多く所謂美人薄命の迷信と交渉をもつてゐる――から成立弘布させるので、美人零落傳說・美人遊行傳說等と呼ばれるものがその代表をなしてゐる。前者は容姿の艶美を誇る麗人が、晩年に於て一朝その若さを失ふと共に世に棄てられる悲慘さを語るもので、有名な卒塔婆小町傳說はそれであり、檜垣嫗・清少納言等の上にも傳へられる。後者は美人が夫に死別し、或は寵衰へた後、諸方を歷巡してさまはる形のもので、美人徘徊說話とも稱し、和泉式部・靜御前・虎御前等に關して傳へられ、その足跡が全國に多い。小野小町・和泉式部・清少納言等は兩者に亙つて語られてゐる。その他美人譚には、美人殺害說話(例、山中常磐傳說・美人入水說話(例、皆鶴姫傳說)・美人身替說話(例、袈裟御前傳說)等もある。

次に藝術譚、これは藝術神祕・藝術神聖の思想から生じた傳說であることは既に說いた。その主なるものは、勝れた藝術の力による神佛の感應や技靈を物語る歌德說話及び名匠說話である。前者としては小町雨乞・能因雨乞・其角雨乞(俳句)の各種雨乞說話(舞樂の德による靜の雨乞傳說もある。)及びこれと類種の止雨說話・日乞說話もあり、その他歌(詩)德說話は頗る多いが、就中都良香の詩德傳說・小式部の歌德による起死回生傳說・紀貫之の蟻通傳說等皆屈指の例話である。又これに類する樂德說話(例へば和邇部用光の逸話(千訓抄・著聞集)などがある。後者としては巨勢金岡の萩戸の馬・弘法大師・佐理・行成等の書道傳說・飛彈工と百濟河成の技競べ・雪舟の鼠・左甚五郎の鳴龍その他の傳說がこれに屬する。その他藝術譚には、朱雀門の鬼笛・玄象の琵琶等の名器說話もある。

次に地名譚としては、地名或は地形等の由來を說明するものが特に多く、記・紀・風土記等に數多これを見るのであるが、その二三の例として、東國稱呼由來傳說(記・紀)・須賀地名由來傳說(記・紀)・國引傳說(出雲風土記)等を擧げて置かう。發生の機因は、地名があつてそれから傳說が生ずる場合もあり、或傳說から新しく地名が生れる場合もある。又複雜な內容の傳說中に含まれる場合も多い。

それからこれは妥當な稱呼ではないかも知れないが、民俗學的材料を提供する、各民族の原始習俗・原始信仰や各地方の特殊生活樣式等を物語る一群の傳說を假に民俗譚と名づければ、羽衣傳說・浦島傳說(この二つは又成分として神婚說話をも含んでゐる。)・姨捨傳說(これは又一面地名譚中にも含まれ得る。)等があり、この他歌垣說話としての童子女の松原傳說(常陸風土記)、妻爭(競婚)說話としての生田川傳說等がある。

最後に怪異譚として、前の民俗譚中に擧げた龍宮の神女(乙姫)と婚する浦島傳說や天人と婚する羽衣傳說等が代表する神婚說話と、豐玉姫傳說・葛の葉傳說等が代表する怪婚說話(浦島傳說も龜との結婚といふ意味ではこの類に屬する。)と、それに菅公化雷傳說・賴豪阿闍梨化鼠傳說・道成寺・安達ヶ原・四谷怪談・皿屋敷・各種怪猫傳說等を總括する怪奇說話とを類別することが出來る。怪婚說話や怪奇說話は又靈驗譚(神佛利益或は法力說話)や時には英雄譚(退治說話)と關聯せしめられてゐることもある。

右に試みた分類法並びに名稱は、各傳說の內容・性質・形式等を綜合して、同時に在來普通に行はれてゐる稱呼をなるべく用ゐることにしたまでで、極めて平凡で通俗的便宜的なものに過ぎない。更に學術的には形式方面からと內容方面からと別々の分類が施されて然るべきであり、又幾つかに共通した特異の形態を有するもの——卽ち說話型を有するもの——のその型式に對して、それ〴〵稱呼を與へて類別することも可能であり必要である。例へば大蛇退治型・羅生門型・白鳥處女型等である(これが一面遊離說話の形式であり、その中で世界各民族に共通したものが所謂世界大播布說話である。)が、その詳論は他の機に讓つて今は以上に止めて置くことにする。

天狗の內裏とイニード(アェネーイス)

——牛若丸地獄極樂廻傳說とイニーアス(アェネーアース)傳說——

一

近古の小說に天狗の內裏といふ作がある。

馬琴の羈旅漫錄(卷の上、(廿八))に「名古屋にて見たりし繪卷物」として、「すゞめ松ばら」・「福有(富イ)のさうし」等の名を列擧してゐる中に、これだけは馬琴自身は見なかつたのだけれども、

一、天狗の內裏　繪卷物

これは先年名古屋の道具屋にありけるよし、いづれの旅人かもとめ行けん次の日問ふにうれたりといひしとぞ。名古屋人もをしみあへり

としてゐるにみれば、繪卷として行はれたことは知り得られる。(燕石襍志(卷四)の「浦島之子」の條にも、繪卷物として數へてゐる。)考古畫譜(卷八)には增補の項に右の文が引いてある。

版本として現存してゐるのは、卷末に

萬治二年仲夏吉辰　松會開板

とある繪入の「てんぐのだいり」（上下二卷一冊、帝國圖書館藏）で、（正德五年刊の增益書籍目錄には「二方や庄、天狗內裏」と見えてゐるから、他の版もあつたのであらう。「万や庄」とは「萬屋庄兵衞」のことである。）奈良繪入織物表紙の上中下三冊本は舊霞亭文庫の藏書中に在り、渡邊氏の存生中に同氏宅でも披閱の機を得たことがある。（延寶五年刊の古淨瑠璃にも同名の作がある由であるが未見に屬する。（註））

註　その後東京帝國大學國文學研究室に購入せられた平田經二郎氏舊藏本（五段本、宇治嘉太夫正本）を披閱することを得たが、題號は本書から借りられてゐることは推知出來るけれども、內容は淨瑠璃姫傳說が主で、本書との直接交涉は、第一段に「てんぐのだいり」として、奥下りの牛若を大天狗が祝ふところがあるくらゐの僅少な程度に止まつてゐる。

二

さて其の內容は、牛若丸が鞍馬の大天狗の案內で、地獄極樂を巡つたといふ物語である。今その梗概を簡單に記してみる。

牛若丸七歲にして鞍馬に上り、東光坊の許で勉學し、佛典草紙類讀破せぬはなく、學問頗る上達した。或時、鞍馬の山奥に天狗の內裏といふがあると聞き、如何にもして一見したいと心を碎き、終に毘沙門に祈誓して其の所在を知らうと願つた。其の夜蒙つた靈夢の告あやまたず、毘沙門乃ち僧形と現じて示された方角を辿つて尋ぬて行くと、果して內裏に行き着いた。結構壯麗眼を驚かすばかりである。內裏の主の大天狗は悅んで此の珍客を迎へ、歡待至らざるなく、眷族を召集して種々の奇法を施させ、自らは五天笠の狀を目前に示して源家の公達を慰め參らせる。大天狗の妻これは天狗の棲處にある唯一人の人間で、甲斐國こきん長者の獨り娘きぬひきひめといふ女であるが、懷かしい人間界から來た御曹司を何をがなもてなさうと、終に牛若に勸めて、大天狗を案內者として一百三十六地獄を巡らせる。牛若はかくて地獄の諸相をつぶさに見聞した。（以上上卷）

ついで大天狗は牛若丸を伴うて極樂世界に到ると、きぬひきひめが牛若に告げた通りに、此の九品の淨土に御曹司の父義朝は大日如來になり、蓮華の上に安坐して居る。初めは大日如來の聲のみで牛若と種々の佛法問答を試みた後、始めて妄執の雲を霽らして親子の對面を遂げ、然る後に、我が心を慰めむ道は佛法修行にあらず、平家を亡して我が仇を報ずるに如くはないと訓へ、更に牛若の未來に就いて懇々と語る。かくて牛若は父に別れて天狗の內裏に還り、此處で改

めて大天狗と師弟の約を結び、やがて辭して東光坊へ歸つた。（以上下卷）

話の筋は大略かうである。牛若丸の地獄廻り、全く妙な物語である。天狗の內裏といふ名からして可笑しく響く。だから近古小說解題の平出氏も

當時牛若に關していかに荒唐なる傳說の行はれたるかを知るに足るべし。（二九七頁）

と言つて居られる。併しながら此の傳說の本據が、若し下に說くやうなものであるとすれば、毫も不思議とするに足らぬことがわかる。

三

一體、地獄極樂見物の思想なり說話型式なりは、其の萠芽早く日本靈異記、今昔物語等にも見え、以後の說話集には數多く見出される所で、印度から支那と、所謂三國傳來の佛者思想に由來することは言ふまでもない。日本神話――それを形成してゐる各要素には、外來分子も含まつてゐようが、それは暫く別問題として――にも伊弉諾神の黃泉國行、大國主神の根の國行があるが、本傳說に直接の系統を引くものは、それらの神話でなく、やはり普通の佛說の方便畫や架空談に示されてゐるそれである。特に此の時代は通俗的な宗派が弘通して來てゐる時世であり、勸進比丘尼の地獄極樂の繪解が流行つたりなぞするし、同じ近古の小說にも、同じ地獄極樂廻說話として知られてゐる仁田四郎の探險譚、富士の人穴草子もある。又甲賀三郎地獄廻の傳說もある。太平記（卷二〇）にも、結城入道の墮獄譚が在る。牛若丸の地獄極樂廻譚は、直接か間接かにこれらの影響を蒙り、或は關係があるべきことも直に想像せられ得るところである。

又、未來記の趣向なり型態なりも、特に此の時代には珍しいものでなく、太平記（卷六）の正成の天王寺未來記は暫く措くも、「解脫上人事」（卷一二）、「宮方怨靈會六本杉事」（卷二五）「雲景未來記事」（卷二七）、「吉野御廟神靈事」（卷三四）と數へられ、舞曲には未來記があり、謠曲には後のものかも知れないが沼捜があり、又松山天狗も同じ系統に屬せしめてよからう。

天狗の內裏といふ奇想も、强ひて本書乃至本說話獨特としてしまはなくとも、自ら發生し結象すべき可能性が豫測せられぬでもないものがある。天狗の棲處が一種の仙谷、靈地と考へられて來るのは寧ろ自然で、其の僧形或は山伏姿と假想せられるところから、舞曲未來記のやうに、大寺院、大僧坊と現出するのは最もふさはしいのであるが、解脫上人が伊勢の外宮の前に通夜して測らず目擊した宮殿樓閣は、魔王共の議定の席で、天狗の內裏とは明記せられてゐないけれども、類想の進展を暗示してゐ

るとも看られる。要するに、魔道の巢窟から蓬萊思想並びに淨土樂地思想に共通した一箇の神祕幽玄な人外仙境への轉化で、同時に、天狗が其の形態の進展に伴ひつゝ、賦與せられて來た人間的姿態味からと、其の精神に於て佛法障碍の大惡心より漸く離脫し來らうとする殊勝な心懸が報いられつゝ、雲上生活の幻影が彼等の上に結びつけられて來る時、容易に天狗の內裏は出現する機會を用意せられてゐるものと言はねばならぬ。何となれば、時代の一般民衆にとつては、九重の大內山はとりも直さず高遠神祕の人外境（ユートピア）として、尊崇憧憬の世界であるからである。そして又一方、いたましくも、世を呪ひ覆さうと誓つて天狗道の苦に墮ちて居られると當時の民衆に信ぜられてゐる方々の中で、曾ては其の奧深き雲の上にましましたやうな御名をさへ數へ奉るあるに於てをやである。

かく本說話を構成し或は其の裝衣となつてゐる主要素は、內地固有の、或は既に內地化せられた思想的產物、少くとも東洋的のものと、一見斷じ得るやうに考へられるのであるが、仔細に考察する時、全說話の骨子を成してゐる物語の本據（クエルレ）は、どうも泰西傳說に在ると言ひたいのである。

四

傳說には遊離性がある。或機會に一民族の有する傳說が他民族の間に移植せられて、後者固有の國民性・時代思想・風俗習慣・宗敎・氣候風土の關係等種々の原因によつて、其の民族に適應するやうな形にいつのまにか變へられてしまつて、後には殆ど其の本據を知り難いほど、原傳說とは趣を異にしたものとなつて、傳はり行はれるのは珍しい事ではない。我國の國民傳說中にも、日本固有の傳說のやうに見えて、實は意外な外國種が、其の土地を變へたが爲に、江南の橘變じて江北の枳となつたのが少くないやうである。特に印度及び支那傳來の說話に其の例が多く、且多からうといふことも容易に想像され得るし、今昔物語や私聚百因緣集や三國傳記などは三國流傳の說話を多く集錄してゐるので、其の解謎資料の提供者としても最も貴重な文獻である。印度の棄老國の話と蟻通乃至姥捨傳說、朝鮮說話の瘤取りと宇治拾遺の瘤取りとが同一傳說であらうことは既に言ひ古されてあるが、羿が十日を射たといふ有名な支那傳說（淮南子本經訓）は、今昔物語（卷一〇）では同じ震旦說話ではあるけれども、百步楊を穿つ同じ名射手、楚の養由基の上に移つてをり（「養由天現二十日一時射二九日一語第十六」）更に日本では、垂仁天皇の朝に九日出現したのを、八人の射手に勅して烏の化した八日を射落さしめ給ふ話（廣益俗說辨正編卷五）に變つてゐる。（なほ序に、臺灣蕃族の間に播布して

ゐる二つの太陽を射る話は、別系統のものとして說明せられ得るが、相似た型（タイプ）の說話である。）又、地獄譚の一である大和國安日寺の僧蓮圓が墮獄の母を尋ね、法華經の功力に依つて其の苦患から脫れしめるといふ奇夢の傳說（今昔物語一九「僧蓮圓修不輕行救死母苦語第二十八」）は、同じ今昔（卷七）の「震旦絳州孤山僧寫法華經救同法苦語第二十三」の夢遊說話の轉化としても考へられ得ると共に、例の目蓮尊者が餓鬼道の苦に墮ちた亡母を救ふといふ名高い盂蘭盆の由來傳說（佛說盂蘭盆經）（日本では三寶繪詞（下）七月、盂蘭盆、私聚百因緣集（卷三）の「目連神通事付救母亦降龍事」・三國傳記（卷九）「目連尊者救母事」等に載つてゐる。）が、亦本據として注意せられねばなるまいと思ふ。（なほ一方、支那の招對の蘇生說話（三國傳記（卷七）「招對於地獄値亡母事。禪城事」）も此の佛說からの派生と考へられる。）

それに比して、歐洲の傳說が流傳轉化してゐる量が多くない理由は、我が國の地理と歷史とを知る者の怪しまぬ所であらうが、猶印度・支那等を通して、或は特に戰國以後南蠻との交通が開けてからは直接に輸入せられたのもかなりある筈である。

唯、傳說の播布して行く間に蒙る必然の改變は、明確に推知し得られるやうな或個人作家の意識的な所謂換骨奪胎――八犬傳の智玉犬阪毛野が八百八人の奇謀や、管領軍を前にしての長阪橋の犬飼現八の膽勇といつたやうな――よりも寧ろ自然である爲、或場合却つて巧妙を極めてゐることがある。殊に同化力の强い日本民族は、茲でも、民俗學者や說話研究者に本據の鍵を容易に摑ませてくれないことが多い。是が外國種傳說が少いやうに見えしめる所以でもあり、亦國民傳說としての意義を大ならしめる點でもある。

五

曾て坪內逍遙博士が早稻田文學（明治三十九年一月之卷）に「百合若傳說の本源」と題して、同傳說が有名なホーマー（ホメーロス）のオディッシイの變形なるべき由を說かれたことがある。併し餘程原傳說とは距離があつて、八劍・御崎・異國退治（謠曲）のやうなものを生み、烏追船（謠曲）・信田（舞曲）・まんじゆの前（御伽）のやうなものが作られた（中には比較的新しいものもあるが大體に於て）時代の產物として大きな矛盾はないのみならず、應永二十六年の外寇の事實もあり、又壹岐・豐後などに口碑として播布してゐる類似の武勇傳說がある由であるから（早稻田文學明治四十年二月之卷「壹岐の百合若傳說」高野斑山博士）簡單には決定出來ないかも知れないが、若し假にオディッシイが其の本據であることが事實だつたとしたら、餘程日本化してゐると言はねばならぬ。そして我々にはまたそれが却

つて面白く感ぜられるのである。

室町時代は我が國に於ける著しい傳說發生及び大成の時代である。所謂御伽草子・舞曲・謠曲等の材料は大部分古傳說である。作者を詳かにせぬ國民的敍事文學を最も多く生んだ此の時代、そして日本の對外的眼光が漸く開かれかけて來た此の時代に、從來の印度や支那のは勿論、特に室町末以後には泰西の神話傳說の紛れこんでゐるのが、或は意外に少くないのではないかと考へても、不當な臆測ではあるまい。

御伽草子の一寸法師や狂言の竹の子爭・暇の袋などに、グリム童話などを通して知られる泰西說話の片影を看るやうな氣がすると言つても、一笑に附せられるであらうか。さればとて、もとより彼我偶然の暗合もあらう。單に一部分若しくは外形の類似のみを以て、卽斷するのは危險であることはいふまでもない。怪物グレンデルの腕を引きちぎつた翌夜、怪物の母が其の腕を取返しに來たのをも退治する話を以て、直にベオウルフ傳說が羅生門傳說の本源だと做すは如何であらうか。傳說の本據の研究は愼重な注意を要すると思ふ。

六

そこで本題に立戻る。今私はオディッシイのことに言及した。イリアドと共に所謂"Homeric Epic"として有名な希臘の武勇譚たる此の物語に竝べ稱せられる羅馬のそれは言ふまでもなくヴァヂル(Virgil)〔ギルギリウス〕のイニード("Æneid")〔アェネーイス〕である。トロイ戰爭に敗れて、父を肩にして圍を遁れ、伊太利に走つて終に羅馬國の基を定めた英雄イニーアス(Æneas)〔アェネーアース〕の物語、希臘神話の終に續いて、羅馬神話の始をなす重要な建國詩、あのダンテの神曲の搖籃となつたと言はれる此のイニードの第六卷目が卽ち、イニーアスの地獄極樂廻の話で、亡命の途にして此の世を去つた父に再び極樂で對面する條である。之を此の天狗の內裏に比較すると、決して偶合とは思はれないものがあるのである。

今イニードの同卷の梗概を揭げる代りに、天狗の內裏との各〻の說話の大筋を、順序立てて要點に就いて兩傳說を比較しただけで、卑見を確めるに足りると信ずる。

イニーアス傳說

1 イニーアス伊太利の海岸に到着してアポローを祀つた聖山の黃金造りの神殿に赴き、洞穴の巫女から神託を聽く。

天狗の內裏

1 牛若丸鞍馬の毘沙門堂に祈り、夢想によつて山奧に入り、鐵門金殿の天狗の內裏に尋ね到る。

2夢に現れてイニーアスを招く父に尋ぬ逢ふべく冥府に入る方法を巫女に詢ると、巫女は下界の女王の爲に黄金の枝を森林中に求めよとの難題を與へ、之を果した後、導いて地獄に赴く。

3先づ毒瓦斯の火口に飛入り、黑河の穢怪なる渡守に會ひ、殺生湖を通過する。

4嬰兒界・寃死界・自殺界・哀傷界・勇士界・等の各地獄を巡る。

5最後に極樂(Elysium)に到つて亡父アンカイシーズ(Anchises)〔アンキーセース〕と再會する。

6父から魂の輪廻の神祕を說き訓へられ、更にローマ人の未來と、イニーアスの戰捷による大建設功業についての豫言を聽かされる。

其の他の細かな點はもとより異同があるが、イニーアスが地獄で、生前彼の水先案内をしてゐた亡友パリニューラス(Palinurus)其の他と語るのを、牛若が餓鬼道で一人の餓鬼と言を交へるのに一致せしめる必要は無くとも、又、若し鞍馬山時代でなかつたら、そして奥下りの後だつたら、哀傷界でイニーアスが邂逅するカーセーヂ(Carthage)の女王ダイドー(Dido)の靈の役目は、さしづめ矢刻の淨瑠璃姫ででもあつた筈と附會的な想像を加へずとも、極樂境(イリシアム)にアンカイシーズが、人間を始め一切の生類は靈と土との混合物なりと說けば、淨土に牛若は大日の法問に答へて、人死する時は木火土金水の原質に歸することを述べるのは甚だよく相應じてゐる。そして、ドライデンが"The Sibyl's palace"と譯してゐる巫女の洞は、其のまゝ天狗の內裏に當るではないか。

因に、原書には'tecta Sibyllae'とある。'tecta'は原義は'roof,'house'とふつたやうな意味の由であるが、ネットルシップ(Nettleship)、ワグナア(Wagner)は'seems to be the temple'と註し、コニントン(Conington)は'home'と譯し、ロンスデール(Lonsdale)リー(Lee)二氏の譯

2大天狗の妻の勸めによつて、父に逢ふ爲に、冥府の見物を懇願すると、大天狗は法問を以て牛若を試みた後、案內を諾して相伴つて地獄に赴く。

3先づ炎の山の地獄と血の池の地獄とを觀る。

4餓鬼道・修羅道等一百三十六地獄を廻る。

5最後に九品の淨土に到り、今は大日如來となつてゐる亡父義朝と再會する。

6父の法問に答へて、輪廻の理を述べた後、父から牛若自身の未來記、平家を亡して天下の武將と仰がるべきことを豫言される。

には‘dwelling’としてある。

七

牛若丸の地獄極樂廻り、餘りに荒唐で、殆ど義經傳說らしく無いやうなのも、仁田四郎の探險譚の變形としては、甚だしく離れ過ぎてをり(人穴草子の地獄極樂の狀と、本說話のそれとを對比してみても、細目に於て全く別箇の說明描寫である。直接の粉本とは見做し難い。)、狂言朝比奈の地獄行とは、主題・構想全然異種のものである感がするのも、また天狗の棲處を內裏といふが如き、前に述べたやうに假令宮廷生活に憧憬した時人の思想が之を助けたことはあつても、なほ稍突然の嫌がある――特に本說話に於ては――やうなのも、右の兩傳說を比較する時、其の疑問も自然と氷解して來るのを覺えるのである。若しも坪內博士の推定說のやうに、百合若傳說の本據がオディッシイであるとすれば、トロイの戰捷者と戰敗者とに關する泰西傳說が、それぞれ日本化したのは、面白い對照と言はねばならぬ。

なほ、地獄廻りの話はオディッシイ(第十一卷)にもある。ヴァヂルは之に示唆を受けて、イニーアスの地獄廻りを書いたのだらうと言はれ、又オディッシイの同部分は、後人の攙入だとの說もある。オディッシュウス(Odysseus)の地獄行も、タイリーシアス(Teiresias)から自分の將來に關する豫言を聽かうが爲で、又母の靈に會ふこともある。イニードの第六卷とは必ず關係があるに違ひないが、少くとも此の牛若地獄廻傳說に直接交涉を有するのはイニーアスの方である筈である。

八

私は便宜上、作品としてのイニードと天狗の內裏とをとつて其の內容を比較したのであるが、兎も角も牛若地獄廻といふ此の無稽の物語は、イニーアス傳說の變形轉化であらうことは、先づ疑ひなからうと思ふ。これが日本化して義經傳說に吸引併合せられた徑路に關して、明證を提示する資料に逢着することの出來ぬのは遺憾であるが、恐らくは大陸を經由して自然に北方から移入されたのでなくて、室町末期に海を渡つて、南蠻人の手によつて直接傳來したものであらう。そして多分イニードから來たものではあらうが、天狗の內裏の作者が直ちにその原泰西敍事詩から飜案した――勿論飜譯してくれたのは別人であらうが――と看なくてもよい。他の卷卷の飜案せられた形跡も無いやうであるし、當代の草子・謠・舞曲の各篇成立の一般傾向に觀ても、天狗の內裏の繪卷なり草子なりの創作せられる以前に、說話としては大體形を成してゐたのであつたかも知れない。缺舌人種の口から移された珍しい異

國譚の內容の一部が、さらでも地獄廻式類話の行はれ來つた時代の繼徒若しくは其の類の人々にとつて、自然に通俗說法の方便として都合のよい材料となつたのではなかつたか。或は日本人に語られた時に、既に原敍事詩とは自然幾分離れてゐたらうと想像することも、可能でなければならぬ。そしてそれが日本化するに當つては、幸にも稍相似た條件を偶然が賦與してゐる以上「判官贔屓」の國民的且時代的な意識の濃厚な對象として、典型的な國民英雄として、當代の傳說文學の世界に雄飛してゐた牛若丸の義經に結びつくことは、極めて自然な經過であつたと言ふことが出來よう。

九

天狗の內裏が鞍馬天狗傳說――義經記（卷一）では未だ形を成してゐない。それだからとて、傳說としての進展の絕對の否定とはなり得ないかも知れないが、流布本平治物語（卷三）の語る同傳說は、本據の解明資料として躊躇なく用ゐることには贊成出來かねる體の記述であるし、旁々文獻としては、作品としての謠曲鞍馬天狗、舞曲未來記などを以て、完形の同傳說の包持者と觀るが妥當であらう。――播布以後の作であるのは言ふまでもないが（そればかりでなく謠曲鞍馬天狗（宮增作といはれてゐる。）より後の作であらうことは、詞章・構想の上からも言へる點がある。舞曲未來記とも、特に、天狗が未來記を語る構想に於て交涉があると考へられるが、それは寧ろ純內國的の發生進展の樣式として存立し得べく、本書乃至本說話の方が恰好の粉本を却つて茲に見出して、其の日本化の過程を一段と自然ならしめた關係に在るものなのであらう。未來記の創作年時も全く不明であるが、他の舞曲各番の所演記錄、大略の成立年代等から推して、又、下に述べる義經に關する諸傳說成立收載といふ事實から考へても、所謂天狗の未來記は、僅に平家・盛衰記の事件程度に止まつてゐるから、同曲を以て天狗の內裏よりも後の作とは看做し難い。）其の他、義經に關して傳へられる殆ど總べての傳說の既に略ぼ完成した後の作、卽ち室町時代でも少くとも中期以後の作でなければならぬことは、大日如來の義朝の語る未來記中に、それらの諸傳說、卽ち

五條橋千人斬傳說（橋辨慶傳說）
奧州下り及び關原與市傳說
常磐御前殺害傳說（山中常磐傳說）

（古淨瑠璃の義經地獄破にも見えてゐる。後操・歌舞伎の材料には、熊坂物に屢ゝ用ゐられてゐる傳說である。なほ右の古淨瑠璃は、天狗の內裏とは說話上では全然關係は無い。）

熊坂長範傳說
淨瑠璃姫傳說（淨瑠璃十二段草子の內容）
鬼一法眼傳說
島渡り傳說（御伽草子御曹子島渡りの內容）
繼信身替傳說
梶原讒言の因緣談
（謠曲沼捜に見えると同じ義經の前生が鼠だつたといふ話。）

を含んでゐるのでもわかる。そしてこれらの諸傳說には、其の發生は比較的古いのもあるが、茲に語られてゐる形について觀れば、進展した後の姿で大抵は示されてゐるのでもわかる。しかもかく諸傳說を集めようと試みたにかゝはらず、德川初期から漸次盛に見えて來る義經蝦夷渡傳說（高館生脫傳說の一種としての）を收めてはゐない。（序に、此の傳說が作品化せられたものでは、先づ近松の源義經將棊經――義經將棊經と題した別本もあつて、詞章に異同があり、少し古い作らしいが大體同じもの――あたりが早いもののやうに思ふ。）此の點からも、略、室町末、戰國頃の作、丁度南蠻人渡來前後のものとして矛盾は無いやうである。

若し天狗の內裏が、原詩乃至原說話の直接の靈案であつたら論無しとして、素材たる牛若丸地獄廻傳說が既に生成しつゝあつたとする場合、作品化せられる以前の同傳說にまで、以上の推論を及ぼす事は、イニーアス傳說が義經傳說に轉化した時と天狗の內裏の作られた時との間の距離が餘り長くない、或は殆どない位であるといふこと、そして、其の素材たる說話の骨子が比較的忠實に敍せられて甚だしい潤色を蒙つてゐないといふ假定の下にのみ許される――他に何等の外部的旁證資料もなく、或文學作品を通して傳說の本態に關する論究を試みねばならぬ場合の止むを得ざる方法であるが、特に作家の個性の著しくない當代の文學作品に在つては、屢、此の假定が殆ど無條件に近い程度で適用せられ得るやうに思ふ。――のであつて、若し亦イニーアス傳說の變形と明らかに認められるやうな古い說話資料が、內國的に或は還海外土なり大陸なりに發見せられゝば、一層移入の徑路が明白となつて興味が深いのであるけれども、今は是以上言ふことは出來ない。

一〇

唯、私の上に述べた推測を間接に助成し、貧しい私の空想を更に刺戟し展開させてくれる一の事實を、新村出博士著續南蠻廣記の「南風」の一篇によつて訓へられること

を附記しておきたい。それは同篇に於て博士が追憶してをられる「極東流竄の詩人カモエンス」(Camoens)の事である。大敍事詩ルシアダスを遺して薄命に世を辭した亞媽港の詩仙洞主の事である。特に博士は其の第六節の「ルシアダスと百合若物語」に於て、ウリッセスの物語(オディッシイ)の日本移植に關する推測を述べてをられる中に、次のやうに言うてをられる。

されば、十六世紀の遲くも後半期には、國都の建立者たるウリッセスの物語は、人口に膾炙して居たらうし、古典講讀の餘波で、ホメーロスの原作の筋も當代の人心に觸れて廣く知れ亙つてゐたらうから、彼是の因緣相輔けて、東洋へ渡つた船頭や商賈達は此物語に非常な興味を感じてゐたらうと思はれる。況んや彼等自身は皆オヂッソイスであり、オヂッソイスの船子どもで有つたので、到る處同樣の冒險をして、風が變つて御舟の陸地に着くべき樣もなく、あやかしが付いて難儀をしたことも多くあり、海神が恨をなして、潮を蹶立て惡風を吹きかけ三叉(トリデント)の鋒を振上げて慕ひ來ると、打物わざにて叶はなかつたことも屢〻あつたらう。又港々で白拍子の樣に名殘りを惜んで御逗留を勸めたカリプソーもあつたらうから、オヂッソイスの冒險譚が彼等の口から極東の港に傳はり、更に語り繼ぎ、言ひ繼がるゝ樣になりはしなかつたらうか。若し果して百合若傳說がオヂッソイスの話から出たものとすれば、其傳つた路筋は以上の如くであつたことと考へる。彼の葡萄牙のホメーロスが媽港から更に平戸へでも配流される樣な事がなかつたのは、致方がないけれど、假に想像を逞しうすれば、日本人は媽港か滿剌加か、臥亞か、さもなくば「波濤の謫所」でカモエンスに會ふ機會があり得た筈であるから、萬一其口から古希臘の百合若の話を聞いたならば、此上もない面白い話である。現に天文十七年(西曆一五四八)薩南の若者の彌次郎(アンヂロー)が、滿剌加でシャヰエル上人に出遇つて、遂に此「東方の使徒(アポストル)」の爲に東道の主となつた事實があるではないか。況してやカモエンス自身は既に一箇のオヂッソイスである。(續南蠻廣記三七六頁―三七八頁)

イニーアスの物語も同じやうにして語り傳へられなかつたであらうか。更に、ルシアダスの中に於て東海の樂土日本島を謠つたかの葡萄牙の國民詩人の口から、若しも百合若物語の原の姿が、其の極東の島國人への耳珍しい家づとに餞けせられた機會が在り得たとするならば、此の不思議な判官幼物語の本據の鍵も、巫女の洞ならぬ詩聖の窟の奥あたりに、案外無造作に藏められてあつたかも測られぬ。そして其の餞けに用意せられた蓋然さについて空想することは、ウリッセス物語に劣らず――否

却つて以上に――自由であることが許されねばなるまい。何となれば、そのルシアダスをものするにも、其の人の詩體に則つたほどカモエンスが心醉してゐたばかりか、自ら以て任じ、且名告つた誇らしい私號は、實に新ギルギリウスのそれであつたではないか。

一一

本據の穿鑿はこれで止めよう。そこで天狗の內裏の素材がイニーアス傳說から出たとして、特に注意を逸し難い點は――そしてこれが殊に面白く感ぜられる點でもあるが――それがどんな風に日本化したかといふことである。此の泰西傳說を日本化して、其の上に住み息うてゐる時代人の思想風尙の方向、姿相である。そして此の意味からは、やはり便宜上、作品としての、そして作者不明の天狗の內裏について考察するだけで大體十分であると思ふ。否却つて其の方が、此の目的には適ふと言へる。

本據を知らずして天狗の內裏を讀めば、牛若の亡父との對面及び其の未來記といふことを外にしては、徹頭徹尾、近古の時代色の一である佛道の通俗說法の物語、三世因果の宗敎談といふ感じしか起らしめられない。題名になつてゐる天狗の內裏も、本題の說話に入る前置に過ぎない。その所謂內裏すら、牛若の觀察に隨へば「東方ならば藥師の淨土、南方ならば觀音の無垢世界」（天狗の內裏上卷）に比すべく、冥府に入るに先立つて既に安樂國は出現してゐるわけである。東光坊の膝下に學ぶ少英雄に全然無緣の事ではないが、主人公牛若丸は人穴草子の仁田四郎と同じく、唯武勇に附會して佛法の有難さを說き、因果說の實證を示さんが爲に借りられて來た史上の勇者に過ぎない形になり了つてゐる。

卽ち淨土に於ける父子の對面――それも半ばは佛法問答である――を除外すれば、本傳說の主要部分は地獄極樂の說明である。その亡父義朝も亦今は尊く有難い大日如來にましますのである。血族關係上の父たるのみならず、得道成佛の御法の父にましますのである。イリジアムの樂園に遊ぶ殉國者の諸靈の一と云ふだけではないのである。牛若丸自身も亦實に、御曹子島渡りに於て信ぜられたと同じく、「もとより此君は毘沙門の御再誕の若君」（天狗の內裏上卷）なので、罪障深い汚濁の凡夫とは自ら異なるのである。イニードの黃金の枝の難題の代りには、禪家の公案式の奇問がある。リビアの海を渡る時神の犧牲となり、底の水屑と消えて葬られなかつた爲に、黑河の彼方に渡られぬ冥府の掟をかこつパリニューラスと、餓鬼道に雀躍して喜ぶ理由を牛

若に問はれて、

われらが身に嬉しき事の候。それがし七世の孫一人今娑婆に有りけるが出家になり候が、やがて浮かまん嬉しさに、これのみ笑ひ候（天狗の内裏上卷）

と答へる餓鬼とを比せよ。修羅道の苦患を救するのも、之を免れる唯一の方法たる佛法信心を勸めんが爲である。一世の契の親子、生界を異にする義朝が、隔ての雲霧を拂つて尊容を現し、始めて對面を許したのも、實に牛若が有難くも三世を悟り佛道に通じてゐた功德の爲である。一千七百則を明し禪機の妙諦を體得してゐたが爲である。恰も彼にあつて、物語にかなり重きをなすところの、冥府の后への贈物たる黃金の枝が、生界の人間を渡すことを拒んだ黑河の渡守ケーロン(Charon)に對して、有効な關手形となつてゐるのと軌を一にしてゐるとも言へよう。地獄極樂の狀は全く佛說のそれで、否、漸次に日本でつくり上げられて來た光景で、嬰兒界・寃死界等の諸地獄は所謂一百三十六地獄となり、極樂も同じ樂土ながら、勿論決して泰西神話のイリジァムではなくて、西方九品の安養淨土である。從つてリーシー(Lethe)の忘水の如きは全く省かれてゐる。唯炎の山と血の池とを忠實に原傳說に相應せしめてある位なら、黑河を三途の川に見立てなんだのが寧ろ不思議である。（かういふ點も直接の飜案でない反證となり得ないであらうか。）冥府に入る時犧牲を獻ずることの有無も、彼我宗教上の習慣の相違から來てゐるのは勿論のことである。緣の草に安坐してゐるアンカイシーズは、そのまゝ移して無熱池の蓮華の上の大日如來とするに手間がかゝらなかつたらうが、原質の說明は彼我比較して自ら變つてゐるのが認められる。

大日如來と牛若との佛法問答こそは、地獄極樂の說き明かしと共に作者の意を用ゐたところであらうが、全然義朝父子の對話であることの意識が消失せしめられることと、なほ曾我物語の五郎の博識、少將の法問の類と同斷である。原說話からの形態的變化といふ點には、寧ろ直接の關係のないものではあらうけれども、日本化に際しての時代裝の最も著しい粉飾でなければならない。

更に末段の所謂未來記として義朝の大日如來が豫言するところも、史實と傳說とを網羅し映示しようとしてゐると同時に、これ亦なほ佛說の宿命觀によつて律せられることから解放せられ得ないのみか、却つて其の立場からした義經の一生の解釋でもある。殊に梶原讒言の來由が、前生に廻國の頭陀であつた景時坊の梶原が笈の中に飛び入つて、經論の文字を喫ひ破つた鼠の後身牛若の忍受すべき應報であると

いふ奇拔な因果物語は、當時一部に行はれた珍しい傳說として、そして亦、こゝまで浸潤してゐる通俗佛說の一般傾向を語つてゐるものとして、多少の興味を感ぜしめるものがある。

一二

偶々大天狗が此の物語に出て來て牛若と師弟の約を結ぶけれど、これは畢竟附加的の意味で、前にも述べたやうに、鞍馬天狗傳說が都合よく利用されたといふだけである。此の作が謠曲鞍馬天狗より後のものであらうことの助證を――天狗の內裏に尋ね到つた牛若が、今日の花の番に選ばれて迷うて來た稚兒と名告るなどの事と共に――示してゐるにとゞまる。牛若をして地獄極樂を廻らせるに際して、これが案內者を求めるのに、否イニーアスを導いた巫女に相當せしめる人物を求めるにあたつて、最も牛若に關係淺からざる而して非人間的なる大天狗に於て、恰好の役者(アクター)を得たといふだけである。尤も、太平記(卷二〇)「結城入道墮地獄事」に於ける入道が墮ちてゐる地獄を見せる爲に、その所緣の行脚僧を導いたのは怪しの山伏であつたことは、その「山伏の引導(しるべ)に相從ひ、遙に行きて見るに、鐵の築地をついて金銀の樓門を立て」「門より入つて內を見るに、綺麗にして美を盡せる佛殿」のあつたことや(天狗の內裏は五色の築地に金銀鐵石の門つ中にある。)入道の遺言が

されば愚息にて候大藏權少輔にも、我後生を弔はんと思はば、供物施僧の作善をも致すべからず、更に稱名讀經の追賣をも爲すべからず。唯朝敵の首を取つて、我墓の前に懸並べて見すべしと云置きける由傳へて給はり候へ。

といふ所謂大惡念であつたことと共に看過せられ難い點であるが、これだけから、或は前に擧げてみた個々の材料の綜合から本說話が創り出されたと强ひて考へる前に、なほかの既に全く骨子が構成せられてある外來說話の變形と看られ得る自然さに就きたいと思ふ。そして勿論右に引いた太平記の文などが、此の變形の過程を一層無理でないものにする爲に、或は作品としての天狗の內裏の成立を看る爲に、直接か間接かに助成し、或は吸引せられたのでもあらうことを否定する必要もない。但しかの入道道忠の墮ちた地獄は、これも、牛若の觀たそれとは描寫の上に直接の關係を認め難く、又「十惡五逆重障過極の惡人」である結城上野を淨土の蓮臺に見出す筈もなく、それに、案內者の山伏の本體は、其の聯想の最も自然なるべき鼻高の化生ではなくて、意外にも「六道能化の地藏薩埵」であり、そして總べては草野の曉夢であつた事を附言しておかねばならぬ。

さて又、大天狗の他に、今一人一寸重要な人物、卽ち、天狗の內裏に住む唯一人の人間、甲斐の國、こさん長者の獨り娘きぬひき姫といふ妙な女も、彼女が天狗の妻となつた由來談として、管絃に上達してゐることを高慢した瞬間に攫はれたといふありふれた謠曲樒天狗式の挿話を有つてゐるのであるが、——或は地方的の一口碑だつたのかも知れぬ。——詮ずる處唯其の補助として、グラウカス(Glaucus)の娘なる巫女ディーフホーブ(Deiphobe)の役を、彼女の夫なる大天狗と分擔してゐるに過ぎない。

一三

要するに天狗の內裏は、義經物には違ひないが、作品の性質の上からは、全く、近古小說中に一群をなす佛敎物の一である。なほ詳しく言へば、武勇傳說(ヘルデンザーゲ)に結合せられた宗敎法談物である。羅馬の建國神話はかくて日本に於ては、一の佛道說法方便の物語となり了つてゐるのである。そしてそれは又極めて自然な行き方であつた。畢竟、安養淨土の摩訶毘盧遮那佛の口からして、牛若の使命が佛道修行に非ずして平家討滅に在ることを力說せしめた矛盾は、結城入道にも示される近古武人の思想に自ら合致すると共に、原傳說を忠實に踏襲した結果と、餘りに明白な義經の史上の功業を否定することが出來なかつたが爲に他ならぬ。しかも、

保元平治の亂に、一門皆討たれぬれば菩提を弔ふ爲ならば、出家もめでたかるべし。又親の敵を討ち、本意を遂げん爲ならば、弓箭を取りて孝養に報ぜんと思へば、忍びの涙堰きあへず。(天狗の內裏上卷)

此の信仰に專念する心と、俱に天を戴かざる父の讐を復せねばならぬ義務と、いづれにつくべきかは、牛若の最大の惱であると同時に、時人の解決し得ざる迷である。現世の鬪戰殺戮の報は今眼前の修羅道の慘劇であるかと心を寒うすれば、父の仇を討ち得ずして死んだ者は、「我と我が身を切りつ突きつ、一方ならぬ苦患」(天狗の內裏上卷)を科せられねばならぬ。九族天に生ずる出家の功德を、餓鬼道に悅ぶ聲に聽いて共感を禁ぜぬ邉もなく、

千部萬部の經もいらず。敵を討ちてたび給へ。(天狗の內裏下卷)

と、佛にも猶苦しみのありといふ意外の事實を、涙に曇る慈父の御佛に親しく口說き立てられては、流石鞍馬育の名譽の才童、毘沙門天王の再誕の若君も、たゞ當惑の他はないのである。結局、これが解決の道は、

娑婆の軍の其時に、討つ敵をば鐘となし、劍を撞木と觀念し過去の因果は斯くの如し、未來は共に成佛と、思はば卽ち解說なるべし。(天狗の內裏上卷)

といふに在るらしい。そして

かやうの事を聞くからに、此世のうちは仁義禮智信を表とし、内には後生菩提を願ふべし。これも源氏末繁昌、百代の御果報故とぞ見えたりける。（下卷）

といふ結びの文辭が、多くの本地物をはじめ、當代同種小說に看る類型的外面的な常套句であるにもせよ――一面から言へば却つてそれだけに――やはり天狗の內裏の中心思想は無造作に其處に言ひ盡くされてゐる。時代人の常識的な精神生活の準則と宿命の因果律とが、鷹揚な滿足と當然の感銘とを以て肯定せられ訓示せられてゐるところに、孔孟と瞿曇、英雄崇拜と後世安樂、參學と念佛と、それ〴〵相互に好意を示し合ひながら雜居してゐるところに、僞りなき我が中世生活の一面が浮出てゐる。

義朝の大日如來も天外的の奇想なら、毘沙門の再誕といふ若君が、又毘沙門に祈誓するのも可笑しく、それと一層滑稽な鼠の轉生說との關係も少しも頓着せられず、又唱名菩提の勤行と敵討の典型道德との同時の遂行を强ひる大毘廬遮那は、五戒の訓を問ひ試みる口の下から「皆鶴をんなに契をこめ」て法眼が兵法の祕卷を「盜み取」れと智慧づける御方便の有難さ、天狗の內裏に紫宸殿が在るは相當として、極樂國に大極殿の在る氣の毒な想材の貧しさ、いづれは時代其のまゝの相であり、其の時代に息づく一般大衆の知識であり、頭腦であり、傳說の轉化に際しての自然な過程であり、興味深い姿態である。

唯全說話――或は此の小說といふ方が當らう。――に瀰漫してゐる佛敎色は、特に、密敎系（西方極樂世界の主としての大日の信仰などから考へても）と言へようし、或は曹洞派の禪家などに關係ある人（僧侶と定めるわけにはいかぬが）の手によつて作品化せられたものではあるまいかといふ推測を起さしめるやうな感があることを附言して置かう。血の池地獄の女人血盆經（註）の敎なども此の考を助ける一つの資料になるであらう。

註　「婆婆にて百三十三品の血盆經をも保ち」（天狗の內裏上卷）

一四

最後に、上に述べたやうに、時代裝の中に裏まれて全く法談物となつてゐるにかゝはらず、此の傳說は、珍しくもなほ十分に日本化しきつてゐないものであると言ひ添へたい。全體の說話及び精神に於て何となく純日本說話としてはそぐはない感じがするだけでなく、部分的に說話の結構にみても、主人公がイニーアスから牛若に變り、巫女と天狗とが好對照をなす以上、聖山は鞍馬山で、アポローの神殿は毘沙門堂で

なければならなかつたのは好都合であつたとしても、原傳說に於て、地獄への通路が彼の國のヴィシューヴィアスか何かの噴火口を聯想させるのに應じて、鞍馬山から出かけて先づ見物するのが、これ亦同じく大噴火口と思はれる書き振りの炎の山であるなど、おのづから其の本據の痕を示してゐるやうにも感ぜられる處すらある。牛若が、天狗の內裏といふものを見たいと思ひ立つのも唐突で、これが搜索に腐心し祈誓までする理由も少しく漠然としてゐて甚だ妙である。鞍馬天狗傳說への結びつきが、其の動機と條件とに於ては甚だ自然であるやうであるけれども、事實は唯借りられたといふだけで、融化してゐないのも、一面本據が他に在るべきことの想像の餘地をおのづから殘してゐると觀られないであらうか。

出來上つた牛若地獄廻傳說、乃至天狗の內裏を、義經傳說及び義經文學の中の一として取扱ふ場合には、又別の意義を加へて來る。そして此の立場からはもつと言はねばならぬ事がいろ〳〵とある。併し此處では、唯此の物語の本據が泰西傳說であるらしいのが面白く、且若しさうならば東西交通史の一資料にもならうといふこと、それが日本化乃至作品化するに當つて如何なる國土的及び時代的個性的なところは殆ど稀薄であるから)改變着色を蒙つたかといふこと、それに國民英雄として同情尊崇をあつめてゐる判官贔屓の主人公に結びついたといふ事實、これらの點に對して注意を喚起するのを眼目として考察を加へてみたのである。

附記。本稿は初め東亞之光に發表し、後書き改めて新潮社の日本文學講座に收載したものを今回補正したものである。